標註七部集

坤

標注七部集

しどろもどろといふ気をたす形容して取次と書
とと云てみむハ物をれ手元びし
たまと云ハ而有（テアリ）ト云心をカヨフ

渚宮藏

七部集盛行于世久矣其爲書也彰妙於
言外微巧於單辭使讀者不倦且悟入其
奥旨可謂盡矣然鑽厲有年間句棘難解
未有能正之者或一家妄説或自己臆斷
區々紛々至于今吾國有西馬師耽情蕉
翁學旁渉獵百家西行東遊遂獲七部集
善本更訂魚魯益諸註遺漏提要鉤玄名
曰標註七部集稿成將上梓未半病厚臨

終願請託予遺稿删復補闕吾塵纓暇正
くゝ所聞不敢加憶度檢手書校之乃成定
本令友人幹雄掌梓於是乎邪論日去正
風月新識從此岐至彼道捷徑偏移風化
俗一餘師云爾

元治紀元甲子季春

上毛後學琴堂識

江戸秋巖原翬書

七部集標注凡例

此書ハ俳諧第一の尊き文なれハ中興以来此徒宗師
たりしの後あるをあらまし八人の知る要なきを彼是
取捨撰ミ 中々ハよく理を要とせ明き細説を加ふるものなり
て初学の人の速に解し或ハ撰句の意味を知り得
せる者の為也 此書を歎く種々の説を挙ひて先ハ三子にて
其の旨に照らし 彼を捨て是をば取るもの多く古人の
意を含ミ を補ひこれを句毎の所々に加へ門葉ぶり
から吾知る人とすさ其の数を取り書きハ自ら古人
守りしゆゑに必ずしもとそ 椿木にありけれは皆思ひて
なほ見ゆる以て木半なるたりして附録も

八ちはし拙なしすらの遠慮なのこともし思ひちかて剽窃
ぬ故ゆゑなきのみなきたるをかりしのはなかし此発句八必しも
偏乏人ならんまて古人の発句解釈をなすらすかし
と云へし　その為八辭し作るもの字体の外は外に得さし
きる事又八見ん人心をそへらさんハ安かるべからん今昔七部の
標注をあらかすと云ふもの是ぞ乃蕪に解り　また安らん古事
古歌名所地名皆有名ある者に至るまでをはの中にえ安し
きあり又八原本学者の俳諧等をそふして句を見る人の助
となるものと加へあきハ注釈おほからきるやうに思ふ人
し発句の人　必注を力として句を解ん人なくんハ
句を而て心の深き時ハ注をよんでその深りを深くへし

その文字の長きを更文八継ものわかろをくてし彼しも是
あらし總をくるくして句の志らん八年月をかきねとも何にても
ますとしそれまら事

一詩題の部原本とある違するあるハ其出書によりて正し
前後の句を改めて正しき八本文をもよろしあるなり古人の名八
朗詠よまくろし　あくハ遠へかあるへし　詩縁ハ諷もる
のそ文をあらためそのまるとの

一世の七部集もの多るとた俳諧するを悉く出るものとなし
句するハその句の味をもつくる変化の順を見んするものなる

一引書文長き出ハ要し大あけ出出をなそて何に何なと
と守こ八本書よりてさへし

一初心の解しかたき句は先達の説を以て注を加ふ
なるたけは強て加へ不

一異本又は校合決定しかたきもの写をと撰者没後なれは敢
て正さす後の学者の考を待へし

潜窓ミき梅述

[illegible]

ハ疑ヒナリ世ニ云ウタカヒノ心ト唱ルハハツカシキト云 傳ニ曰 疑ナクハ眼又
疑フヘカラズ天地自然ノ理ニシテ一天ノ事ヲ貴白ニ似テアル乳トウタカフ
故ニ眼ニタリヤト疑フタルヿカヽル定規ノアルヿナリ傳トモ法トモ云テ晦ス

潜窓[illegible]述

打もつゝも[illegible]にやつれ衣を振ぞ袖

一書ハ杜子美カ老大悲傷未拂衣ト云ル句ヲ含テ前書トスト云ハ非也

一書ニ前書ハ如ク旅衣千仞岡ニ濯足万里流ト思ヒノ儘ニ秋津洲ノ国々ヲ経廻ル名所古跡ヲ遍歴シテ泉石ヲ尋ヌト云 曲礼曰十年曰幼学二十年曰弱冠三十年曰壮

[illegible]

一書ニ前ノ鏡ナキ泉石ヲ尋ネ煙霞ニ分入月ニ雲ニ雅懐ヲ述テ生涯ヲ楽アントハ年久シニ思フト然モ五斗米ノ為ニ足ヲ縛ラレテ今猶其望ヲ果サズ官禄ヲ眠事ヲ得スシテ今年ノ雪モ得ノ霜ヲ見ルヨト歎息シタル余意限リナシ 扨其句ニ切字ノ事 諸家迄モ論シテ初心ノ惑ニナカラズ依テ毛切字無キハ其句ニ立ズト頑ニ教ル也 然レ切字ノ入所ナキヲモ拼テ切字ヲ讀ト節ヲ句ノ意ヲ損フモノ数多アリトゾ 当時ハ[illegible]

先切字ノ口傳ヲアラマシ茲ニ記ス 新式ニ切字ノ事ハ初心ノ弁ル為ナレハ宗匠情ヲ半ク伝授スヘシト云々 先哲ハ混沌ノ間ヨリ太極ノ一気湧出タレ陰陽ノ姿ノ分レ出レハ其句ニ切字ヲ用ル時物二ツニナレハ如キ天地陰陽トナルナリ 切字ヲ用ルハ物ニ対シテ看別ノ義也 切字ト云ハ発句ノ丈高カラン為ニ切字ヲ用ユ 平句ト姿ヲ分カ見カ為也 略

惟然曰 切ハ節也 竹ハ節アル故ニ[illegible]モノナレハ 切ハ節ノ如シトソ 切字ヲ入ヘキ句ニ無ト切字ヲ入サル[illegible]翁ノ秋風ヲ[illegible]桑の杖

此句ハ[illegible]嵐蘭カ追悼ノ句也 当帰よりあはれは塚の菫草

此句ハ去来ノ[illegible]死カ旅中ニ死タルヲ悼ム句也 句解ニ当帰ハ当ニ帰ルキモノ意ニモテ古園ニモ帰ラン事ヲ待甚身モ帰ント思ヒツランニ悲シハ塚ニ住ムト云句 鎖リニシテ帰ルト住トノ語對也 此間ニ切字ヲ用ヒサルハ[illegible]第ハ三世ノ奇縁ナレハ 社切ラサルハ翁ノ微意也 略

[illegible]日 我門ニテハ 切レ字トハ云ス断字ト云ト也 茲ニ嵐蘭[illegible]死カ悼ノ句ノ事ハ金花伝ニ此事ヲ云キ 又夫ヲロ真似モ多ルハ[illegible]シ 世上ノ俳者ツヲ見及フニ此ヲヨキ事ト思フ輩百人ニ九十九人也 都テ法ト云事ヲ知ズ 故ニ此言勝ノ権ニ成行ク 社ハカナケレ大切ノ秘伝ナレトモ歩ト計リ片端ヲ云ヘシ 切(セツ) 非モ 切字ト

[illegible]

浅間布治ヲ詠ミ世上ノ俳客ヲ見及フニ皆レヲヨキ〻ト思フ輩百人
ニ九十九人シ於テ法ト云〻ヲ知又故ニ此言勝ノ程ヲ成行ク社ハカ
ナケレ大切ノ秘伝ナレドモ少ト斗リ片端ヲ云ヘシ　抑モ　切字ト
云ハ切ル〻ニアラズキレ字ニテナク　切字ト云モノシ甚
カ　新字ト云モヨカラン　切字云フ訳ハ至テ重キ大事ナレ
ハアラハニ書顕ハシ難シ　深切大切抔云フ詞ニテモ悟ルヘシ
婚姻祝義ノ句ニ必ス切字ヲ入ヘシ切字ナケレハ陰陽カ不
ラス　彼レト是レトヲ合セテ夫婦合体ノ〻ナレハ一本立ニテハ淋
又故之夫婦婚姻ホド重キ〻ノナキニ切字カ入ラネハ成又ト
云フヲ姻ハ三世ノ縁ナレハ切レ字ヲ入又カ云羽ノ徴意シト
結タル〻ソヤ抱キ云〻シ夫婦ニ切字ヲ入ルレハ切レルト云テ一本立
ノ句ヲナスルヤ如何ニ初心ノ輩ケ植ナル妄言ヲ努〻識ト思フヘカラズ同生
又旨至近歌本式伝ニ切字ハ格字シト有リ切字ノナキハ発ルヘカラズ切
字ハ発句ヨリ格ナレハ必アルヘシ　翁ノ常言ニ格ハ守ルヘシ格中ニ居ルハ
狭シ格外ニ走ルハ法外シ格ヲ得テ格外ニ抱ツヘシ此論ヲ如何心得テ
斯ハ云フゾ格ト云ハ切字　格字ノ格トハ大違ヒシ　格字トハ俳名ハ格日格
唐格子抔ノ類ニテ定リタルヲ打ヤハラゲテ切字ヲ格字トハ謎言シ格
外　格外ノ義ハ発句附句ニ係ラス一座〻ハ擽ナニアル〻シ必ス見
ト混スヘカラズ

一 初心の解しかね白河集の事もありとの説の沒後
かゝる事ハ強て加へ侍
一 里本文ハ校合迄至りしかとも其の事をも撰者沒後なれハ敢

[illegible]

竹翁ノ了ハ知若翁ト青ケヤブ医者ト云ノ謙称シ既ニ道モ鎚知若翁ト号不シ久リキ
俳諧ハケウカル気性ナレハ次第ニ病家モウスクナリユキ業ノハカヽシカラザルナヲモテ
遂ニ風狂シ終ニ狂歌ノ奴トナリヌヲ風雅ニ任セシ祖翁モ武家ニハアリ
ナカラ身ノ気丈ニシテ例ノ士タルモノハヤブ
医ト同前シ既ニ幻住菴ノ記ニモ仕官懸命
ノ地ヲウラヤムト珠ニハカミツクリ主人ニナリ
身ノ拙キヲ見カキリテノ風狂隠遁ニシテ
終ニ俳諧ノ奴トナリ冬の日アラシシキニ
笠ノオヨロビ紙衣ノヤフレ我サヘアハレニ
覚テ昔狂歌ノオ士竹翁ト云モ此ヲ風狂セシ了忘ヒ合セテ竹翁ト
我身ト不肖ナル了ノ似テアルト観しまへんなし一言ニ似たる我ハうきおト
云フハ甚タヒカナし是ハ俗ニ云疑ノ外ニテ本名を捨ノ載し割を捨テ芋
ハ疑ヒナリ世ニ云ラメカヒノ外ト唱ルハハツカレキナニ傳ニ曰貴タ疑ナクハ眼又
疑フヘカラズ天地自然ノ理ニシテ一天了し貴タニ似テアルトウタカフ
故ニ眼ニタリヤト疑フタルしカヘル定枕ノアルナナ傳トモ云し

惺庵西馬述
潜窓こき雄編
不知庵寄三校

布由濃日

題号ノ説多シトイヘトモ巻頭句々皆冬季ナリヨツテ冬ノ日ト云カ諸解畧之
途ハ道ナリ
侘ハ失意ノ貌
狂句ノ二字後ニ取捨アリトイヘトモコヽニ云狂歌ノ縁應タリ貞享ノ初年マデハ字余リノ作多シ
竹斎ハ山城ノ人尾ノ名古屋ニモ居住ス寛文年間ノ人ナリ天和三年印本竹斎物語狂歌数多アリサレトコヽニ拠トスヘキ歌ナシ此句哉トイヘトモ和歌ニハ此哉多シ韻ノ哉トモ云
とばしるハ飛走ノ意原本濁点アリ炭俵ニとぼしるも点子句アリトモアリ
主水職原抄聞書ニ掌泉水

冬の日

笠は長途の雨にほころび紙衣はとまり〳〵のあらしにもめたり侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえける むかし狂歌の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとばしる笠の山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国

井水又米室官名ニテ人倫打越ノ論ナシト云
朝鮮芒トイフ一種アリ万葉ニ艶ヲニホヒト訓リ
髪をやすむハ業平舌事江記ニ業平為生髪到陸奥云々又倭名抄ニモ出
たへしハ堪ニナリ
伊勢浮洲又摂津田中村ニモ有ト云
小万ヵ墓印ノ柳ナリ
ちんばハ跉跛
さかしき日本紀明達（サカシ）又山家集ニ

日のちり〳〵に野に米を刈　正平
我庵は鷺に宿かすあたりにて　野水
髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮
影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧に舟ひく人はちんばか　野水
たそがれを横にながむる月ほそし　杜国
隣さかしき町に下り居る　重五

あらち山さうりハ下ろニ云或カク袮證
アレトモコヽハ俗ニ云一點ニシキ コトナルヘシ
中古カヽル支持ノ詞多シ
二の尼ハ一鶴ニ鶴ト云カ如シ
近衛のむしハ西行櫻ノ謡ニ近衛
家ノ糸櫻トアリ
鼻ニのむハ泗ナリ詩ノ陳風傳ニ
自鼻曰泗
熊坂物見ノ松ハ美濃國青野ノ
原ニアリ白雲水ハ同國郡上郡
宮瀬川ノ邉ニアリ 對附ナリ

唐苣ハ萵苣自萵國来故ニ云ク
家園ニ多ク栽ル白苣ヲ光レリ

烏賊のうらかたハ古事記万葉ホニ鹿ノ
肩焼見エタリ唐土ニ亀トアリ西
戎ニ羊トアリ其ノ轉カ

二の尼に近衛の花の盛りきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
乗物に簾透顔おぼろなる　重五
今ぞ恨の矢をはなつ聲　荷兮
盗人の記念の松の吹をれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜国
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらじらと砕けしは人の骨か何　杜国
烏賊はゑびすの國のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけじ郭公　野水

秋水一斗ハ漏刻ヲ云ナリ
事苑ニ日東ハ則日本國也
石川丈山ヲ日東ノ李杜ト云フ
先哲叢談ニ及ヒ素堂カ詩アリ
五車韻瑞ニ汝陽王璡打曲明
皇自摘紅槿置璡帽上
とゆらふハ弔ナリ
鮗ハ俗字和名抄ニ鰶又鰶
居湯ハ釜ノ湯風呂桶ナリ
漉てト讀又漉トモ云
白氏文集ニ巻十二月照藤花影上
階

秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
牛の跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　杜国
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふは妹の眉かきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜国
廊下は藤のかげつたふ也　重五

文選ニ振衣千仞岡ニ左太冲
杜律ニ老大徒悲未拂衣ヲ
まぎれ又ト云ハ非ナルヘシ
を 躭ナリ
麻呂ハ上古男子ノ通稱ニ多シ
カツコ
鞨鼓ハ樂器ナリ
貞徳ハ風雅ニ富ミ且長壽ナリ
桃園巧藥園ガ園ヲ丸屋ホノ
別荘アリ
淺香ハ陸奥 雨戯ルニテ淺シト云ニ
俳諧ノ疑辯カ又乞丐ノ假名ノ
男ヘル力

おもへども壮年
いまだころもを振はん
埜水

はつ雪のことしも袴きてかへる

霜にまだ見る蕣の食 杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて 芭蕉
鶉ふけれと車ひきけり 荷兮
麻呂か月袖に鞨鼓をならすらん 重五
桃花をたをる貞徳の富 正平
雨こゆる淺香の田螺掘うゑて 杜國
奥のきさらぎを只なきに泣 野水
床更て語れハいとこなる男 荷兮

疣ミ 瘤ハ借字カ
譏ト 譏ナリ
縄網のかゞりハ鞠掛りナラン
巍シ 違ヒ附ナリ
カブロ
禿童いくらハ幾許等年ソト
尋問意ナリ
春季ヲ用ヒスシテ春ナリ

縁さまたけの恨のこりし 芭蕉
口おしと瘤をちぎるちからなき 野水
明日ハかたきに首送りせん 重五
小三太に盃とらせひとうたひ 芭蕉
月ハ遅かれ牡丹ぬす人 杜國
縄あみのかゞりハやぶれ壁落て 重五
こつそりとのく芝居きく町 荷兮
初はなの世とや嫁のいかめしく 杜國
かぶろいくらの春ぞかはゆき 野水
櫛筥に餅すゆる閨ほのかなる 荷兮
うぐひす起よ紙燭とぼして 芭蕉

不破ハ美濃ナリ今ハ関ナシ古集ニハ名所地名ニ多ク蔕ノ附アリ

礼記ニ大夫七十而致事若不得謝則必賜杖云云 今七十古来稀ト云

傘ハ俗字正字繖ナリ

唐輪(カラワ)ハ髷(マゲ)ノ名ナリ

慧照禅師ノ母ノ面影ナリ臨濟ハ院ノ名ナリ

四部録十牛圖ニある称号深山

篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水

三線からん不破の関人　重五

道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉

ねざめ〳〵のさても七十　杜國

奉加めす御堂に金(コガネ)ほとけちいさき　重五

ひとつの傘の下挙(コゾ)りさす　荷兮

蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮　杜國

窓に手づから薄様をすき　野水

月にたてる唐輪の髪の赤枯て　荷兮

恋せぬきぬた臨済(リンサイ)をまつ　芭蕉

臨濟ハ達磨の骨髓と大喝人を打又人を接法を[illegible]

秋蝉の虚(カラ)に声きくしづかさは　野水

の牛ともみえし〳〵とあるく[illegible]

秋蟬藤實ニ一句一意アリ

職原抄内侍司ニ尚侍二人典侍(スケ)四人

平家物語小原御幸ノ面影ナリ

三日の花ハ上巳ナリ鳥軍ハ鬪雞ノ一轉ト云

白髪トモ白紙トモ云リ一本ニ白雲ニ誤ル

字典ニ兩足曰歩一歩ハ六尺也

古本ニ霧雨ハ書損和名抄ニ霡霂(ニクレ)雨 字彙ニ小雨也

稲妻ハ比喩ナリ

齒朶(シダ)ハ裏白ナリ

藤の実つたふ雫ほつちり　重五

袂より硯をひらき山かげに　芭蕉

ひとりは典侍(スケ)の局(ツボネ)か内侍(ナイシ)か　杜國

三ケの花鸚鵡(アフム)尾ながの鳥いくさ　重五

しらかみいさむ越の独活苅　荷兮

杖をひく事僅に十歩　杜國

つゝみを越て月より落る霡霂　重五

氷ばしり水の稲つま　重五

齒朶の葉を初狩人の矢に負て　野水

扇ハ扇形ニ編タル具ナリ

ラウタシ 勞氣 俗ニカハユケナリ 大和物語ニ女あり其の容意慕の男二人ありけるをさしもあらぬなとやかくおもひ又物をおこせるなとやかくおもひなり一云云 コノ一轉カ畧シテ云ヘスミ

シカラキハ近江ナリ 坊ハ邑里ノ名ナリ

雛ニ云 雛ナリ

命婦ハ職原抄ニ中臈トアリ又頒人帯五位以上ニ云 なとを来るナリ

北の御門をおしあけのはる　芭蕉

馬糞かく扇に風のうちかすみ　荷兮

茶の湯者おしむ野辺の蒲公英　正平

らうたげに物よむ娘かしづきて　重五

燈籠ふたつになさけくらぶる　杜国

露萩の相撲力を撰ばれず　芭蕉

蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　野水

朝月夜双六打の旅ねして　杜国

紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮

しのぶまのわざとて雛を作りゐる　野水

命婦の君より米なんどこす　重五

籬ハ釋名ニ以柴作之

津浪 洪濤

解ハ庖丁スルナリ

縣ハ田舎ナリ縣をふるハ経ルナリ花見次郎ニ附會ノ説アリ

五形ハ碎米薺ナリ蓮花草トモ云 公事根元ノ御形ニハ非ス

原本ちりくナリ一本ちよくハ非ナリ

呼出ノやナリヤニ心ナシ地留名 シカラスコレハ蘚キノ義也

平家物語妹の子はもらふたまたまこそ来まゝよれ此一轉カ

釋恵崇カ詩ニ笠重呉天雪 鞋香楚地花

籬まで津浪の水にくづれ行　荷兮

佛喰たる魚解きけり　芭蕉

縣ふる花見次郎と仰がれて　重五

五形菫の畠六反　杜国

うれしげに囀る雲雀ちりちりと　芭蕉

真昼の馬のねぶたがほ也　野水

岡崎や矢矧の橋のながきかな　杜国

庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮

捨し子は柴刈長にのびつらん　野水

晦日をさむく刀売る年　重五

雪の狂呉の国の笠めづらしや　荷兮

万治ノ高雄光名高シ
仇ハ他心人ナリ
南史ニ顔延之の樽を枕にして
才ハおあき樽を枕に飲うるさき底深
名をこぼす禅ハ一休禅師ノ面
影ナリ
禅ノ文字ニ事ナトモ又借テ協ス姿ト
モ云リ新トキハ後ニアレハカリテ
協スナル
おもひかねつも心のぬさを忘るゝそ
若まけ入みけしのふ
山家集 ねがはくは花のもとにて
春死なん そのきさらぎの望月
のころ

襟に高雄が片袖をとく　芭蕉
あをく人と樽を枕に呑ふさん　重五
芥子のひとへに名をこぼす禅　杜国
三ケ月の東は暗く鐘の声　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　野水
烹る事を許して魦を放ちける　杜国
声よき念仏藪をへだつる　荷兮
影うすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜るの帯引　重五
たゝ花見たちのしひむの後は　荷兮
その望の日を我もおなじく　芭蕉

一巻中弐留ニ句有各別意ナリ
万葉集 難波人葦火焼屋之酢四手雖有己妻許増常目頬次吉 拾遺ニ難波人あしびたく屋はすゝけたれおのがつまこそとこめづらな
れトアリ
色こそ黒からめサレト常めづらし
カラニノ意ナリ
職人尽歌合体ノ對附ナルヘシ
鏡磨ノ身ノ貧寒ヲ云ヘル分
原本ニドキヤウノ附カナアリ
棘ハ正字ナリ 古本棘ハ偽字
一本ニ荻ニ誤ル織ハアミタルヲ云カツ振賣
スルナリ
微ナリ古本徽ハ書損加茂ホ社稲荷
ノ祭ナリ九月上ノ午日胡麻ヲ供ス
岩倉ハ山城　加茂岩倉對附ナリ

なには津にあし火焼家を
すゝけたれど
炭売のおのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
加茂川や胡麻千代祭り微近し　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五

第三太山杉形

古本操ハ誤
山谷カ四休居士ノ詩序ニ三平二満過則休三平二満ハ俗ニ云於多福ナリおとこひやうとこノ畧カ
うねうハ嗄ナリ

本郷ハ江戸ノ地名

古本黴字書ニナシ黴ノ誤字ニテ凝ノ借字カ又黴カ諸説未詳
世の手を捨るとも…
…の意…蓮生
款冬ハ蕗ナレトモ款冬ヲ用ヒ来ル…
和名抄ニ山蕗…本草江海水ナト

おもふ事布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火おかぬ火燵なき人を見ん　芭蕉
门守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮

竟併ホノ呑ト見テ打越飲食ノ雑ナカルヘシ諸解未詳
白燕ヲ云ハ觀水通禅意ノ附意カ
宣旨ハ勅命 釵ハ婦人ノ岐笄ナリ
八十歳ヲ三ツ見ルハ七十三ト云ル説可ナルヘシ
朗詠集ニ期ノ月欲満媒ノ旁
酉陽雑俎ニ月桂高百丈ナリ 桂ノ花ハ八月ノ異名ナリ
本草ニ蘭葉可作膏塗髪ト
はやり正月云リ
晋書ニ常ニ有紫氣室劍之精…於天…
豫章ヲ付句ノ方ニテ南都ト見
カヘ名リ奈良ニ古キ仏達ト云ル也

宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜国
西南に桂のはなのつぼむ時　羽笠
蘭の油に〆木うつ音　芭蕉
賤の家に賢なる女見てかへる　重五
釣瓶に粟をあらふ日の暮　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜国
つゞみ手向る弁慶の宮　野水
寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地　羽笠

鸛 和名抄 此鳥似鶴而巣樹者也 鸛ハ字典 頭無丹頂 身似鶴 又仰天鳴則晴 俯鳴則陰 鸛又字鏡ニ出 あはれハアヽト歎ハレト笑ヒ アヽト悲ミハレト歎クコトヽイヒ 重リテあはれト云ナリ ヨツテ歎息ニモ喜悦ニモ哀楽ニワタレリ

いつきして誰ともしらぬ人の像　　荷兮

泥よりあらふ清き芹の根　　重五

粥すゝる暁寒く声細り　　野水

狩衣の下に鎧ふ春風　　芭蕉

北のかたなく〳〵簾おしやりて　　羽笠

寝らぬ夢を責るむつごと　　杜國

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　　芭蕉

樫檜山家の体を木の葉降　　重五

塩ハ物ノ数フル秋ノ詞ナリ ナカラニ通フト云ハ非ナリ

仮初 家仮初ナリ

東海道藤澤山清浄光寺不二見ノ亭トモ又駿州藤枝ノ鬼岩寺トモ云

椿トスルハ和字ナラセト万葉和名抄ニ出

題林愚抄ニ長実 [illegible] 家隆

山橘ハ万葉ニ藪柑子ヲ云コトハ八雲御抄 袖中抄 深秘抄等ニ牡丹ヲ云フツノ方ニヤ

麻刈集ハ作名ノミ

ひきずる牛の塩こぼれつゝ　　杜國

音もなき具足に月のうす〳〵と　　羽笠

酌とる童蘭切にいで　　野水

秋のころ旅の御連歌いとかりに　　芭蕉

漸くはれて富士みゆる寺　　荷兮

寂として椿の花の落る音　　杜國

茶に糸遊をそむる風の香　　重五

雉追に烏帽子の女五三十　　野水

庭に木曾作るこひの薄衣　　羽笠

夏ふかき山橘にさくらみん　　荷兮

麻かりといふ歌の集あむ　　芭蕉

獨樂庵ハ温公ガ獨樂園ノ轉カ
四間門李四句去ナリ 猶考
落櫻曲ノ轉カ
牢(ロウ)輿 公冶ノ囚人ニ…
莊子ニ曳尾於泥中ノ轉カ
水の御藥ハ水ノ粉ノ類ノ藥ナリ
和名抄ニ大角(サヽケ)豆又白角豆ナリ古本ノ小角豆ハ小豆ニ當ナリ夏ニ冬ヲ附テマスノ暑カラシム一奇ト云ヘシ
罌(ケシ)粟 芥子ハ借字

江戸近く獨楽庵と世を捨て　重五
我月出よ身をおもふ夜なる　杜國
粉衣笛に落葉を打拂ひ　羽笠
籠(ロウ)輿(コシ)ゆるす木瓜の山あひ　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の簑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜國
御幸に進む水のみくすり　重五
殊にとて大角豆の色をならし　野水
蠶屋やすぐらに罌粟はく臼　羽笠
芥子屋の山坊交りに打なれて　荷兮

元政深草瑞光寺開山至孝人ナル
所ナリ
木幡(コハタ)ハ伏見ノ東ナリ 鐘ニ花ヲ打チヲ
スヲ云
秀句ハ巻頭ノ狂句ヲ結フ
貞徳ノ時代ハ式ノ俳諧ハ烏帽子大
紋ニテ出席セリト水干ハ身ヲ着ヤ
カト轉ニ山茶花ト笠トハこのしト
揚句ニ結テ五巻ノ連環ヲナセリ

をるゝはすのみたてる蓮の実　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露おく狐風やかましき　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　荷兮
色深き男猫ひとつを捨かねて　杜國
春のしらすの雪掃をよぶ　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　羽笠

庵ハ温公ガ獨樂園ノ一轉カ

季四句去ナリ猶考

…ノ一轉カ

…尾於泥中ノ一轉カ

藥ハ水ノ粉ノ類ノ藥ナリ

大角豆又白角豆ナリ古本ニ六ホ[illegible]夏ニ冬ヲ附テ着カラシム一奇ト云ヘシ

芥子ハ借字

江を近く獨楽庵と世を捨て　重五

我月出よ身をおもひなる　杜國

秋衣笛に落葉を打拂ひ　羽笠

籠輿ゆるす木瓜の山あひ　野水

骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉

乞食の蓑をもらふしのゝめ　荷兮

泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜國

御幸に進む水のみくまり　重五

[illegible]の大角豆の夏まつりし　野水

萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠

芥子尼の小坊交りに打むれて　荷兮

…草瑞光寺開山至孝人ナル

伏見ノ東ナリ鐘ニ花ヲ打チヲ

巻頭ノ狂句ヲ結フ

時代本式ノ俳諧ニハ烏帽子大

事ニセリト本枯ノ身ヲ巻ヤ

山茶花ト笠トヲこのしト

結テ五巻一連環ナセリ

をるゝはすのみたてる蓮の実　芭蕉

しづかさに飯臺のぞく月の前　重五

露おく狐風やかなしき　杜國

釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠

豆腐つくりて母の喪に入　野水

元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉

伏見木幡の鐘はなをうつ　荷兮

色深き男猫ひとつを捨かねて　杜國

春のしらすの雪掃をよぶ　重五

水干を秀句の聖わかやかに　野水

山茶花匂ふ笠のこがらし　羽笠

表合ハ八句又六句ノ中ニ神釋戀無常述懐懐旧名所地名木其巻ニ應シテ入ル一格ナリ
茶筌髪謡ノ木賊刈面影旅僧ト酒ヲ酌コトモ文中ニアリ
四句目戀ヲフクメリ

岐阜山濃州ノ地名

天和四甲子年十月改元貞享トナル翁年四十一

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠

樽火にあふる枯原の松　荷兮

木賊刈下着に髪をちやせんして　重五

檜笠に宮をやつす朝露　杜国

銀に蛤かはん月は海　芭蕉

ひだりに橋をすかす岐阜山　野水

貞享甲子歳

枕草紙ニ春ハ曙やう〳〵しろく云云
又和歌ニ春の曙の詠多シ

重五ハ加藤善右エ門名古屋材木町ノ人後ニ宮ノ駅ノ辺ニ閑居ス

白氏文集巻十六五架三間新草堂石階桂柱竹編墻トアリ

春の日

曙見むと人々の戸扣あひて熱田
のかたにゆきぬ渡し舟さはがしく
なりゆく比菴松のこずゑも見えて
やすらひていと長閑なり重五か
草菴におも外墻をへだてゝこのきさは
あらたなる郊の景色を発句せよと
申侍る

二月十八日

春めくや人さまぐの伊勢まいり　荷兮

桜ちる中馬ながく連　重五

捄 ツチモル ツチカゴ ニナフ

笛ノ由来 次ノ作者ノ考入ハ黄帝ノ作風凰 未備ヲ崑溪ノ竹ヲ伐風凰ノ鳴声ニ合セ作リ玉フ 笛ニト是迄 配代ノ北也 テ文王ヲ附ケシ 先ラサレバ文王ノ付 ノベキ沢ナシ

霞晴テ山館ノ時ニ顯ルヽ夕月夜ノ光景ヲカク 奇工セリ

青葉ノ笛ノ旧湊

異本土ほりてをほりてト誤ル

文王の林ハ詩経大雅ニ周原膴膴 菫荼如飴 捄之陾陾 度之薨薨 築之登登 コノ章ノ意ヨリ

古本晨明ハ誤字有晨カ

山霧む月一時に館立て　雨桐

鐘なきのら跡火にあをる也　李風

汐風にまく雪も離なく　昌圭

えもりに沖の岩黒く見え　執筆

次戸寺舟汗の蜂子従ふつむ　重五

むのくなつた笛を戴く　荷兮

文王跡林になふも土ほりて　李風

竹の実跡角のなき草　雨桐

（蛩ヤチリカケ角ナキト云 角ナキ蓁ハ先モシテ角ナキ）

須くて一度ハ骨抜ぬく世に　荷兮

似猫殺をかくれ居　昌圭

雩拂ふ鏡に人の影移り　雨桐

和名抄ニ雞栖 トリヰ

鶴岡八幡ハ鳥居ヨリ社壇迄十八丁 掘テ此迄砂深クシテ三足ヲ二足ニ見ゆるが如し

榉 欅ナリ

サゲ尼ナリ 続世継ニさゝがにのさげ尼もやと見せかひてトアリ

甚長ナリ 針ハ鍼医ナリ

職原抄ニ針博士五位下 典薬頭ニ准シテ五位カ

徒跣 ハタシ

旦ぬしとのこ御甕かく里　重五

うたより実奥の砂行て　昌圭

むさや男跡残驚あぐるは　李風

柳よき塩でさうらに鞠なきや　重五

入のる日に蝶吹く夜里　荷兮

うつのりと麦をぐる家に連続て　李風

魚懐手榉き、わ新　雨桐

黒髪戦ただぬるおしん切誤し　荷兮

供も卯しきさ位の針立　昌圭

松の本に宮司の門ぐらふさきて　雨桐

まだしの絵も見えぬ時雨ぞ　重五

朝熊伊勢ナリ朝熊ノ麓ニ西行谷アリ異本ニ此句誤寫甚シ

芋洗ふ女西行ならは哥よまん是ヲ連句トナスニヤ

平家物語小督ノ局ナト面影ナルヘシ

朝朗豆腐或寺にとくる栬なる　昌圭

念佛さぶげに秋あはれ也　李風

穂蓼生ふ蔵を住居に侘なして　重五

高名を橋の名に呼る月　荷兮

傘の内もてはなる雨の漏よ　李風

朝熊おるゝ出家ぼくぼく　雨桐

わくらはに西行ならは哥讀ん　荷兮

鈎瓶ひとつ我二人して上げ　昌圭

花にあそぶ局腰に茸とりて　雨桐

記念にもらふ嵯峨の苣畑　重五

ゆく春を出た竹とよりいきのしく　昌圭

弟も兄も鳥とりにゆく　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら　旦藁

おもしろう霞かたぐの鐘　野水

春の旅節供なるらん袴着て　荷兮

口そゝぐ一き清水なかの宮ゝ　越人

松風にたをれぬ程の酒の酔　羽笠

賣ぬしたる虫をはなつ月　執筆

笠白き太秦祭る夜なり　野水

菊ある垣によんで見ておく　旦藁

奈良坂ハ奈良北ノ入口般若路ノ行キナリ

かたぐの鐘ハ寺々の鐘之名所ノ類ナレハナリ

節供ハ節句ノ古字ナリ

口そゝくハカリニテ清水ヲ雑ニアツカヒシナリ

九月十二日山城葛野郡太秦ナリ祭文奇ナリ

鮪又大口魚

法華ノ三車一乗ノ心カ

一本蚊やりして云ニ誤ル

千日万日ノ回向ナト云フハ寛文年間ヨリ始ルナリ

和名抄ニ鮎

筑紫人ノ浴衣伊勢人ノ帯ナト東西ノ国々ヨリ入来ルヲ云リ

表町ゆづりて二人髪剃ん　越人

暁いかに車ゆくすぢ　荷兮

鱈負て大津の浜に入にけり　旦藁

何やら聞ん家国の声　越人

旅衣あたゝ斗り数をおりて　羽笠

萩ふみたふす万日の原　野水

里人は薦(コモ)を施行秋の暮　越人

月なきに浪に重石(オモシ)をおく橋　羽笠

ちらひたる木の根よせの鮎とらむ　野水

諷ひやせる春の湯の山　旦藁

のどかしや筑紫の袂伊勢の帯　越人

唐ニ十眉ノ畫アリ和ハ又異ニシテクサクサアリ日本事物紀原ニ見エタリ

搗栗ヲ勝栗ト祝語ニイヒシナリ

麦の粉ハコガシナリ

千観阿闍梨ノ住玉フ摂津金龍寺ノ面影カ

魂祭ハ報恩経ニ二月十五日五月仝七月仝九月仝十二月ハ晦日ナリ

内侍のえらぶ代々の眉の図　荷兮

物思ふ軍の中は[illegible]　羽笠

名もうち栗と爺十上ケ　野水

大年は念仏唱ふるえびす柳　旦藁

とのゝぞとゑによき俤　越人

朝夕の若葉のためは枸杞の垣　荷兮

都には廿日もやでる麦の粉　羽笠

一夜かる宿は馬かふ寺なれや　野水

古き魂やるゝきはらき月　旦藁

陽炎のもえ残りたる夫婦にて　越人

まゝ袖に法寄いたゞく　荷兮

此八国栖ノ吾妻ノ歸ニ作の花見ヲ里ス吉也
中詠テ一ヲ以テけし

三津井家ノ臣ニ枚眉源三盛安アリ近世
シテ志賀寺ノ慶寺ヲ再興シ成盛若寺
ト号テ相続ス是ハ寺福寺ノ旅ナレハ
野叔ト八ク作シタルニ　次ノ夕ハ近

卅巻月四ツ出タリ三句短句ニテ
長句ニ廿九日ノ月ヲ出セル一奇ト
云ヘシ

田を持て ちえる里に生れけり　羽笠
力の節を法ぼし中の子　野水
漣や三井の末ある絵ともに　旦藁
高びくのこぞ雪の山々　越人
（江ノ山々ノ雪ヲ高色ヲアラハシアシラヒタリ）
見つけたり廿九日の月寒き　荷兮
君の法をめ氷踏ま見け　羽笠

十四

阿佛尼ノ十六夜日記ノ作ニ安嘉門院阿仏尼ト號ル子ノ為氏卿ト歸式争論ノコアリ鎌倉表エ
訴訟ニ下リ十月廿九日ノ宇天箱根ノ山ニカヽリ廿九日ノ月ノ出シヲ見玉ヒテト彼日記ニ詳ハシ
雪ノ山々ト云ヒ廿九日ノ月ト結ビタル眼力感歎ニ絶タリ　サレ二花三月ハ定リ名法ヱ見シヲ
卅巻ノ月四ツ出テタルハ世評ニ月ナキ浪ノ夕ハ八月ニ有ラズ拆云タルハ殊ニアサマシ、近加ノ
表合ニ月ナキ五ト云フモ月ニアラズヤ左様ノコハサラ〳〵ナシ　月花共一巻ノ的ナレバ
長夕ニコソスベケレ卅巻ノ月三ツナガラ短夕ノ月ナレバ爰ニ至リテ廿九日ノ月ノ井ト徴カ
ナルヲ以テソノ補ヒトハナセリトこ

君の勤めおもみゆけ

大和物語ニ壬生ノ忠岑泉ノ大将ノ御供ニテ時平公ノ御饗ニ詣テ参リ外ニ酒ナド過シタル夜痛ク更ケレバ
大臣モ驚キ子ヒテイツクニカモノシタヘルナドウブヤキナガラ御格子明テ騒セタマヒケルニ宮大夫ハ謝し
大将ノ御供ニテ御階ノ下ニ松明トボシナガラ蜒ツキ（ヒザマヅキ）御消息トヤ云テトリアヘズ忠岑
「かささきのわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけ殊更にこそ」（錦晴時雨りけり）ト宣テ大臣ノ御婦姫
克ノ學者レタヒト云云　良臣ノ勤功廣大ナリ月寒キト云ヲ踏マヘテ一句ノ内ニ託シテ
ノ意ヲ味ヲ附タル殊ニ玄妙ニ　雪ヲ踏分ケト作ルベキヲ打越ノ雪ヲ遁ル、汁ニ氷渚
分トハ作ルナラン　雪ハ空ヨリ降ルモノハ皆雨ニ似ク氷ハ水ノ化ナレハ降物ノ難
ナレサナガラ中故事ノ雲ヨラズハ誰カ氷ヲ附テ其ノ疑ヒヲ散ラシヤ

旦藁カ家ニテノ贈答ナリ
ゆゝし 万葉忌々シ又多シ

三月十六日旦藁が田家にとまりて　野水

蛙のみきゝてゆゝしき寝覚かな　野水
額にあたる春雨のもり　旦藁
蕨煮る岩木の臭き宿かりて　越人

渡し
芦
議　三句ノ格

鎹ハ鐵ノ字ニアラス呉音ニテヤウナレハ借字ナリ万葉ニ鐵トカタ正シ

檀木堂ニテ十二句ノ後ヲ継リ

まじはりは人をへだつる夕の字　荷兮
立てゐる渡しの舟の月影　冬文
芦の穂を摺る傘の端　執筆
磯際に施餓鬼の僧の集りて　旦藁
岩のあひより藤見ゆる里　野水
雨の日も瓶焼やらん煙たつ　荷兮
ひだるき事も旅のひとつぞ　越人
尋よる坊主は居ず帳おりて　野水
解ても恋の杖むすぶ松　冬文

同十九日荷兮室にて

従四位下能登守源順梨壺五歌仙ノ人和名抄ノ作者ナリ此抄歳時ノ部モアリ又菊ヲカラヨモギトアリ

四の宮川原山科ニアリ唐輪ハ髻(ワゲ)ナリ

四宮ノ里ノ在女ノ風ヲ写シテ唐輪結ト云フナラン猿生夜妻ノ作

茸(タケ)まさふろ之一本草ニ誤ル

紹鷗ハ大黒庵ト号ス利休ノ師也永禄元年没ス

宗二伝セルヲ以テ号ス高彭四葉亭ト云ミオ円冷

もとハ會ノ許(モト)ナリ

井蛙抄ニ柴を折て滝の落る所を塞き侍れハ水の音も聞えざりけるトアリ

咲まけの菊またきをとも露そ　越人

秋の和名にかゝる順(シタガフ)　旦藁

初雁の聲にみつから紫をおぬ　冬文

別の月になみたあふるゝ　荷兮

祈でも四の宮よりも唐輪にて　旦藁

麦わらの笠もむつかし　野水

永き日やうき身を晴に忘るらん　荷兮

簀(ス)の子茸生る五月雨の中　越人

紹鷗(セウオウ)が瓢はありて米はなき　野水

吉田家ニ於テ御連歌ノ作

連歌のことゝはおかゝるいそがし　冬文

名数少将山ヨリ柴ヲ折塞トアリ

滝壺に柴押よせて音とめん　越人

岩茸ハ和名抄ニ巌袖ト云俗ノ岩松ナリ

帛ハ紬也今ノ紬ナリ

長明ノ作ニ方丈ノ記ニ云菴ノ北ニ少地ヲシメアバラナルヒメ垣ヲ囲ヒテ園トス則諸ノ菜ヲ植ト是麦作ルト指シタル

作ハ帛侍ノ隠ナリ

此きぬ〳〵ハ衣ニ非ズ只別レヲ云ヘルカ

帛ハ衣ニ同訓別字

躍ハ慶長ノ頃伊勢ニテ始ルト云故ニ伊勢音頭ト云

志州鳥羽

雑居寝(ザコネ)ハ山城愛宕郡大原ニアリ筑广祭ハ近江坂田郡ニアリ二ツトモ戀ナリ異本一本トモニみくるゝぬト作る非ナリ

ツラノ思ハ生涯部屋住ナル押入聟モ我夫トナリテ若水汲ニ至リテ其諸ノ詞ニ読ミ寄セリ

岩苔とりの篭にさけら花　旦藁

むきわりに帛(キヌ)着てありく世の中を　冬文

遂二枚もひろき草庵　越人

鉢毎の露あまる穂に麦作る　旦藁

郊外ヘ送リテ別レヲ惜ム様モ中刈ハ夜ニ限リ丸ニアラズ只ニ別レ夜明

碁打を送るきぬ〳〵の月　野水

風のなき秋の日和に網入よ　荷兮

網ニ出テ鳥羽ニテ踊スルトヤホヤトノ様ノアナタスカ見物セシト其ヲ笑ヒシト作

鳥羽の湊の踊のひとし　冬文

雑席ヤ鍋釜ハ珠ノモナイゲ踊ハ近頃ノハヤリ者ナレバトハ附タルナラン

あらましは猶手筑广も見てぞ置ぬ　野水

法らし〳〵一期智年かちもなし　荷兮

京の若水汲に出起る　越人

餅を喰て祝ふ天の代　旦藁

一巻中ニ岩木岩間岩苔ナド變化見ツヘシ

峨 字典ニ石山戴土也

後鳥羽院ノ御字ノ番鍛冶ノ面影カ

山さむく… 日 子　冬文?

墨… 雲雀鳴や　芦洲?

追加

三月十五日舟泉亭

山ふきやあぶなき岨の… 越人

蝶 水のうへは… 岩橋　舟泉

…や鮮酒すゞき… 雲あて　聴雪

…のたとへ… 土筆　鈍鑿?

翔日を… のひめ… 芦洲?

月… の門…あけ 枕草?

冒陸ハ里村法眼宗永四十二月十六日卒去 松の葉のあり… 此句ニ云カ 木の名ハ門松ノ木間ナリ

芍藥園ハ貞徳ノ別荘ノ号ナリ

曙ハ明ナリ 楊再思ガ詞ニ面色蓮花ニ似タリトあり

白氏文集巻廿 暖牀斜臥日曛腰

春

冒陸の松ハ… 代の春　利重?

… の木の… 足…　重五?

初春… 里… 白… 冒圭?

… の春… 麦の… 荷桐?

門ハ松芍薬… の雪…　舟泉?

…の… 水… 桜…　羽笠?

… の小松… 里　旦藁?

曙の人… 牡丹…　杜国

… 里の曛り…　犀夕?

… 四方の色　香露?

真如実相
姿ハ解ヘク情ハ
解ヘカラズ

きのふ子ノ日にけふ丑の日ナルヲ云ナリ

詩曰思楽泮水薄采其芹
魯侯戾止(中略)在泮飲酒

古池の吟ハ貞享三年ノ作ニテ是ヨリ正風ノ姿情定リ玉フカ

古池集水鏡ヲ古中ノ古ヲ納
得スベシ

死ヒノ哉ナリ是々ほたれ松の翁もとぬ外ト云ニ同しぬ辞ナリ

けふとても小松負らん牛の夢　猶雪

(きのふ子日をし　牛のけふとても　松を負ふ牛や負ふらん)

朝日二分柳の動く匂ひ哉　荷兮

吹て野の末ひくき霞かな　同

芹摘とてこけて酒なき瓢哉　旦藁

のかれたる人の許へ行とて

児の稚ハ白髪以やし夕霞　越人

古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉

傘張の睡リ胡蝶のやどり哉　重五

山や花垣根／＼の酒ばやし　亀洞

花に埋れて夢より直に死んかな　越人

落花埋僧夢　對古人

春野吟

種とおカケタル
龍西ノ間ヘトモ
信?て不猶
御信只時春ヲ
ト外ニ詞ナシ

撰集抄　信濃国佐野と申所に遊居しける云云人の…

足紀の…云云

小倉山ノ寂之　古言ハ拾のみや

待ニツケテ夏ノ夜モ長クシキ由ヲ云リ

三才圖會賀古宇島トアリかつらき
鳥ハ今ノ閼古鳥ナリかつらきハ

足代は桜を曲る庵かな　杜国

麓寺かくれぬものは桜かな　李風

植木して桜のさきを詠めかな　荷兮

(双北窓の捨ち折鳴の月もきれもぬけて)
(桜ハ年のおそき芳出ル　遅ク故遅桜ニ批合タリ)

餞別

藤の花たゞうつぶいて別哉　越人

山畑の茶摘ぞかざす夕日かな　重五

[illegible]　同

夏

おもしろき山家の庭に竹もし　九白

[illegible]蝶てねる枕かな　李風

かつらきの板屋の背戸の一里塚　越人

鳴ハナリ

弁慶ハ文治五年壬四月廿九日卒 繡毬花ハ白花集テマリノ如シ又山伏ノ鈴懸ニ似タレハシカ云ナルヘシ さてゆくハ死出行ナリ

スヽカケハ山伏ノ法具也

老子経四十六章ノ語ヲ前書トセリ

盧倫ヵ詩ノ句ニ 畏天就餉還依草

うれしさハ葉かくれ梅のひとつかな　杜國

若竹のうら踏たるゝ雀かな　亀洞

傘をたゝまずて見る杜若　丹泉

武蔵坊をとふらふ

すゞかけやさてゆく空の衣川　商露

逢坂の杉ハ笠見ゆる松かな　[illegible]

ゐ路ておくれたりけり夏の月　強雪

老聃曰知足之足常足

夕顔に雑炊(ザウスイ)あつき藁屋かな　越人

箒木の滴(コカケ)ならべて鳴蛙　柳雨

高き木をさゝする中に蟬なり　塵交

萱(カン)草五月開花六出四垂黄赤アリ和名抄ニ忘草

法華経ニアリ

萱草をはるかに暑きむの色　荷兮

蓮池の深さわするゝ浮葉かな　同

暁の夜鳴蓮の蓮をかな　昌圭

夏川のもとよ音一つ来渡る　重五

譬(ヒ)喩(ユ)品(ホン)の三界無安猶(ユ)如(ニヨ)火(クワ)宅(タク)と いふ心を

六月の汗ぬぐひ居る臺かな　越人

秋

背戸の畑なすび黄ばめるきりぎりす　旦藁

貞宗の玉祭

魂まつり拝むふらふら夕への乱　越人

山家集ニ時〻雲のかゝるこそ月をもてなすかざりなりけれ

異本ニ具足ニ着ニトアリ誤寫ナリ

唐黍ハ玉蜀黍(タマキビ)ノ音便ナラン

居きて又一寐入する夜哉　白桐

雲おり〳〵人を休むる月見哉　芭蕉

みちまて米搗ばかりの月夜哉　越人

瓦ふく家も面白や秋の月　野水

八嶋をかけたる屏風の絵をみて

具足着て顔のみ多し月見船　同

待恋

来ぬ殿を唐黍(タウキビ)高し見おろさん　荷兮

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな　同

[illegible]　舟泉

薄ノ雪ノハカナキ姿ハ牽牛花ニ次ク意ニヤ

名残ハ正字餘波左傳ニ出本義ハ離別ノ事ニアラス轉用ナリ

冬

馬とぬれ牛も夕の村しくれ　杜國

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申す　大垣住 如行

雪の朶舞の子が落一の那　昌碧

[illegible]　芭蕉

行灯の煤けぞ寒き雪のくれ　越人

芭蕉翁を送りてかへる時

此比の氷ふみ行名残哉　杜國

隠居するかたなる室をかまへけて

あたらしき茶袋一つ冬籠　荷兮

「七部ノ中六部ハ井筒屋庄兵衛板春ノ日集ノミ西村市郎右衛門板ナリ又一本ハ江戸ニテノ翻刻ニヤ誤字多シ

貞享三丙寅年仲秋下浣

神社考曰支那ノ諸書指言二蓬莱者於日本有三所一紀州熊野、駿州富士、尾州熱田ナリ蓬左ハ熱田ノ左ヲ云
荷兮ハ尾陽藩士山本武右衛門名古屋桒名町ニ住橿木堂ト号

冬ノ日春ノ日集發句連句トモニすくすくたる奇言ヲ尽シテ實ヲ傷フモ有ハニヤ

阿羅野

尾陽蓬左、橿木堂主人荷兮子、集を編て名をあら野といふ。何故に此名あることをしらず。予はるかにおもひやるに。ひとゝせ此郷に旅寝せしおりおりの云捨。あつめて冬の日といふ。其日かげ相續て。春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着弥生の空のけしき。柳桜の錦をあらそひ。蝶鳥のおのがさまざまなる風情につきて。いさゝか實をそ

糸遊ハ古言ノ空ニ木綿ナリ
朗詠集ニ云 それとみれ こゝろの空の
のどかにて あるかなきかの 世にこそあ
りけれと ゆふ

山家集ニモ 雲雀たつ あら野におふる
姫百合の 何につくとも なき
心かな

野守ハ荷兮ヲ指スナリ
ならしハ ならしの本語ニテ なれる
卅六ト繋シ 名詞ナリ 自ノ謂ニ云
るをつゝる その ならし ナト今世
多クツカフハ誤ナリ

おもふものも何ぞまゝ糸ゆふ
のいとかすかなる心のはしの有
なきかにたどりて、姫ゆりの何にも
つかず、雲雀の大空にはなれて、
無景のきはまりなき、道芝のみち
しるべせむと、此野の原の野守とな
れるならし

元禄二年弥生　芭蕉桃青

荒野(アラノ)
万葉ニ荒山荒野(アラノ)ト見エタリ
荒ハ野ニテ人氣(ヒトゲ)ニ疎キヲ云
巻首ニ荒野ト標シ巻之一ヨリハ
曠野(クワウヤ)ニ作ル
曠ハ空也又疎曠也

荒野集目録

巻之一　花　郭公　月　雪
巻之二　歳旦　初春　仲春　暮春
巻之三　初夏　仲夏　暮夏
巻之四　初秋　仲秋　暮秋
巻之五　初冬　仲冬　歳暮
巻之六　雑
巻之七　名所　旅　述懐　戀　無常
巻之八　釋教　神祇　祝
員外

曠野ハ日本私記和名抄ニ見え名
金峰山又金ノ御嶽トモ云
此山震旦ヨリ飛来ルト故ニ飛来峰トモ云
又鐘ヲ林鐘トモ云

貞室ハ延宝九年二月七日卒

堀川百首ニ色にそむふかみよしのゝ雲や
たゞきらんこゝろハさくらの四方の山の端

曠野集巻之一

花三十句

浄見原天皇御製
みよしのをよしとよくみてよしといひし
よしのよく見よよき人よきみ

よしの山にて
これはこれはとばかり花の芳野山　貞室

春めくをいはする花のあるじ哉　治通

薄くもり気高き花の林哉　信徳

あれの山咲出てから行てみよ　晨風

暮淋し花の後の鬼瓦　友五

山里は喰ものしゐる花見哉　為白

何事ぞ花見る人の長刀　去来

透元禄ゆみおとこ録猫の皮花のさくらか大太刀の鞘

こゝまでの雲ますましいても清水　野水

宗鑑讃州琴弾山ノ辺ニ住ス一夜庵ト号シテ狂歌ヲヨメリ
上ハ来ス中ハ日カヘリ下ハ一夜二夜とまるハ下々の下の客

すく山桜ちらぬ咲ぬの花もし
わけ往て宮も嵐

まく 忌ミシ 又禁忌

一本ニおそれニ作ル原本おそれとしナリ
おそれノ仮名ノ誤カ

花の中下戸引て来るかしこさよ　亀洞

下々の下の客といはれん花の宿　越人

花の山常折くる枝もなし　一井

見よしのゝやまとしらぬ花の滝　津島 俊似

兄弟のいろはあけぼり花の時　鼠弾

ちる花と酒のむ人もなし　舟泉

浮けよ霧てもよしや花の陰　胡及

まつ花に深傘持てはやまし　長虹

柴舟の花咲きまり宵の雨　津島 下枝

折時はなかくて遠し花の枝　岐阜 落梧

まころや得手ハあらし花の時　荷兮

曠野ハ日本私記和名抄ニ見エタリ

金峯山又金ノ御嶽ト云

此山震旦ヨリ飛来ルト故ニ飛来峯ト云

又鐘ヲ林鐘ト云

貞室ハ延宝九年二月七日卒

堀川百首ニ色ませのふかあよの雲や交るらんころハさくらの四方の山の端

宗鑑讃州琴弾山ノ辺ニ住ス一夜庵ト号ス 狂歌ヲヨメリ 上ハ来ル中ハ来テ[illegible]下ハ一夜二夜とまるハ下々の下の客

[illegible]

忌こミ 又禁忌

一本ニおそ[illegible]ニ作ル原本あらしナリ おそしハ假名ノ誤カ

曠野集巻之一

花三十句

よしのにて

これはこれはとばかり花の[illegible]

[illegible]をいそぐる花のお[illegible]

[illegible]くもり霧たつくの花の[illegible]

[illegible]の山[illegible]

[illegible]しきの[illegible]

山里は[illegible]ものまもる[illegible]

[illegible]にも見る人[illegible]

[illegible]の[illegible]

ちの中下た引て来るか[illegible]

下くの下[illegible]をと見れん[illegible]

花の山常[illegible]枝[illegible]

兄弟のいろはあけ[illegible]

ちるをもて酒ぬるん[illegible]

[illegible]けよ散てもよしや[illegible]

ちり花よ[illegible]傘をいま[illegible]

[illegible]の花咲なり [illegible]

[illegible]なりて[illegible]

[illegible]や[illegible]八[illegible]

彊（アラタマ）

偸安（ヤスモ） 俗ニ云ユキカタ也

和名抄ニ 柹 杮ニ同シ

鮀 俗ニ 延喜式和名抄ニ出

疱瘡の跡まで見ゆるもみぢ哉　傘下

あらけなや風車売る花の時　荷兮

花ハ来て□□しも雪あらむ　たつ

山あひの花を夕日に見出したり　心苗

おもしろや理窟はなしに花の雲　越人

なつかしや奈良の花より□□□　野水

猫の子に友達ひけり花の山　冬松

花見るとおもへバ背ぞ上戸哉　冬文

花も出て花の見えよ鎌倉の里　荷兮

酒のみに居たる人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

檀木ハ曠野集ノ撰者荷兮カ堂之号 尾陽檀木堂主人ト序ニ書ス

二十句トアレトモ十九句ナリ落句アルニヤ可惜

延宝六年ノ新道集鎌倉ニテトおもエアリ

口之於味也 目之於色也 耳之於声也 鼻之於臭也

ある人の山家にいたりて

檑（カシ）の木の花にかまはぬすがたかな　同

杜宇二十句

時鳥□□を飼おくものゝ□□て□□□□

ほとゝぎす鐘目見えつゝ□とゝ□□　季吟

目にハ青葉山郭公はつ鰹　素堂

五月山卯の花月夜ほとゝぎす 又外にもあり

いそがしや□□□□□□蜀魂　鵜雪

蠟燭のひかりにくしやほとゝぎす　蟻人

夜しらぬ□の□□□□□時鳥　津島 松下

海や先□□の□□野辺のほとゝぎす　重五

ほとゝぎす□□□□□□の声　柳風

拾遺集 ほとゝきす鳴けりらんおほつかなきに淀のあやめまくら駒ならぬ 忠見

ある人の許にて發句せよとありけれは
おとしきれてかりもなき鳥一声　嵐蝉
啼たらぬ空 鳴けりや郭公　蒼梧
杜鵑臭き蓮見るや時鳥　一髪
三声 ちと鳴の音やり山郭公　同
淀まで
（一声ハさやうに過て明るを説たるのみ也さりけり　源三位頼政）
おとしさ沢十日もてやまき鳴哉　風鳥
暁しさや森の木の間のほとゝきす　岐阜 杏雨
あぶなしや屋根でなく時鳥　傘六
（さよふけて寝さめさりせは人つてにこそきくへかりけれ）
ところにもや力に聞きほとゝきす　同
鳩とる時はあひさつやとしまれ　鈍可

心まくき二テ殊サラ褒詞あり　ウツ子 俯臥
瑞居れ
氣陳

たゞあり一夜市の月ほとゝきすわかれると
鳴しら鳥し　ホ
一声かくしみくさ人の家陰ぐさの時鳥　大津 智月
うつつのうつ浦のきぬうる時鳥　李桃
うつつのうちと夢の外ほとゝきす　市山

月二十句
かるしき笹のうら行月　桂東　十二歳 梅舌
ほそ道のしも月見る中の猫の耳　濡水
月ひとつたちひとのきのきの宵哉　一雪
酉の月ならぬもなつしの影ありり　越人
寒さまとはますに猫むく月夜哉　巴然

颸ノ音便大ノ意

續古今集 月ごとに見る月なれどこの月の今宵の月に似る月ぞなき歟 攡ナリ

昼からは宵となりしや月の影　津島 市柳

ちのりけるはじめて語る白根の友　一笑

どこまでも見られ月の空中は　古虹

峠迄硯掘べく月見一の卯　任他

いさゝしてたつねかりて関を出人をさまさをも月の入峠

ひとつ家やいかにおもしろかふの月　亀洞

名月を秋ゆるさぬはもなかりけり　哉人

名月やさらしは十二のらん　文鱗

名月やかい実たてく波せなく舟　昌然

名月やばくしてあつく峯の中　筆下

名月や鼓の声も犬の了恩　二水

見るものの見えて人の自見かな　呼水

十三夜ノ月ヲ賞スル事ハ宇多帝ノ御時ヨリ始ル明月無双之由被仰出ト中右記ニアリ

建仁寺ノ三益和尚十三夜ノ詩ノ序文ニ此夜月ヲ賞スル事延喜ノ帝ニ始ルト

日朔見東方日朏 又謂之側匿 夕ノ言ハ東方朏在ルトモ ドモ如何ニシテヤ月ノ気モナシトスルコト

名月乃心さまをかし

むつらしと月を見る日を寄せつけし　苔分

此の月もあらたと忘れて気之　同

名月や海もおもたれ山も入れ　玄米

名月や松か下たと下見かの雲中のすさ　胡及

秋の夜の月みんのあくかれて乞井に物を思ふかな

名月をあつまる影なき松の卯　釣雪

宵かさし橋の上にしや月の影　一攀

十三夜

影を横たふ鮫と見る月影か　杉風

影る

若いのま月の影もなし海の果　苔分

新月似磨鎌又玉鉤彎月トモ皆月ノ見立ナリトノ名アレドモ
レラニハ似ズトモ

夕三星夜（ユウヅゝキ）　胃ノ月ヲ出テ暮方三星ノ座ヲ出入スベキノ名ニヤ

二日
暮ゐるもたゞなき月の夕かな　仝

三日
何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日
夕月枝折打にして見えしかん　卜枝

五日
何日もかんさくめかぬや宵の月　保　一泉

六日
新河原雪も消えや月のさら　墨　鶴声

七日

自然居士謡ニ新月寒の山影の
はつ雪ぞとれドモ
よさゝに再案アリ

加生ハ凡兆ノ初名ナリ

能ひとれたりしと綿る内衣　岐阜　一髪

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角

いさゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹の雪落て杉るちなく雀かな　蒼交

かさなるや雪のある山只の山　京　加生

車道一筋なき冬のあしたかな　加賀　小春

ちる雪もやんでてらら翁を流るゝ　越人

はつ雪や戸明ぬ留主の庵かな　足宗

ものゝけの好らぬも雪のひかりかな　松芳

押擬

泡雪日本記ニ沫雪其所如氷沫ノ淡ハタカヘリ

ゑらき枝に物語尽くし雪の隈　二水

雪ふりて居るまじる葎この郷し　鳥仙

萩の雪おとしきぬやうに枝折らんも　岐阜 除風

雪の日や川筋たよりありしき　蹄汀

はつ雪やおしまぎるゝ者の喜寿之　傘下

雪の江の大舟よりは小舟哉　芳川

雪の朝札鮭見ゆる都かな　冬文

雪の暮猶さやけしや鷹の声　桂夕

ちらちらや泡雪かゝる酒強飯　荷兮

はつ雪や先草履にて隣まで　路通

はつあられ雪の見ぬあとゝ降　野水

三草紙ニ

元日まで臥て暁見まほしたる酒ありつよくおしこめまさきくらけしとぞ云ト云

古今集伊勢家を賣てよめる

あすか川淵にもあらぬ我宿も瀬にかはりゆくものにぞありける

螺ヲ新年ノ酒肴トナス和名抄ニ小辛螺

和名抄ニ擸又柏

古哥ニ何よろしきをまつかくるこそみよし野の山

みかけてやくらかなも海の雪　芳川

荒野集巻之二

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

たれ人の手のまもかなし花の春　釋 古梵

わかの水や元子年の深く汲　風鈴軒

松のうち伊勢家買人は誰　其角

臥ら酔まず寿にあふれみし肴　文鱗

月雪のためにもしたし門の松　去来

かざり木も小松ならで年ふる柏哉　一晶

元朝や何とはなけれど遅さくら　路通

齒固ノカタムル祝ヒナリ
三十八才ノ歳旦カ
太神宮御造営ノ御木引之
材木ハ紀州熊野ヨリ出スト
続日本紀聖武天皇神亀二年
伊勢物語ニかゝる水ハせうかうど栗の大きさまてトアリ
千秋樂盤渉調ノ曲ナリ

えゝる鳴き中りきゝる かゝそこて来　加賀 一笑
歯固よ梅のむかしも山はひかれ　大垣 如行
嫁らのあそ花そめたくてこの一しの春　岐阜 蘭枝
若水をうちかけて見よ雪の梅　亀洞
伊勢浦や御木引休む今朝の春　同
こゝろふきの名を洗せて見ん霜の梅　昌碧
老の手の奥ちひさかりし一の草　元廣
播大直 漢土ヨリ柑子ノ種ヲ持帰ルト
小柑子栗やひろふむ松の門　舟かの
うし男子秋楽を習ひなり　同
山柴まつらぬする竈の煙　重五
松かしりてるはるく年をとと　鈎雪

琵琶ニ月形アルヨリ云カ
紀事ニ大和ノ國窪田箸尾ノ両村ヨリ出踏歌節會ノ学ヒナリ今ノ万歳ニ仝シ
あやゝ是ヤナリ
ふくハ能ノ面ニテ痩男おもてナリ 玉井幸柏嶋ナトヽ掛ル之
野ノ宮ハ小倉山ノ巽ノ藪中ニアリ

月むの神ハ琵琶乃木とり乃来そ来て手に清はせり万歳来　一井
月ノ姉メ年ノ姉メ年ノ姉ヲ風流ニ言ル之 琵琶乃木元ナレハ作リ上テ月形ヲ形トナル 依リワリ 廿四ハ四季ニ表ス
うらゝも立ちる神のゐる座外　胡及
見え花えんあや彩ぎの手の海　芸虹
若菜を起て跳婦しかく柏の春　藻澤
さらに婚やふくのいの面にうちえん　同
ヲ面作偶婚ノ面ニ如何ナル 又フカイ孫次郎 足見等面作者ノ
蓬莱や舟の遊のかんなくら　瑞水
佛より神をたうとき今朝の春　京 ともえ
の宮や先しの旦ちいらぬ　朴什
かしこまりて縫ひ思ひたちたる物　冬文
正月の魚のかしらや炭たはら　傘下

虎関禎師詩
左海右湖同一碧

還元昔ノ年ヲ
看ルナラン

ユノ哉浮テ聞ユ初華心スヘシ

大服ハ点茶ノ名ナリ其式点茶ヲ
或ハ漬塩梅椒ヲ於茗碗之内ニ而
合家飲之

胴膨 よふろう
堅魚ノくハ 祝語也 古本貿ハ
書損カ
濱名ノ橋ハ遠江國元慶八年始
架之長サ五拾六丈有シト云中古
ヨリ絶其後猶地震螺核ノ災アリ
賤や賤ナリ 麦原シハ田舎ニテ

くさの戸も寂しからざる雞かな　冬松

あひくみ松たてぬ門もおもしろや　柳风

大服も去年の青葉のにほひかな　防川

鶯の声もまだおれ年男　犬山 昌勝

傘に歯朶かゝりけり元方柳　夕道

袖ふりて松の葉繁る今朝の春　梅舌

たてゝ見む霞やうつる大かゞみ　望水

曙も春の初めやどうぶくら　同

ちゞまるの見えたき名ぞ堅魚　越人

勝魚トテ清侍者ニモ宛ル殊ニ武場ノ門出ノ肴ニハカツホヲ祝ウトスト

初夢や濱名の橋のまの當り　同

注稿ワ神ニ霊ニ見エテハ御方モナキ 今 ニタヘタルカ

賤や賤陪にくふの麦原し　蒼守

鎮守参詣ニ揮シ麦ナラン
巳の年ハ元禄二年撰集ノ年也

あそへあくるきんやふき
おしあへてあとをもうくる
やすともおる人 师筆

万歳の宿を御まかせけり　同

巳のとしやむかしの春のおぼつかな　同

去年の春同じ心に毛衣かな　僧 般齋

五百式ヶ宿にも来るや今朝の春　夬宝

初春

若菜つむ跡も木を刈畑かな　越人

精出して摘とも見えぬ若菜哉　津島 聴水

七くさをたゝきたがりて泣子かな　加賀 俊似

女出て鶴たちあとの若菜かな　小春

側濡て袂の重き礒菜かな　藤羅

吾畑も踏しておこの殿若菜かな　岐阜 孝秋

神風館弘氏
網代民部トモ云ス

原本作者ノ名寮ト寮ト相混ス何レナルニヤ

拾遺集 ふつとふあやしみとも おつきれ祢ぐらも鷹をすゑてぞ

夜居ハ戌刻より寅刻迄 朝居ハ寅刻より卯刻迄也

氣條（スハエ）

民部ハ伊勢人胡来亭弘氏ナリ

石釣て活けたる梅の折しかり　玄寥

鶯居て折ふしとの梅の花　鴎歩

うめの花そこの氣まで匂ひけり　誠人

藪見舞とおりにおれし梅の花　蕗径

梅折てはなくりぬ西尾の花　一燈

むもなき梅のむくえて我母しさ　冬松

みのむしと忘れ活る梅のきのりけり　蕉笠

網代民部の息に逢て

梅の木になほやどり木や梅の花　芭蕉

（朱）うき山一つきあほ山の松一たに桜やどり木の枝々ハすゝしき　師兼

鶯の啼なくなるあらし哉　長良 若雄

鶯や餌ひろふ所まで　去来

あけぼのや鶯啼て竹の鶴　伊賀 一桐

鶯に古き藪も掃きけし　津島 一笑

鶯の声に鶴の所の春　市柳

鶯や蕎麦も咲ける我座敷　夢々

鶯に汲るゝあしたかな　梅台

里霞む日を松の巻の声　嘸水

行く雁の声にかゝぬ霞の部　盛交

行人の裳をみかぬ霞かな　冬文

かれ芝や少しかけろふの一二寸　芭蕉

かげろふや鳥の眠ればまどろくと　傘下

水仙の見る所も裏に咲にけり　路通

つまの下ハ軒ノ端(ツマ)ヲ云

蜘の絲繕ふ竹やものゝ枝　　荷兮

當座題

さし木

活きてのと吹人の始めるさし木かな　　舟泉

接木

つまみ下かくしてしまる接穂かな　　傘下

横

咲の錦鶏めぐる活きさしかな　　荷兮

同

藪深く蜘の巣の中の枝ゝの手　　卜枝

春

モイチト
望一ト訓スベシ

望一ハ伊勢神路山麓ニ住ミ守武ノ風ヲ慕フ慶安頃ノ人
紙撚(カミヨリ)ノ音便なり也

白尾ハ繼(ツギ)尾ノ鷹ナリ

翁曰相似たる句ハ集にはすてずことさら一所に並べ侍れとぞ

謂所取繼(トリスグリ)スカレニ スガレ ナラレ
ナラレ

さる　[illegible]の望一もありかな　　瑞水

牧田句者盲人也 俳諧ニ思深く毎ニ俳諧ニ書せて竹筒入[illegible]

春の鳥をよぶを呼てこよ　　[illegible]

白尾鷹

... 白尾かな　　野水

蜘の囲[illegible]　　亭生

立臼[illegible]　　土蔵 龜助

すこし[illegible]　　舟泉

すこし[illegible]　　其角

すこし[illegible]　　蓮瑩

[illegible]　　塩車

蘭亭主人ハ王羲之ヲ云晉ノ時ノ人ナリ

假名ハ弘法、字ハ四十八字ノ詞ニ 五十文字ハ蓮含之ヲ作リ下三十五文字ハ 宣陽之ヲ作リ字ノ一字ハ傳教之ヲ助ク 行假名ハ先公字ノ内削之ヲ 之ヲ作ルト

川舟やまとのふてはむアらし　冬文

はらしし河中あるひとあり　青江

蘭亭の主人池より鵞を
やさしましと常書き見るや

池よ鵞なし假名書あふ柳哉　素重

風の吹かたを後のやなぎ哉　野水

何かしもなしとあり柳一面　越人

さし柳たまあるも柳よろし　一笑

尺ほかりはやたるみ柳哉　小春

すがれし柳も風よ春つくん　一笑

春つきて飛をとめる柳哉　昌碧

無味黄昏叔夜柳居終日鍛

さくれも髪の伸ぬ柳哉　杏雨

みしかくて垣のるる柳かな　此橋

ふく風に牛のちきむく柳かな　杏雨

吹風を鷹かよせるやなきて来　松芳

風ふかぬ日もゆかすの柳かな　校越

うるしき柳鍛冶をもらぬ柳かな　荷兮

蝙蝠のみちく月の柳かな　仝

青柳にもたれて通る車かな　素秋

引いきに後へころふ柳かな　露竹

菜の名を忘せたれも柳なり　生林

仲春

麦の葉に菜の花かゝる山路かな　不悔

菜の花や杉菜の土手のあひだより　長虹

なの花の殘なくうつる日影かな　傘下

菜の花に雎（アヲ）うち蹴をちらすかな　清洞

うらくとも見えて畑うつ麓かな　去来

万葉を仕舞てうえる吉田かな　昌碧

梅やそれぐらうさくら哉　越人

廣庭に一本植しさくらかな　笑艸

さきしらぬ薫さへ咲にけり　塵交

手のとゞくところもたるゝ桜かな　一樵

うしろより見てくる姫のさくらかな　冬松

御向（アフムキ）ナリ

つらへ面（ツラ）ナリ

女院ノ御車ノ前ニテノ吟ナリト云リ

古本不闇ト乗ニ作書損也

考者殺気修定判哉

此ク歩ニ出ス修ナルモ知ラズ一句ニテモすへ待

すこしつゝ山や霞んでまくら　一瓢

春風に力つく蝶のはるかな　野水

春風ハ松の花のあかりニ吹れてのあるゝ夕べかな

あふむきに寝てみん野辺の花かな　除風

高欄につらを並べる雉子の聲　一雪

行かふ車輪（ワ）避（ナ）てやる雉子かな　塩車

手をついて一声やあぐる蛙かな　山崎　宗鑑

啼ながら入日をかゝる蛙かな　落梧

蛙ハ蛙の歌ハ例なしト云者ナクトモ

あつまりてむつましさうに啼蛙　越人

いくすぢの岸をめぐる岸の蛙かな　去来

飛入てしばし水ゆく蛙かな　落梧

不図（ト）飛て後（アト）に居る蛙かな　津島　松下

ゆふ暮の唐網(タウアミ)にかゝる胡蝶かな　一井

ちる蝶を児の見出し笑ひかな　柳塁

棕櫚(シユロ)の葉にとまりてさゝる胡蝶かな　梅錦

かや原の中をまよひぬる胡蝶かな　欣玉

枯芝や若葉たづねる胡蝶　百茱

菫草

何の葉もつのめ出す中の菫かな　忠知

ねころびて又なき草の菫かな　芦竹

ほろほろの土から咲し菫かな　野水

萱はえり日のあたる洞の菫ばかり　舟泉

草刈て菫択出す童かな　露竹

胡蝶の夢より醒めて何をするぞ　晴彦

麦畑の人見る中の嵯峨の菫　杜国

さくら散る中の月のすゞしさ　大坂 式之

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉

秋には出くるか枝のつえ　野水

山吹を蝶のすまれぬあらし哉　卜枝

一重なる山吹の花ゆふつかれ　嵯峨 楳雪

土手つゞき山吹のさく岩根哉　日 華嵩

まくらにも山吹咲かぬ遊かな　去来

去年の葉の土から出たる菫かな　俊似

ゆふ暮のさぞねむたかる菫かな　長之

の蝶川花のちりして流るめり当の
うちの風とところまでに吉野
吉野川岩をすゝ洗ひかけれ我は
花を山吹の花兼好家集

ニジカウ
笈の小冬西河(サイカ)の里ト云書有尚
ちるほど

旧入故園常識主如今祇日
遠看人

山端ハ山巓ナリ

漢光武帝ノ時野蚕繭ヲ成被ヲナス民之取テ絮ニ衣ニ張フテ着油トカワ作ル水神ノ好ヲ以テ水辺ノ人着用テ云々

燕の巣を覗り雀一の外　長虹

黄昏を立て出されし燕かな　嵐蘭

友減て啼音かなしや杜の聲　旦藁

角落てやすくも見ゆる小鹿かな　蕉笠

たまり清く聲よぶ浦の汐干かな　越人

親も子も同じ飲人や桃の酒　傘下

人まねも舟よ僕よの汐干かな　友重

山端のゆふ日の跳る躑躅かな　昌碧

猶杖やすらひて出る藤の花　兎一

篇かゝり藤のすけぬ精舟かな　亀洞

永き日や鐘撞ひともくたびれぬ　卜枝

糠鰕（アミ）ノ魚醤（シホカラ）ナリ

肖柏号牡丹花愛シテ香酒茶ヲ嗜メリ宗祇ノ門人ナリ大永七年没年八十五

永き日や油しめ木のよわる音　野水

りきのあみの塩からを誂しかな　同

曠野集巻之三

初夏

ころもがへやちきらは物よ手のうち　路通

更衣襟もをらぬやおくさに　傘下

ちるもとへ万もさしてえたる音　釋嵐蘭

肖柏老人のはちたゝきを嵐かと
いふ香をとるのはかなむなと文隣かれ
なとて夏のあしき越人が指すなる
を忘れかけて暇なく葉の文隣

宗祇法師ハ鏡ニ香ヲタキコメ
石菖 貞享五秋葉山ノ吟ナリ
笈日記ニハ一葉の一葉トナリ
和名抄 蘘荷草又蕪子花

ヨヤつらたりける

鏡にも蛇香もある色し 荷兮

山路来て
いちごをとる ... 芭蕉

夜すがらや ... 一井

梢の木の ... 杜若 越人

切かぶの ... 不交

葉の ... 蘇羅

さけもせて ... 亀洞

ゆかしと ... 竹洞

ゆあひして ... 鈍可

しげ山や木より水の郭公 夢々

上々おもひの種として麦一穂 玄寮

枯色ハ麦ばかり見る夜野かな 生林

麦刈て桑の木ばかり残りけり 不知

麦かるは ... 里の葵の ... 鈍可

志賀に ... 嵐の ... 嵐蘭

鳥ぬ ... 落梧

... 一葉て ... 李桃

大粒な ... 東巡

... の ... 吉次

深川の庵にて

句集ハ芭蕉庵主ナリ

菟の磨集二跡もなき菜集よみ
るゝ宗祇ときのみ基佐より宗
祇同時ノ連歌師ナリ

拾遺集くらきよりくらきに
ちかきをいりぬつきなるかは照らせ
世の外の端の月　和泉式部

庵の枝もみしくも求めさして　嵐雪
さびしさの気を見えれかつらさ　野水

仲夜

宵のうちて笹さしてるとひの部　一髪
刈茅のまさに出るとひの部　桜井元輔
虫くさき障子どの中るほさなに　不交
聞きよりくさきん垣一の風　凡笛
夜細く追されぬ淨の戸棟　素江
夜の枝ちかをかり戸一本　合咕
茅刈の袖より出る笹二本　卜枝
水汲て濡るる袖の笹一ヶ寺　鴎歩

梅ハ今樗なり

書森卜キノ作古人ニ見及ス

もし笑て蓮を見ふれなれ　秋芳
あららと覗く菖蒲の軒端に　小麦
枝のむれて梅の一本の黒なり　杏雨
枝老火に蕣をさゝく蕣なり　二水
夜の雨傘のくもりに帰枝に　一笑
散たり瘦て鐸のうへなり　胡及
藻の花をかけける鑒の鬘の風　見竹
汐引て藻の花さらむ蕣きなき　此橋
足引て雌る台おもふ笹葉に　長虹
竹のすにゆ蝉きけて廻りなり　玄来
茅の時より志をし弓の外

汀ハ水際平砂也

貞室十巻余ノ集ニ此句見エス きゝしニテ撰出諸説紛々未詳

住吉の岸の松ヶ根打さらしと詠ル古哥 根中ニ樹ケル鵜縄ノ麁シ打洗フが如クニ見エルナ 樹クルト作レル也

名人ノ鵜匠ハ五十羽モ七十羽モ遣フト云リ

始面白ト見シモ聴テ鵜ノ口ヨリ魚ヲ吐出サセ…カマケル様ナト哀也

仏教智度論曰 一切宝中命第一ト為ス

諸衆中生類ヲ第一ノ宝トナス

闇をそれたくてらせる水鵜舟　野水

五月雨は柳きはなき汀かな　大津 一龍

浅河は小鮎にちりぬ五月雨　尚白

五月雨も傘にあまるやさむさ哉　張洞

岐阜にて

おもしろうさうしさばくる鵜縄哉　貞室

おなじ所にて

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　芭蕉

おなじく

鵜のつらに篝こぼれて憐也　荷兮

同

和名抄ニ瞿麦

万葉ニ石竹ト有 枕草紙ニ絵にかきおとるもの なでしこ さくら 山ぶきトアリ 枕草紙ニまさきかつらのをの昼不 更る大和の河より三四月のお柄 のきこめナト云ル文ありカ

都あらそ鮎も喰らん鵜飼舟　越人

先舟の鮎もかすめぬ鵜舟かな　大津 淳児

曲江は篝の見えぬ鵜舟哉　梅餌

鵜の篝のえそらあかふのくれかな　路通

松笠の跡を見たる夏野の雨　卜枝

松の根をかくれ野中の標かな　鈍可

藺のむしや流によどむ宵の雨　同

楼子や蒟蒻書人をとふらん　越人

涼しや灯のこる夏の露　藤蘿

夜の萩や焚火に薄見ゆる里　旦藁

庵の留主——

無名抄ニ火おこさぬ夜のさむしつのみ紙して人もまちぬ夜のさびしの分や
夕皃や秋ハの吟ハ千鳥掛集ニ
初秋中ノ日此頃におもひてト詞
書アリ伊達衣むつ千鳥古今
抄泊船集ニモ秋ノ部ニ出タリ

和名抄ニ 樕（クヌギ） 又 橡 樟

元禄十ニ卯ト云言カケ有リ

まさび淋しさへまぎれぬ夜の炭俵　其角
夕皃や秋ハいろ〱の瓢かな　芭蕉
夕皃の花むしる人の去らぬ也　望水
夕皃も殺の簾我らのくさ哉　猪雪
山路来て夕皃見たる野中かな　津島 市柳
名もなき草に涼夕皃咲て哉や　長虹

暮夏

橘も散てやうこ蝉の聲　呂丸
雲の峯積かけ流るむかふ　望水
夕立や手傘ぬらす堤積わけ　傘下
涼しさに板もやらぬ木陰の雨　玄旨 法印

涼しさよ白菊なきうちの大白新　去来
篁して涼しや雨のあとの里口　荷兮
はき庭の砂あつからぬ曇哉　同
おもふことなきさまや夕涼て　鳴海 如風
飛石の蜥蜴（トカゲ）や竿の下涼み　津島 俊似
涼しさや椽の下ゆく水の音　仝
挑灯のきえやゆらし涼て舟　卜枝
涼しさをかけてすゝむる川辺かな　来学
吹ちりて水のうへゆく蓮の花　岐阜 秀正
蓮見むとふさつやまきてゆかでこそ　松坂 晨風
笠をきて見やうし蓮見に行けり　古梵

釣鐘艸五六月開紫花其形如釣鐘ノ如シ

河骨の水の見ぬかり流れけり　笑水

ちらしくと清水に松の古葉かな　長虹

すみきりて汐干の沖の清水かな　俊似

連あまた待せて結ぶ清水かな　文闌

引さげて手より中行る清水かな　滌月

かくひらで浅黄着たり清水かな　尚白

簟をぬらす程結ぶ清水かな　一髪

虫干や幕をおろしてさらす衣　卜枝

麻の露皆あれけりる畑の跡　岐阜 李晨

釣鐘艸後に付たる名なるべし　越人

路のほとり草にかくるる家　素堂

雲居名希膺妙心寺ノ二世松島瑞巌寺ノ住職万治二年八月八日寂

曠野集巻之四

初秋

ちらちらや麻刈あとの秋の風　越人

桐の葉やひらりかゝりて秋の風　圓解

松島雲居がもとにて

一葉散音かしましきあたりかな　仙化

かくひとつちるむや秋の夕にしき　津島 方生

男ぶき羽織を星の手向かな　杏雨

舩出ぬ海暮ぬさうり哉　芭蕉

蕣や垣ねの中のおもはくさ　文鱗

数鳥のあまさ一露にたえぬ之　[illegible]

牽牛子毒アリ此葉ニ虫生セス

和名抄阿世ハ田界也

秋風や白木の弓に弦はらん　去来

畦(アゼ)豆を荷物にするや稲葉かな　[illegible]

あの雲は稲妻を待たよりかな　芭蕉

續古今集ニ [illegible]

任口上人ハ伏見西岸寺ノ住職なり

宗祇句ニ名もしらぬ小草花さく川辺かな

稲妻やきのふは東けふは西　其角

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　芭蕉

宗祇法師のことを葉によりて

名もしらぬ小草花咲野菊かな　素堂

仲秋

翁曰字餘りの句作の味ひ有
埃又ゐ?れハ言ふへし工夫して
味ふへし慈鎮ノ歌ニ鴬
鳥なくらに聞ゆる秋の我
身のえらのおもひやり

白氏文集ニ林間煖酒焼紅葉
間ハ温寒ノ間タノヨロシキタニ云

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

淋しさと孫を見てゐる秋の雨一つ秋　加賀 小春

谷川や茶袋そゝく秋の暮　津嶋 益音

石切の音も聞けり秋の暮　釜六

斧の音(オト)や梅輪出る秋の暮　卜枝

康の書み人の見ゆる夕霧一つ　一髮

田と畑を稲にかへし葉田子等　伊豫 一泉

山猪(カリ)に康(カヒ)撃れて笑ひけり　重五

名月?ちかき顔の間(カニ)　其角

きぬ人と狼の? 名月よ　东順

藪の中に菜みしらき立枝(エ)かな　林斧

元禄二年ノ秋翁ノ尋ラレシ時ナルヘシ

堰(井セキ)

素牛ハ惟然ノ初名

とこともなく地をうつ音の哀や　越水

山の寺とやら秋の草葉に　宗和

その庵をたのまれて
恥もされ身をおもひけり秋とおもひけり　加賀 北枝

素堂へ申つかはして
ちすの実のぬけつくしたる蓮のから　越人

一本の芦が種蒔しおせき哉　防川

松の木に吹あてられな秋の蝶　舟泉

さつとして露に数寄の名残哉　胡及

仙子もからぬ市のきぬものまゝ　曉鐘

関の素牛にあひて

みよし野の山の秋かぜさよふけてふる里さむく衣うつなり

關孫六兼行ハ永和中志津三郎兼氏ハ元應頃名誉ノ刀エナリ美濃多藝郡ニ住ス

坊ニ喜藏院南陽院ナド妻帯ノ寺アリ

數杯ノ手際ヲ見セハヤ之

さえ砧孫六屋しき志津屋敷　其角

よし野にて
きぬたうちて我にきかせよ坊が妻　芭蕉

いそがしや野分の空の夜這星　加賀　一笑

暮秋

なふとけく梢り葉の白き秋　巴丈

ちる葉のちらぬぞあはれをしき　昌碧

山路のきく野菊とも又ちがひけり　越人

菊作る家は根深なる枝葉がなは不きそ
一色や作らぬ菊のちひさかり　曉鼯

落葉はける主出されけるとて
かはらけの手まへを見せよ菊の香　其角

鬢帽子ハ鉢巻ナリ公卿ノ召ニフ物ト云フハ非ナリ五元集續猿蓑ニハ朝臭オ忘れし人やトアリ平シカルベシ

あづゆるハ湍絶ナリ此句ノ端書ニ風声ハ天地の語也とあるをトナリ

三井寺ノ謡ニ来るらんへりし語らはやさ思ひけん

菊の露凋る人や鬢帽子　同

はぶなりて菊作らうとおもひけり　二水

かたよりて薄一葉の汐木哉　伊勢　千閭

拂しきた樫の実落る森岸か　濃州　笑夕

踏る菊もおもふすかれや梅もどき　加生

芦の穂やまねく哀よりちるあはれ　路通

曠野集巻之五

初冬

あめつちのまなしさくゆる時雨哉　湖春

京なる人につかはしける
一夜きて三井寺うたへ初しぐれ　尚白

当句ニテ凩ノ荷兮ト異名ヲ取リ
凩ハ和字ナリ

梵葉炉中無宿火 読書
窓下有残灯

こがらしや何おもひ出すこの夕　湍水

　万句興行に

凩や逢ふ人のやうな時雨かな　荷兮

　人を待くらす日半し

きりきりす宿とる時雨かな　落梧

鵯の下降の庭さびしきに一すじ　炊玉

渡し守ありて菊蒔る時雨かな　傘下

凩に二日の月の吹ちるか　荷兮

一葉づゝ柿の葉落るに家のぬり　一髪

木の葉ちる淋しさ棚の囲炉裏かな　同

枇杷の花人のかたまる木陰かな　同

古本ノ懸ハ書損ナラン

菊の香ちりの内かと見ゆる哉　李晨

梨の花末ちるなれて淋し　野水

蔦の葉のくれぬる見るや羽の色　昌碧

麦蒔てよく凩に寒し家なり　同

のどけしや麦喰ふ雀の夜こそ　一井

隣家のきれみてあかる火燵哉　落梧

石臼の破てなりしや石蕗の花　胡及

まくしもし木綿もかた物かな　文鱗

河ふしに釣瓶かゝる蔦かな　卜枝

冬枯は風の体ともなきものかな　洞雪

蓮池のかれがれ見ゆる枯葉哉　一髪

巾ハ※ニテツクリ鷹ノ頭ヲカクス物ナリ

蕪菁（カブラ） 和名抄ニ蕪菁俗用大根二字

鷹居（スヱ）て石につまつく枯野かな　松芳

風に吹かれけり鷹が巾　杉風

鷹狩の路にひきぬる蕪かな　蕉笠

寒月

帽を出て度し月を面たき　野水

あさ漬の大根あらふ月夜かな　俊似

仲冬

おろしおく鐘もつちる霰かな　津島 勝吉

しら波とつまてたたける霰かな　津島 重治

掻（かき）ちらる叢にやける霰かな　林斧

柴の戸をほとしちまやむ霰かな　杏雨

楝（アフチ）ヲ和俗ニ栴檀ト呼

雪舟（ソリ） 雪車ナド見エタリ 汐木ハ舟ヲ焼タキギナリ

いそける柴をおろすとし霰かな　宗之

霜の朝せんだんの実のこぼれけり　杜國

水桶の菜の葉にまじる氷かな　勝吉

深き池氷の吹に歌きけり　俊似

法をやりて松葉掻けり落葉かな　除風

打よりて何掻よるき汐木（ギツ）かな　旋舟

無題雪舟

峠より雪舟乗おろす汐木かな　嵐蟬

ぬつくりと雪舟に乗ゐる乙女かな　為宥

板をしめて雪舟に乗る旅人かな　長虹

高原より雪舟引出し朝かな　一井

鰒ノ種類甚多シ
土佐日記ニ黒崎ノ松原ヲ經テ行ク程ニ所ノ名ハ黒ク松ノ色ハ青ク磯ノ波ハ雪ノ如ク貝ノ色ハスハウニ似タリ五色ニ今一色足ラヌト

茶ノ市ニツクヲ火トモスト云

雪舟引や休むも赤き額かな　亀洞

浅けれて雪舟の音の聞ゆなり　含咕

青海や羽白黒鴨赤がしら　白岑 忠知

舟よせて火をともしたる衛かな　亀洞

鮭干すやそこらも赤き夜明かな　村俊

井を堀る者は六月土用に来つてをとこ裸なり

汗出して谷に突込む氷室かな　冬松

海鼠腸の壺埋めたき氷室かな　利重

炭竈の穴ふさぐやら薄けぶり　亀洞

榾焚て浅き夜を出る寒さかな　塩車

火とぼして幾日になりぬ冬椿　賀 一笑

樂天閒居賦ニ閒居而復倚此柱

源氏真木柱ノ巻ニいまはとてやどかれぬともなれきつるまきの柱はわれをわするなと

餅花ハ餅搗ノ時其始ヲ柳枝ニツケ花ノ形ヲナス

翁ト越人同道ニテ元禄元年㛂捨月見紀行有
本草の杼濁世の人のこゝろは花の今ニ雨ノ贈リシヤ又越人カ土産ニセシヤ
和名抄杼

いつはりし庭起ざまにつかりき　亀洞

冬籠りまたよりそはん此はしら　芭蕉

歳暮

師走をも中々きかん酒の上　李下

書てよめぬものありや年の暮　尚白

餅花の後はすゝけてちりぬべし　野水

ちるまじき楢を出る菜畑哉　亀洞

煤掃は掃よせけるも瓢このかし　一髪

本草の月見にいたる人のこゝやけふそこ杼の実ひろふおくふる年の暮かなしてたちいでてみるらめかしと

年の暮杼の実ひとつころころと　荷兮

田作ハゴマメノ祝語ニテ年用意ノ作也

門松をうりて蛤一荷ひ　　内習

田作に鼠追ふ夜の寒さ哉　　亀洞

曠野集巻之六

雑

年中行事ハ歌合又公事根源ニ出タルニ擬ナルヤ歌ハ略ス
年中行事は[illegible]
つゝへてこそ[illegible]

年中行事内十二句

供屠蘇白散

幼稚ハ菓子ナイヘリ

ほそけなや屠蘇なめそむる人の數　　荷兮

春日祭

春日祭ハ二月上申日
春日山のかみの神わさとてふきよまなくに
なへてまつるのかやこのうた人

年ごとに鳥居の藤の苔かな

鷄棲ト言コソヨケレトゾ

石清水臨時祭

石清水臨時祭ハ三月中午日
南祭ト云

沓音もしづかにかざす桜かな

灌佛

承和七年四月於清涼殿始テ行ハル

なふの日や法ぞま法ふ佛生ゑ

端午

葵付るハ加茂ノ競馬ナリ

れも夜て葵付ゝる髪哉

施米

東山北山西山ナトノ寺〻ノ法師原ニ施ルヽナリ

うち明てひとゝに米を出臭き

乞巧奠

万葉集ニ山上憶良
萩之花尾花葛花瞿麦之花
姫部志又藤袴朝貌之花コレヲ
七夕草トヨメルナルベシ

萬葉より七夕草を見んとゝき

駒迎

駒迎ハ八月十五日也而於朱雀院
御國忌依用十六日牽信濃駒廿
七日甲斐廿日武蔵廿四日上野駒牽之

爪髪も旅の姿や駒むかへ

擬虫

堀河院御時向嵯峨野撰虫
奉之

十月朔日行二(コロモカヘ)代衣節會一ヲ
冬のはじめ[illegible]御帳の面ふ[illegible]白[illegible]御帳台納言
十一月中丑日五節帳臺試ト云
翌寅日殿上淵酔アリ
古本ゆりかけるノ誤りう
追儺大舎人寮鬼をつとめ上卿以下ももを追ふ殿上人桃の弓葦の矢にて射る
白氏卜朗詠ト[illegible]正シテ誤字ノ誤ヲ改ル
白氏文集廿八巻柳無氣力枝先動池有波紋氷盡開今日不知云云
漆水ハ壙字カ案山子ノ縛セルモノナリ

草の葉や足のをれたるきりぎりす　、

十月更衣
玉しきの衣かへうき御帳かな　、

むかし百敷ト同じ意也

五節
舞姫は戴度指をおりにけり　、

元日白馬節會踏歌是也

追儺
追はれてや猫はたまらぬ鬼の面　、

詩題十六句
今日不知誰計會
春風春水一時来
おもしろし添水ながるゝ春の風　野水

同八巻十白片落梅浮澗水黄梢新柳出城墻　上下略
同巻十春来無伴閑遊少行樂三分減二分　下略
同巻十花下忘帰因美景樽前勸酔是春風　上下略
同一巻十留春春不住春帰人寂寞厭風風不定風起花蕭索
朗詠ニ不駐ニ作ル古本今不留ニ作ル
同六巻微風吹袷衣不寒復不熱清和好時節　微風云云上下略　古本微ヲ作嚴ニ誤ル　袂衣ハ袷ナリ
同廿五巻池晩蓮芳謝秋竹意深　上下略

白片落梅浮澗水
水鳥のはしに付たる梅白し　、

春来無伴閑遊少
[illegible]たのまくにはなき[illegible]かな　、

花下忘帰因美景
庭のをしさにひきせよ木の下　、

留春春不住春帰人寂寞
行春も行ばの跡ちるさくら　、

微風吹袂衣不寒復不熱
袷着て松風[illegible]　、

池晩蓮芳謝

同 五巻廿 暑月云云 上畧

同 四巻十 大抵云云 上畧 古本抵ヲ底ニ作ル

同 十四巻三 夜来秋雨後云云 下畧 古本凩雨ニ作ル書損カ

同 巻十 長恨歌ニ遅々鐘鼓云云 朗詠ニ鐘漏ニ作ル

蓮の葉も行水ならる夏ゑ水

暑月貧家何所有、客来唯贈北窓風

涼しさを切ぬきにけり水の空

大抵四時心總苦、就中斷腸是秋天

雲の旅さそはれて行し秋の空

夜来秋雨後、秋氣颯然新ナリ

秋の夜は明てもよ人も行し

遲遲鐘鼓初長夜、耿耿星河欲曙天

同巻十 残燈云云上下畧 古本錯乱ヨリ本文ヨツテ改問 誤カ

同 五巻十 万物云云 壊色四時冬日最凋年ヲ 上下畧 古本壊ヲ懐ニ作ル

同 五巻二十 十月云云 霜葉未殺萋々(句)草 日暖初乾漠々(句)沙 古本ニ華ヲ美ニ書損ス

同 巻 南窓背燈坐 風霰暗紛々 寂寞云云

同 五巻十 香火一爐燈一盞 白頭云云 下畧

ひとすぢりひかりもれて秋もなし

殘燈影閃墻、斜月光穿牖

ゆふ霜に錦や流るゝ宮の月

萬物秋霜能壊色

白菊やしらふ散てしむを秋の暮

十月江南天氣好、可憐冬景似春華

こがらしも吹て息つく小春かな

寂寞深村夜、殘鴈雪中聞

鉢たゝき出もすまぬ村や雪の下

白頭夜禮佛名経

一条禅閤兼良公文明十三年
蒙去職人盡歌合ヲ撰ヒ玉フ
此撰述ノ書數十部アリ

鎺字未詳

玉簪草（キバウシ）　蓬髪（ワラモカミ）

佛名の裡に獨瞭く白髪か、

禅閤の撰ひの出し絵ひもとかち

みをうしくて

鋸鎺目立

舟泉

かけろふのちりはいとゝつゝりうれ、

付木突

五月雨水鈴もなし人の家、

釣瓶繩打

うつしも知海のことる秋の里、

糊賣

野く霧のまゝろわらむつても かこ、

白氏文集巻四夌魂香降夫人
魂夫人之魂在何許香烟引到
焚香處既来何苦不須史一卞
畧 古本香字ヲ脱ス

同巻十長恨歌攬衣推枕起
徘徊珠箔銀屏邐迤開雲
髻云云上下畧 古本来字脱

同巻小頭鞋履云云
天宝末年時世粧上陽人苦
最多上下畧 古本上ヲ昭□ニ書ス
今改

馬糞掻

こかうしの松み薬なまうられて、

李夫人

魂在何許香煙引到焚香處

かけろふの抱つけハ足のころもかれ

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺花冠不整下堂来

越人

上陽人

ちる花に帯ゆるみたる寝姿かれ、

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉眉

錦繍段　范蠡　呂仲見
一戦成功早掣身鈎竿軽
動五湖雲宮中云云

同集　明妃曲　僧李潭
玉貌風沙勝画図琵琶
難寫舊恩跡宮中咫尺如
千里況復如今萬里餘

御佛供ハ一向宗ノ佛餉ナリ

細長外人不見見應笑

物ぎらひやむかしの姿鏡たるらん　、

西施

宮中拾得娥眉斧不献吾君是愛君

花ちらぬ柱に入らぬ牡丹かな　、

王昭君

玉貌風沙勝畫圖

よの中もまよれぬ冬の柳哉　、

一日留ちかたる事待ちて

卯

孫やの顔やは佛従弟く火ハ出ごす

鈎雪

辰

杜若せん語るの来る日この秋　、

巳

講訳の咲ふつふ扇との事　、

午

あたひよ蓋干もを踏ほとも　、

未

糕の番ニ武家の夕食るまなり　、

申

五月雨や鶴とまのゝ孫作り　、

深くなりて生きとあつる昼秋なし

火振ハ松明ノ光リニ魚ヲ伺テ取ナリ
荘子秋水篇ニ曰何謂天何謂人北海若曰牛馬云云

山獣
鹿笛の上手をおそれおとなさよ　樹水

野鳥
鴫突のしかけなきの夜明かな　児竹

里禽
枝なからむしる雀より蜀漆かな　含咕

海魚
おもしろき鰯引なり盆の月　令

川魚
秋の香鯖川しくの火ふりの夜　令

牛馬四足是謂天落馬首穿牛

同大宗師ノ篇語ヨリ蒙矣ノ字ヲ壑ニ有ノ字ヲ衍ス
胠篋子
荘子胠篋篇ニ絶聖云云擿玉ヲ毀チ珠小盗不起
古文後集古硯銘ニ非鈍者壽而鋭者夭乎

鼻是謂人
一方は梅さく桃の継木かな　越人

藏舟於壑蔵山於澤謂之固矣然而夜半有力者負之而走
からなうら盗の市よりるさゝえ

絶聖棄知大盜乃止
ちよりも時かもるもなまむし

鋭者夭
若さとて泣なまりのは也火燵　桂夕

鈍者壽
鈍くの雪くたまるきて紅一の灯　市山

万里小路正二位中納言藤房卿
帝ニ諫表ヲ献リテ後遁世ス

髙師直觀應二年謀叛シテ
誅セラル

禅ヨリ浄土ニ入ナド洒ノ行ノ公
シル所ニ

上人ノ念仏三昧ヲ云ヘルカ

藤房

時鳥啼やむ時を去りにけり　一井

師直

悲しくも尽ぬる荊(イバラ)のな　長虹

一休

いろ〳〵のかたちをうしや月の雲　滄水

狂雲ト吟トアラハ禅家ノ禅ヲ捨ケ浄土ノ三昧ニ入

法然

なく声のつくるひもなき鶉かな　嵐陽

山岩

奥山を裏より廻る岩の角　滄水

海岩

某苔とりし海苔也今改

白魚ニ式部 骨ニ大江山ト對セル句ナリ

尾州なへての森人

なこ〳〵ありをと伊勢の濱荻折しきて妹恋しらにみてし夜の月

名古屋ヨリ津島ヘ往還ニアリ鬼嶽ハ美濃ニアリ

万葉集巻白の之坂をこゆる白妙の我衣手はぬれにけるかもト

美濃ニ不破関ノ中山竜泉てと派名取ノ関ノ藤川

海苔とりしねとゝをおもちなりけり　仝

曠野集巻之七

名所

八重霞奥まで見たる龍田かな　杜国

白魚の骨や式部が大江山　荷兮

から崎の松は花よりおぼろにて　芭蕉

蓬一把かりてをこゝろは波の外　滄水

嵯峨ゞとて見るはかゆくや吹おさまり　荷兮

琵琶湖眺望

雪残る鬼嶽さむき弥生かな　合作

笑ふえてこも霞にみゆる森　宗能法師

作ルハ紀伊ナリ同名ユヱニさもト云リ

一本ニ賣たしニ作ルハ非ナリ

新葉よきハ旅のみちあきとも芳野出てとあるハ夜あられなる新葉惜しとぞ

美濃國夏くい山広の山寺にて夜の
咲ちるを見て吟しぬるとや

芳野出て布子賣たし更衣　杜國

右の哥茂蔭の園みよし野で住るヽ角田川をきんとさき
ひ呼れハまうけてト詞云アリ

いさのまれ嵯峨の鮎くふて都へ　貞室

みよしのゝいつよ秋ちる貝のおと　破笠

十六夜もまた更科の郡かな　芭蕉

隅田川ハ平塩ニシテ海ニ近シ水ノ流モ無ケレハ清ニ濁ナシ知ラズ殊ニ夕月ノ頃ナレバ目シテ見分ガタシ
故ナルヲカキヤワシ其言ニヨリテ清濁ヲ試ルヽ

不尽ト十三夜ノ月ハ本朝ノ景物ナリトハナリ　我国自負ノ一つし

山城

尾州海東郡ノ地名ナリ
和名抄ニうやまこハ孫ナリ

山城ノ名所

夕月や杖に水なぶる角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらばけふの月も見よ　素堂

富士ハ士ヲ富マスト書く

鴫突の見やるさきも鳥羽田かな　胡及

鴫突を萱津のかゝのうかゝひ哉　淡支

孫ニ

むさし野やいくら広ても見る時雨　舟泉

湖を屋根から見せん村しくれ　尚白

唐崎や片帆の合せて初しくれ　伊豫 随友

むさし野とおもへば〓の日御〓　洗悪

気つよしと生海鼠を嬲やきもの食　俊似

冬されのひとり轆轤（ロクロ）や山里のおく　津島 一笑

作ルハ紀伊ナリ同名エエ云もト云リ

一本ニ賣たし・作ルハ非ナリ

（朱）新麦よきハ旅の所あるをとも芳野出てとあるハ衣かへぬる故ニ売惜しとこ

近江

同國

（朱）山端の瀬田の里西島へいれと見をおもへハさよりそゆく

（朱）あとヒハ勿論なりとふしとシ取ゆく

鳥羽ハ山城（朱）木幡羽鳥田ハ云取用

一もと字ニ京みてむつかしかりし友の武蔵の国より上り読て住なる角田川をおもひ出てきこえひゞれハやすらて卜詞書アリ

美濃國関といふ所の山寺にて藤の
咲たるを見て吟しぬるとや

芳野出て布子賣たし衣かへ　杜國

麦からや内外もなき志賀のさと　重五

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖の水まさりけり五月雨　去来

牛もなし鳥羽のほとりの五月雨　一髪

角田川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥　貞室

みよしのいつより秋ぞ貝のおと　破笠

十六夜もまだ更科の郡かな　芭蕉

（朱）隅田川ハ平地ニシテ海ニ近シ水ノ流モ無レハ清寿濁モシ知ズ殊ニ夕月ノ頃ナレバ月シテ見分ガタシ杖ナルテカキヤワシ其声ニヨリテ清濁ヲ試ル也

不尽ト十三夜月ハ本朝ノ景物ナルナリ（朱）我国自負ノ一句也

山城

尾州海東郡ノ地名ナリ

和名抄ニうまとハ孫なり

山城ノ名所

夕月や杖に水なぶる角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらばけふの月も見よ　素堂（朱）富士ハ士ヲ富マスト書ク

鴫突の馬やりすごす鳥羽田かな　胡及

鴫突も螢津のかゆのうらやみさ哉（朱）猿か乙　淡支

むさし野やさはらぬ広も見る時雨　舟泉

湖を屋根から見せん村しぐれ　尚白

唐崎やとまり合せて初しぐれ　伊豫　随友

むさし野とおもへどもその日郷かな　洗悪

気つかしき生海鼠を桃やちかの島　俊似

冬されのひとりロクロ轆轤や山里のおく　津島　一笑

星崎ハ尾州

不破ハ美濃國ノ名所　秋の夜ハ夜ヲヨミツグト云フ義ナリ

天武天皇白鳳一年始テ設クト

吉野紀行ニ大和国膾峠ト詞書アリ　空ニやすらふトアリ

忠度ノ譲リ雑談集ニアリ

行暮て木のもとかげを宿とせば花やこよひの主ならまし

雪の不二若葉で一つにかくれけり　湍水

よし野山も只大雪の夕かな　聖水

外山ナレドモ大雪ニ降隠クサレテハ外山モ同シク見所モナシト云フ

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉

秋の夜や不破の小家のよつぎ拂　如行

旅

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

大和國平尾村にて

花のかげ謡に似たる旅寝かな　同

桜咲里を眺て通りけり　夕桃

日の入や舟にあてたり桃の花　一髪

のどけしや湊の昼の生さかな　荷兮

貞享五年芭蕉翁更科月見の送別カ
以下七句同時

ひよろ〳〵て猶おもひぬる心　芭蕉

ある人の餞別に

明るきをおさへて笑ひけり　除風

旅人の合せぬ中の寝覚安　冬松

枝をこそまもりてよ秋の旅寝哉　昌碧

名月や柳も見えぬ市の家　松芳

夕立のあとの大空ひらけたり　傘下

芭蕉士を送る

稲妻にきもつけける寝覚かな　釣雪

鳴くて秋にとまる秋の蝉　一井

秋風に中〳〵物うき寝覚の秋　野水

法眼元信画名字郎ト云ヒシ時長谷ニシテ執タノ稗ニ亮セトチサキ桶ヲ花鳥ヲ花ヲ画テ粥曽セタリト稀ノ挿
付タル人アリトモニ餉蒔シテ康ヲ手名ツケ
ヨトし

翁ト越人ヘノ送別カ

祖翁ノ婏又泣ト云ニ二人五
見ラルレトハ作ラレタリ

多病ヨリ姥捨ノ月ニ趣ヤ
時ノ吟之

狩野家画工ノ曲物ニテツ花
筆洗ナリト云

ねぐらしく秋のかぜしらさよ　舟泉

雾たれよ迯ちを称すにまかせて　嵐蟬

さびしさは切人まよせのひと

更級の月は二人に見られけり　荷兮

越人旅立けるを送りて餞す

月よりも福着つくよ寝の旅へ　野水

おくられつおくりつ果ハ木曽の秋　芭蕉

燗の葉すがも落れ秋の庵　路通

狩野桶といふ名の其角ぬしにおくれけ

狩野桶に露をのぞけよ秋の山　荷兮

ちゑハ千子ノ誤ナラン伊勢
記行ニ此句アリ

但了久名宗彭大徳寺住職
品川 東海禅寺ノ（開山）後山ニアリ巨石一ツヲ
以テ墓表トス

鴻ノ愁風歸狐悲心雨窓ニ居
ルモ雨ヲ悲ム故ニ我居ルニ
水ノアフルヽヲ悲テ声ヲ立ルニヤトシ

衣ノ主ハヲコロビニケリノウツリ
ナランカ

ともかくも稲こき唄も旅の空　京 ちゑ

八月は今宵しかりとよかりけり　玄察

鯖さけハ秋野も見ゆ雲の峯　一井

品川にて人に別るとて

沢庵の墓をとはれの秋の露　文鱗

草枕犬も時雨るか夜の声　芭蕉

船をちる刀うつして村しぐれ　湖島 杉秀

鳴海にて芭蕉子に逢ふ

いく落葉それほど袖もほころびず　荷兮

夢よりも現の鷹ぞ頼もしき

其角子に逢る時　野水

天龍川ニテ西上人ノ船頭ニ打レシ故事
西行一代記又本朝遯史ニアリ

鳥羽院ノ北面ノ士佐藤兵衛尉憲清ト云ヲ能シテ閑人トナル 下人モ是ヲ同スルニテアリ 西住ト号シ主従東国ニ下リノ途中遠江国天竜ノ舟武士ノ為ニ打レタリト云云略之

飛花落葉ハ声聞縁覚ノ便去ルニテモ菩提ノ及ニモ又ヲゲタブサノ恥カシサヨト云（鶉衣） モトノリ

ひつ〳〵くひとりごころ冬の山　荷兮

ふり捨てゆくかれたる雪の旧　越人

かふ瓦のまよひ見かへる鳥の声　舎六

里人のすゝりけふも　のぞき　宗因

越人と吉田の駅にて

さむけれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉

旅寝して見しや浮世の煤はらひ　同

述懐

草庵を捨て出る時

きゆる時は氷もきえてはしる哉　路通

子をひとりすてゝ田を打囀かな　扶宣

鸐（キジ）

玉葉集ニ山鳥のほろ〳〵となく声きけば父かとぞおもふ母かとぞ思ふ　行基

和名抄ニ鸐雉ナリ家ハ章ナリ二種ニアラズ

良弁僧正ハ鷲ニツカマレタレバ父母ヲ知ラズシテ　ほろ〳〵と鳴く山田の雉子の声父かや母かやあらむ

余所の田の畦ならす浮世哉　蒼梧

高瀬にて

菊の花ましき馬のとかめ乗の径　杜国

桜見てはつかにあるゝ乞食哉　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉

時やりぬれ餅売の柄杓のはてぞかし　荷兮

まつりふかの雨をまろふもり一鍬　同

一本のなえもこる後ひの哉　杏雨

肩衣は褆子（ヒシ）にそゆらせ花の夜　杉風

小倉しやる薪すかるく麻木（カラ）哉　亀洞

雞兒腸（ヨメナ）

三州伊良古崎杜國か菴なり

是を尋ねられて言葉の宿なれと余情に結ぶ格なり

廿四孝ニ曽参囓指痛心より文

曽子從仲尼在楚而心動辭而問母母思爾囓指云云

和名抄ニ奴僕（ツブネ）

九月十日李下の亭にて

かくれ家やよめ菜の中に残る菊　嵐雪

このごろはあさきむらさき嫁菜の摘種哉　曉臺

人の心にひそきはつまで

されはこそ何れこそ宿の一葉の宿　芭蕉

旧里の冬はいぬ津の宿

しかふしの嫁菜にやどる蝉しぐれ　杜國

鐘余達とあるみやとらて

嫁菜かく身はけぶ袖ともすまふせぬ

たゞる人のもとより尺をまやとる嫁菜　越人

越一夜おくれて

鱵（サヨリ）なり

あふちの木母ヲ云 楝（アフチ）字誤ニ

やさう尋常ノ句ニハ悍ヘ三變格なり

一有妻ハそのめなり

名もしらぬ嫁菜に鴫の鳴さより　荷兮

古ゝの人ゑ思ひ出さる嵯峨ふ　嵐蘭

あふちさかりの嫁菜や茶の花ふ　去來

楯の木に霜をさ置て候ぶ嫁なれ　西武

目やまとり耳や山ふるとしの暮　芭蕉

古江や緑のはなくとしの暮　除風

さましの日を思ふ茎しの暮

老をはなれて嫁菜花もおとろふ　越人

ゝきや秋まる嫁菜を刈しけり

昼

春の野ふころなる人の素顔かな　伊勢 一有妻

（朱書）去をハ二元と云詞ハ待まつ句也 無井ハ陰ニある所ありて祝ふも 我つまを絶ぬ情緒時の詞也 是ハ禍書もろ 只それをハ二元物云 嫁ハ初恋ニ述ハ 七羅人也

（朱書）諸乗法数曰掃地有五徳と云 自除心垢亦除地垢 去憍慢 調伏心 長功徳 是也 掃除奴僕ト成ラハ 塵ヲモ脱シテ清キニ至ラントス也

（朱書）ここかしこあれこそなき宿の宿ありともおもわし あめてこそ月ハえええかな

（朱書）此等ノ表ニ従フ者 女十六人美談 學問至ル 珍儀ニテ用ヒテ

子規ヲ聞時ハ離別ノ悲ミニアリト云

堀川百首むかしみし妹が垣根はあれにけり茅花まじりの菫のみして

長恨歌回頭一笑百媚生六宮粉黛無顔色云々

きぬ〳〵や山家のよりもおもしろき　除風

蚊屋出て寝顔あらはす朝ぼらけ　去和

出て見の戸のまゝをまくらぬ小うらかな　文瀾

むし干に小袖着て見る女かな　冬文

もとくげなし妹が垣根は茨なり　心棘

六宮粉黛無顔色

雪の間の稲妻清き月の影　去虹

一度見し人結びの紐もとくなり　尚白

とゝひし折に

つまなしと名をしられし女郎花　荷兮

たれあふ露にぬるる妻戸かな　小春

越人妻妾の覊旅にわかれ〳〵しとてあはぬ契約せし時アリト云

衣々ナリ男女童子置ニ衣別ニ取分ツト云

守武ハ天文十八年八月八日卒

雑談集ニ此句辞世ニ非ズ只観想ノ吟ナリト

禅語ニ生死事大無常迅速

妻の名はなぐさめかねし計送り　越人

松の中たえて旅のよすがかな　俊似

鶏おさへ犬は吠ていさかひしけり　舟泉

うらぶれて案子臣ぬ[illegible]まろかれ　嵐蘭

山畑に汚れもおもしろや草引　松芳

きぬ〳〵を露見よとてもとりはやき　冬松

おそろしやきぬ〳〵のこゝろ跡なき　昌碧

無常

米銭ニ

無常迅速

鶯も南無阿弥陀仏となくなり　守武

古今集さつきまつ花橘の香をかけハむかしの人の袖の香そする
妹ハ千子なり

咲つ散つ燈まきちらしの畠水　傘下

末期ニ

南無や其名く星明の鐘くされ　堺 元順

松坂の涼気さふ人の方なり

鏡にのひやりける　蕉翁

橘のかをり忍ひぬきものりや

いもうとの追善に

手のうへにかなしく消る蛍かな　京 去来

何くれとなく忘ぬ十まれ

何となの小袖さへ帰るちぎり哉　蕉翁

世をさりし妻の身まかりける頃

コ斗ハ江戸ノ人ナリ元禄元七月廿日
残花摘集ニ追悼年田ホノ句ア
リ

山城貴船ノ下ニ小町カ墓アリ

死出ノ里人ナリ

秋の月の桐の葉と思ひ乗し　野水

辞世

何かれと嫉妬一つに主コ斗

千年まてれける哉

似た歌の何ちをまもらん一踊り　嵐桜

一原野にて

貴船や小町か骨のありなきよ　鶴雲

妻の追善ニ

きさみたへしその里人それぬのむ　自悦

李下か妻の身まかりけるを

みそ

稲妻やきのふハ東けふハ西　去来

□訃身まかりし後

その人の鼾さへなし秋の暮　越人

母におくれたる子の悲しさを

たまたまにひとり飯くふ秋の暮　[illegible]

ある人の追善に

埋火もきゆや泪の烹る音　芭蕉

親に身まかりける人を

淋しさのとゞかぬうちを消にけり　嵐雪

鳥辺野のかたや念仏の冬の月　加賀 小春

曠野集巻之八

金葉集ニ神垣のあたりとおもふゆふたすきおもひもかけぬかねの声かな
上人ハ建久元年二月十六日卒
五百年忌ハ元禄二年
其きさらぎの望月の歌ニヨレリ
仁王ハ左ヲ密迹金剛右ヲ那羅延ト云

釈教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

[illegible]おろし[illegible]　嵐雪

西行上人五百歳忌に

[illegible]　荷兮

連翹や[illegible]　胡及

うぐ首に蝉の殻かくる仁王哉　松芳

木履はく僧も有けり雨の花　杜国

つゝら[illegible]　冬松

五元集ニ日輪寺の僧と連歌のむしろにて[illegible]異してト発句アリ

慈恵大師ハ元三大師ノ事也法華八講ハ一日ニ二巻ツヽ講スル事也

序品ニ天雨曼陀羅華ト云々

むすぶ[illegible]僧とも作ん塩肴　其角

東渕明廬山ノ定リニ恵遠法師ニ魚肉ナクチツケタル例ナリト云云

貞享戊辰の歳弥生一日
東照宮の別当僧正の浩房に慈恵
大師近座執事法華八講の[illegible]
よしときゝけれハ聴聞にまかりて

序品の心を

[illegible]むの[illegible]はむらし咲しられ　越人

女房の聴聞をおそれて[illegible]篭られ
奥くらき所あり竜女成仏の[illegible]
[illegible]りて[illegible]ひ[illegible]鼻[illegible]の
[illegible]を

三井寺ハ天智天皇天武天皇持統天皇
鐘ハ俵藤太秀郷龍宮城ヨリ[illegible]
十室ノ一[illegible]此ハ天竺祇園精舎ノ[illegible]
[illegible]

詞書ヲ[illegible]句迄法華提婆
達多品ノ意ヲトレリ
へびの玉ハ草ノ名
讃州
ふ便んハ不便カ
江湖ハ禅ノ洞家一夏ノ修行ナリ
席ハ六ケ月ニシテ生ルト
白重表裏白也平宿束衣ノ
時着之

龍女ノ宝珠ニヨセタルカ便直三千大全世界ニト以テ松ニ奉ル仏則受玉フ云云

水ろしを[illegible]なみてや[illegible]の玉　同

[illegible]の尾上の[illegible]哉[illegible]なり　俊似

三天子ノ産湯ノ水ヲ汲故ニ三井寺ト云ヽ長等山園城寺[illegible]
[illegible]ノ角ニ釣タル蒲山牛ニテ涅槃経ノ文ヲ写シ名鐘ニ文永ノ

古ちやつさぬ鐘の董草
八島哉て　一井

海士の家聟ゆ[illegible]弥生一日　伊豫　千閣

咲[illegible]り[illegible]寺の名牡丹　一井

夜山や木[illegible]しの江湖[illegible]　蕪葉
奈良[illegible]て

灌仏の日[illegible]行ふ康の子[illegible]　芭蕉

灌仏の[illegible]比清しら[illegible]孫　嵩白
高[illegible]て

五元集ニ日輪寺の僧と連歌のみちをふかく案じてと云コトアリ

慈恵大師ハ元三大師ノ事也法華八講ハ一日ニ二巻ツヽ講スル事也

序品ニ天雨曼陀羅華ト云々

むつ海僧とも作れ塩肴　其角

東湖明盧山カ交リニ恵遠法師ニ魚肉ヲツキツケタル体ナリト云云

貞享戊辰の歳弥生一日

東照宮の別當僧正の法房に慈恵大師追遠執事法華八講の侍るよし聞えけれハ聴聞にまかりて

序品の心を

曼陀羅の雨ハむらさき咲しをれ　越人

女房の緋袴を着て法筵に参れ

る人々もありて竜女成仏の心をおもひて

おもひ出しは畠の鼻紙袋の

あふれを

詞書ヨリ発句迄法華提婆

達多品ノ意ヲトレリ

へひの玉ハ草ノ名

讃州

三井寺トハ天智天皇天武天皇持統天皇三天子ノ産湯ノ水ヲ汲故ニ三井寺ト云ヘシ長等山ト云

鐘ハ俵藤太秀郷龍宮ヨリ得タルモノ

十宝ノ一ツ也

駒ハ天竺祇園精舎ノ艮ノ角ニ釣リ玉ヘリ

新羅山伏ノ為ニ打破ラレテヨリ其声ナシト

ふ魔んハ不便カ

江湖ハ禅ノ洞家ニ夏ヲ修行ス

白重衣裏白堂平常東衣ノ時着之

庵ハ六ケ月シテ生ルト

龍女ノ宝珠ニヨセタルカ便直三千大千世界ニトヒテ仏ニ奉ル仏則受

おろしと着るなみだや庵の玉　同

鉄鉢の尾上の花のちりそめり

後

吉ちやつる三井の鐘の草　一井

八島かな

海士の家聖の山や弥生こゝろ　千羽　伊豫

咲かゝりふ庵くれ寺の牡丹　一井

夜山や木蔭しの江湖新庵　燕黄

暮て

灌仏のひよ生れ給ふ庵の子くれ　芭蕉

灌仏の生比清し白がさね　嵐

高燈かな

十如是。相。性。體。力。作。因。緣。果。報。本末究竟等なり

大乘ノ經中ニ此語多シ

おがらハ盆會ニ墓ヘカケテ手向ルキヒサキ焼籠なり　石ジヤウハ蛇籠なり　先切竈なり

百味百菓ヲ供ルヲ舟ニハシレナケレバ三積会タル盆ヲ供フトナリ

德の前礼儀とかりの清山へ　一雪

詠ニ来て今一日の清水かな　加賀　一笑

十如是

おもはずも雨を清水も南　荷兮

即身成佛

夜かげの昼寐はみんの佛かな　恵益

ふところひや僧の鉢する夜ころも　嵐蘭

盂蘭盆目連因母陷餓鬼獄中故設中功徳令諸餓鬼一切得食也

おそろしく門をでありく施餓鬼棚　荷兮

おがらの火をとるむしの跡かまはま　探丸

石籠に施餓鬼の棚のくづれかな　文里

魂祭舟より酒を手向けり　亀洞

知足寺ノ雪窓ノ句ニ照シ見ルヘシ

回向文ニ　願以此功徳平等施一切云々

四時ノ景物トハ定家卿十二月花鳥ノ内ニ水雞ノ鶉有ヒニヨルカ古本鶉ハ鶉ノ書損カ

四時ノ景物トハ年中十二月ニアリ所謂常好花杜鵑水雞鶉ナド水ゟニ十二月花鳥トテ又十二月花アリサテ牛ナ食ヲ

心似ニ習ハヌトヰフハ徃ノ名モハレタリ西域ニ比丘アリ群ナノ面ヲタルテ言栈食ニ充ヘシト則地ニ落ツ化ノ曰ヒ丁モテナリ食ヲヘカラズ則モテ丁傍ヲ建ツト

魂まつりとりてくさる酒を　卜枝

掛緒のしらみさん松のかげ　野雪

平等施一切

掛緒にまかり人をとめかり　俊似

稲妻に佛もとむ雲の中かな　荷兮

ある人四時の景物ありて水鶏と鶉とを容不圓意を試みして

荷兮

寺の奥行よ

こゝろハ言葉ニテ秋季ヲモテリ

松葉ケ谷日蓮上人四年籠ラレシ所也

蕪も御寺の鼓にこそりうて　甚角

さそく出て坊主となりしや月の舟　一井

鉢の子に未詳をうける法師かな　卜枝

人のよくふ塚にて立出んとし

はるふかき志なきとふれは

ありて文　ともしらり一時雨　嵐蘭

伊倉の安国論ちかくて

常せは涙やまふ水るらん　越人

古寺の雪

曙や伽藍しの雪見舞　芦竹

同

千観ハ扶桑隠逸傳ニ出タリ
五元集ニ大津ノ駅ト前書アリ馬
もなし小やこハ鼓鳴リ
薬王品ハ法華經ニアリ

徽雨（ツイリ）

雪折やかゝる二王の片腕　僧如

帰りてこゝろまかせし雪仏　一井

かくれすむ人のまつや鉢たゝき　文闌

千観かるもかはりし年の暮　其角

薬王品七句

如寒者得火

まつ白み梅のさかりや東より　胡及

如裸者得衣

雪の日や酒橋わたす方すゝの木　、

如商人得主

双六のあまる数つもりて来　、

一貧民倉破倒神社極楽寺一書

一先祖之山荒ス墳墓破壊荘私有一書

大角豆

万葉ニ協字鏡ニ惰怫

獅子ハ欽敷ノ主之故諸神諸
佛薩埵乗之

如子ノ得母ヲ

竹立ておけハとらくさゝげ哉

如渡得船

月の浪儀の腹伐よりゝ

如病得醫

かゝく時清水尽ける山さとゝ

如暗得燈

秋の夜やあぶら乏き時のおきあて

神祇

古宮や雪汁かゝる獅子頭　約雪

二月廿五日奉納

御石集ニ旅テ月代アル入歳ト
アレバ総髪ニ前髪ニハ有キヤト
見ユ

絵馬ハ神馬献スル代りく

きさらぎや廿四日の月の梅　荷兮

きんしうも梅散りかゝる庵かな　円

鶯も水あびて来よ神の梅　亀洞

上下社さらぬ世ゝの神の梅　昌碧

灯の光りて梅の中　約雪

何と思ふもち兎ハ雲し梅の花　越人

見えなくなりゆく梅の杜の梅　舟泉

月影もなかりし梅の露　雨桐

門前で梅の瑞籬きらみけり　重五

驚かする人の後のさぐり杖　玄察

詣来て歯朶かざりたる社かな　鈍可

高砂ノ謡ニ久しき代々の神の代の夜のつゞみの五文字トアリ

宮の後川渡りて見るさくらかな　李桃

潮干潟の本社葉の中社桂かな　好栄

まさきかん神楽の中を通りけり　玄察

宮もりの灯をさくる火影かな　亀洞

破扇一度はちりの花被かな　来学

川条と瘧なされは清被かな　荷兮

こかふしや里の子敷く神楽かな　尚白

此月の天地そいともいかなまつり　松芳

名さわや禰宜の稚なる酒筒　筍楼

若宮奉納

竹声もぬまも幾久なまり神々楽　利重

鈴鹿川伊勢國ハ瀬川ノコと

肩衝　とし頃をたのしみて名物の衝なりし故まさなき茶入の事也　国基

續後　千代の古道の山の玉椿　家の代もあり八かくし鎌倉右大臣

古本青苔ハ青海苔ノ書損灼然今改

諸の方を拝す事老の神楽一つかな　吟水

鈴鹿川板の旅の神楽かな　昌碧

かくらの神楽ハ山を大神　村俊

榾梳や清稜かかる蝶なくや　卜枝

祝

肩付ハてよまずぬ衣裳之　冬文

荷兮か四十の春に

いく春も竹その節に見ゆるかな　重五

天の代やみとくさ見る玉椿　越人

青海苔を今年もとれ沖の石　傘下

生身亀足のまてに杖つかん　亀洞

肩衝ハ供ニ肩アゲノ事カ

（らむといふ掛て切あらはれと詠）

色ハ青ノかたちと硯子あると青海苔なる事なるべし

明白（ミヤヒ）

鴻鵞やさらしなに目を驚かす／それも迎ともやどの宿 　玉仁

千代の秋にほひにうるはしき菊来 　同

きさしかけたる人やかつらの月

菊花一枝をさしむの色とあり 　芭蕉

文選ニ天台山ヲ四明ト云 日本ニテ叡山ヲ四明ニ比ス 東四明ハ東叡山ヲ云リ

永井信濃守家臣佐川田喜六昌俊 寛永年間ノ人也

青山の花咲けるの歌かへるさに見のしらるを

虎ハ小学致知類ニアリ

曠野集員外

誰か思はさらん 縫ふ事ゆゑあつて

錦のやうにまきさらん我東四明の麓に

かくて花の心をしれるところ 花よりて

佐川田喜六のよしの山の歌をもしれる

哥をと実に此哉を又

麦喰し鴈とおもへとやれも

此句屋縞の船頭子の紙をそて芭蕉翁

続てをとなしさらに守りてさいつれ

田野人 居を移して実に此句を盛せ

むかしなやさありける人の中に 虎

古詩ニ巴東三峡猿声悲猿鳴三声涙沾衣
杜甫秋興詩ニ夔府孤城落日斜毎依北斗望京華聴猿実下三声涙奉使虚随八月槎下略

花ノおおひ嵐屑ハ麻ノ如し清テ云ナリ

古本銭ハ書損字典ニ棧形如箕

の物語ちらに虎に追れたる人ありて
猶魚を疫しこゝより謀のおおふ
魔のしきる事た虎の如し猿を吟て
字まる三声の涙をしたるも実の
字虎杜のこゝろなるを知猿声也句
をおもひて

麦を忘れおおれ嵐屑なふし　素堂
らの知人家ますつりてとけられしを
三人家きいて夜も吟して
手をさし　かまくて出峯の後実　野水
棧の路も麦おろす春の雨て　荷兮

和名抄ニ粔籹ハ蜜和米煎作ナリ今ノオコシナリ

鷹ろ山トハ鷹ニ元山トミコトナリ

大原千句興行ニ云

ものしづかなるおこし米うり　越人
門の石月待闇のやすらひに　水
風の目利を初秋の雲　芳
武士の鷹うつ山もほとゝぎす　人
志ちらふつて瀧の鳴る音　兮
袋より経とり出す草の上　芳
づぶりとぬれて帰る馬方　人
立ちくずる松の木の端　水
句に行くむかし山の中　芳
姨捨さす一重桜も咲残り　人
隣でるゝもかくや夕月夜の春　兮

古詩ニ巴東三峡猿声悲猿鳴三声涙沾衣
杜甫秋興詩ニ夔府孤城落日斜毎依北斗望京華聴猿実下三声涙奉使虚随八月槎下略

花はおそれぬ鳥なれば屋なぶらし 八清テ云ナリ

吾妻鏡ハ書損字與ニ棧形如箕

の物語ちりは虎に追はるる人ありて
猶命を変しくるより謎のおそふ
あるのこさる予左のおし猿を呼て
実にさる三声の涙とよむも実の
字有杜のこころなるを知猿のなれ句
をまもらんと

麦を忘れ鳥になれぬ鳥なふし　素堂

うの矢人[illegible]をつらてをけられしを
三人[illegible]きいて夜も吹して
[illegible]かさし[illegible]岸し　の後実　班水
橋の路も[illegible]春の[illegible]て　[illegible]兮

和名抄ニ糏粏以蜜和米煎作ナリ
今ノオコシナリ

鷹ろ山トハ鷹ヲ元山ト云コトナリ

築ヲ

大原千句興行ヲ云

もの静かなるおもし米より　越人
門の名月[illegible]のやまぐちに　水
風の目利き初秋の雲　号
武士吹[illegible]山も[illegible]　人
[illegible]滝の鳴る音　兮
袋より[illegible]出た[illegible]のうく　人
づぶ[illegible]るるむふ[illegible]　水
[illegible]の[illegible]の端　兮
[illegible]句[illegible]小山の[illegible]　人
[illegible]一重桜も咲[illegible]り
[illegible]もなを夕月[illegible]　兮

粕粒

阿ら野[illegible]俳諧ノ亀鑑

樂天詩大体四時心總苦
就中斷腸是秋天 夕さびかん

利根川水源ハ上野ニモテ関東ノ大河ナリ

井ノ 亥猪ナリ 和名抄ニ豚ハ家猪也

源氏若菜ノ巻柏木右衛門古事ナリ

寛省ニヤ ユリ字三ヶ所打越ニアリ
きいとかはらび

脚色 俳ニ阿るかゞ

霧の外は池の雲まで雨おもし 写

秋をあはれなく盗人の妻 人

明る夜も西も東も鐘の声 ゑ
「花の定座之 雑をせしハ変格之

宝うけなりたる利根の川舟 写
十オ

冬の日結て[illegible] 人

[illegible]羽織うち着て ゑ

ぶらしときの[illegible]の鐘[illegible] 写

撫つきに和人のかるらん 人

柏木の結筆の[illegible]のつくしと 水
若菜下巻の[illegible]

きくやくるの[illegible] 写
をくおこりもおし[illegible]

月のかけより会[illegible]辻[illegible]撲 人
月の詠にあら[illegible]

赤鶴ハ一人当ト鶴ナリ
万作ハ豊臣秀次小性之事ハ将軍譜ニ見エタリ 十八歳人々代
[illegible]

加ヘリ
濫取ナリ

秋は幸より里の海桶 水

露しられ赤鶴と驚かせて 写

う袴をまるの万作の[illegible] 人
「かゝふる濫に[illegible] 水
「茲月の定せし

火箸の[illegible]のあつきし 写
十ウ

かくまの[illegible]を人の[illegible] 人

水せきとめて池のかへより 水

むさうち[illegible] 写

株を[illegible]根[illegible] 人

墨を見ハ正月こそに忘れて 水
「句ひの花の定坐ニ正月をせしハ名人の妙業之

大根をさらて干ぬ[illegible] 写

楽天詩大作 四時心總苦 就中断腸是秋天

利根川水源ハ上野ニモチ関東ノ大河ナリ

亥猪ナリ 和名抄ニ豚ハ家猪也

源氏若菜ノ巻柏木右衛門 古事

寛省ニヤ ナリ ユリ字三ケ所打越ニアリ

脚韻 俗ニ阿るかが介

露の身ハ泥の中なる施おもひ

秋をなおもしく 盗人の妻

明る夜も雨も東ま 鐘の声

「花の定座之雜をせしハ変格と

定らぬ ぞなる 利根の川舟

十ヲ

冬の日影てらして 風も寒り

家子ハ狩と 羽織うち着て

ぶらしとものふ駒 の鐙 とて

撫つきとも人の見るらん

柏木の縁筆の花のつくしさ

若菜下巻の

きぬやくるの 夢え ころ

月のかげより会まえり 辻君 撲

赤鶴ハ一人也トモ鶴ナリ

百作ハ豊臣秀次小性之事ハ将軍譜ニ見エタリ 十八歳 人々ニ化

かへより 灘取ナリ

秋のゆうまくり 里の海桶

霞しられ 苗ぶりの 盃かけて

うね袴と 志の姫 不破 の関

十ウ

「かこなる 諫ま 涙こぼれし

「花月の定せし

火箸の手揉てその あつきさ

かくれもの兄をよぶ人の言ふら

水せきとめて 池のかくより

むさり顔も 宮らしれ

柊きふる 手加 根 なり

「墨を見ハ 正月こそれ 忘れて

「句ひの花の定せよ正月をせしハ名人の妻

大根きざみて 干ふ芝らし

遠浅やハ詠メノヤ治定ノヤ也云
標ナリミルシノ木ヲ云

のどけしやハ歎美ノやナリ

よこ〔〕やナリ

麻

遠浅や浪にしめさす蜊とり　亀洞
はるの〔〕に酒のなき里　荷兮
のどけしや〔〕泊に荷を解て　昌碧
百足の懼る菜〔〕けり　野水
夕月に〔〕の〔〕をうちながめ　舟泉
秋〔〕の葛を〔〕に引きよせ　釣雪
萩の〔〕ても〔〕　筝
一貫〔〕して〔〕　古跡　亀洞
〔〕の〔〕宜禰が麻　荷兮
〔〕楽〔〕年　〔〕　昌碧

七十

涼しやハ歎息ナリ
あらうきれしやハ偏ヒ云ナリ
此やハウタカヒナリ
慶長ノコロハ類髭ヲ好メリ
法輪寺之
呼出シノやナリ

一巻中やの字七ヶ所

いつとなくほつれてある花造り　釣雪
酒飯まゐりの木〔〕ならし　舟泉
涼しやと莚もて来る川の端　野水
あらうきれしや後の月　荷兮
秋風に女車の髭男　亀洞
袖ぞ一霧にせき嵯峨の法輪　釣雪
時しらぬものまゝくれ〔〕の春　昌碧
八重山吹をさくらちらし　野水
日の出や〔〕　舟泉
心やまけなる土ならす　亀洞
雨まで実やる稲の山寺まで　荷兮

高田派ハ一向宗ノ一派ナリ

小湊ハ日蓮上人出生ノ地誕生寺ト云アリ

垢離かく人の着(キル)ものゝ番　昌碧

配所(ハイシヨ)にて干魚の加減おもふらん　釣雪

舟唄うたふ声の細し　舟泉

むく起て物いひつけて鏡かな　野水

門まもり菊によひこむ　荷兮

入込て足軽町の薮深し　亀洞

おもひ合ふかれも高田派　釣雪

蚤もきえるもとり此下の月　昌碧

やゝ初秋のやうに吹く　野水

燕もおもふかたの寮の窓　舟泉

水清き中に安房の小湊　亀洞

譯ヘやの字集つあるも奇と云まあらぞ

夜のやハ詠メノヤナリ

桶のかゞみハ箍(タガ)ナリ

田作ハ鰡陽魚(ゴマメ)ナリ

一巻中やの字七ツアリ一奇ナリ

古諺ニ備魚浮春水

原本鰍ハ鰍カ鯲(トシヤウ)ハ和字ナリ

同文通考ニ出ツ泥鰌(トジヤウ)ノ訛音

蠼螋(カキリ)ホヒ 俗ニオボチラグリト云

和名抄 卵 加比古

らんハ猕シ疑フノ詞ナリやの字ノ有無ニヨラス

きひまきハ齎タキナリ

俗ノミシでもなきなり

神代ニモアリシカ人皇垂仁天皇秋七月當麻蹶速ヲ野見宿祢ガ投殺ニ迄ヲ思テ角カ有ト

夜のやや高田派の縁行て　荷兮

桶のかゞみを入しまひけり　昌碧

人をおくる狐の案さしてまゐり　釣雪

つい田作りに落る精を　野水

薬とて鰍をとりし苔の水　舟泉

柿のうちのかきものの卵(カヒ)　松芳

孔子家語曰魚八ヶ月ニシテ生之則七十二候ニ此気ニ乗リ四月ヨリ近ク出ル八ヶ月

夕霧深きのとゞそつらん　亀文

胡麻ハ七夕ノ夕霧ヲ八日ニ知ルト深物ヲ七夕ニ止リ入ルヲ見テ帰ル人

ゆふぐれにおもひたつふりゆる有磯　荷兮

秋風のをのぞも等く頬にもれ　芳

きひまかなる勝角力とて　泉

木ノ端ナリ

火鼠ノ事竹取物語ニアリ
神異記ニ火鼠取其毛織為布

火浣布ト云物アリ

かくや姫の事アリ

燕ノ中納言子安貝ヲ取ルトテ高キヨリ落テ腰ヲ折タル事アリ

狭衣ニ飛鳥井の君戚儀師ニ奪れのひし面影ナリ

君の年寿タルヲ嬉しク夕顔ニ…歟ニテ灯火ニテ灯籠ノ侍ナ歟

にくさも又その揺らんと立ける　守
ゑゑまし桝の手形木の香し　文
火鼠の皮の衣をかりて来て　泉
涙ながらにうち嘆ひつゝ　芳
嘉てより隣をかりてを帰り家　守
酒の半に猿おちてなる　文
紫の年を幾枚もせん米をしき　芳
よみて双銭の陰をなんになる　泉
行きもうちまかりなりちかの宮　守
月の織や飛鳥井かさへ　文
灯りすさまじをおちて吉の風　泉

隆達ハ文禄中ノ人小唄ノ上手ナリ
初日蓮宗ノ僧 堺鑑ニクハシ
纐纈嗄ナリ

美濃國

扇

法華經ニアリ

数珠くりかけて纐纈のうく　芳
隆達も入歯にならの恋もなく　文
十日の菊咲かし来るなく　守
隆達節ト云アリ又隆達ト云泉州堺ノ薬店ナリ
山里の秋にひとつを生鰯　芳
長持あけてのるやゝ窓　泉
まだ人を浮きを渡る月の影　守
君の光を八百咲かなく　文
雨しきは藪井の雨咲かぬの肉　泉
遂なきて葬式ありかね家　芳
つらしさ籠るものうらはなく　文
咲かなく堤婆品よむ　守

濱辺ニテハ貝ニ緒ヲ付下駄ノカハリニ履リ

瀑ハ借字

けしのむぐら垣にかぶり　蕉

味噌するおとの隣さはがし　越

黄昏の門さまたげに薪つむ　兮

次第しらずもあとくこそすれ　文

春の野に赤貝さげて行く女　越

顔見にもどる旅の立　蕉

きぬぎぬや瀑(サラシ)を男に頼みおきて　文

さらおもしろき山口の家　兮

時雨ゆくぬさの杉のおもかげ　荷兮

冬の木葉にうもるる戸の口　野水

容儀(カタチ)又傾(カタブキ)カ未詳　不祥(サガナシ)

大和長谷

懶(モノウキ)中古轉ジテ物ノ憂ニツカフ

衝張(ツイバリ)　強梁ナリ

引捨し車は琵琶のかくれまで　同

たふさぎならす人のからかさ　荷兮

身の秋や旅の衣にあきれける　同

一夜いりぬし霜のまくらけ　野水

和歌なら世の寮の坊主ぜ　同

茶烟ふむたそ降りかけくる　兮

土龍(ウゴロモチ)をりくよ操りせて　全

卯ぶおしきに袖を拂ひき　水

通路の実張(ツイバリ)こけそ逝このくり　全

心得ぬあらし恋の浮筆さ　兮

代やまりるとやもしと詰めて　全

源氏葵ノ巻ニ六条御息所ト引入ノ大臣ノ北ノ方ト葵ノ上ト車立所ニ仕丁供ノ争ヒ見テイト喧シキ說同各ス

子ーツヨリ丑三ノ近卯子モカタラワヌトララヂ逝返ルトハ附タル　書平齊ノ家ヘ代参リ　トハ化タリ　日午字安ハ聽胜アリタリト依テ点ノウハキ　代一ツハ全[illegible]之京ヲ伊勢ヘ往来三十六里七日ヲ片旅用[illegible]

此ハタリ表向ハ俳諧平話ニシテ内心ノ大膽ナル了計ヘカラズ

天仙蓼ハ中古ノ俗字ナリ和名抄ニ木天蓼時珍云其芽可食

閙キ

むかし浄瑠理ハ薩摩ノ浄雲ナトノ流ナ
浄瑠璃ノ了ハ故実多ケレバモスス駒ノ宿ナレバ只三弦モナリ手拍子ノ一口浄瑠璃ナルヘし

鋳一懸に鯉一かし　水
月の影若衆ちらん　兮
思ひ侘うらろしまめて　全
天仙蓼に冷食あさし秋の露　兮
かけくらげの花に夜寝の中　水
あくるを待つて若狭の森　全
夕せはしき海つれてやる　兮
駒のやど明るは信濃にふ甲斐　ゑ
秋のはらしにむかし浄瑠理　兮
めでたくもよばれにけらし生身魂　ゑ
谷の月のまへのまるやまて　兮

住ニ住フト活ク詞ナレト東本マヽ通俗ニシタカフ

山の端に松と楓とのわかちたる　ゑ
きのうきたまきをとる　兮
暑きるや袷のけたちり引袴　全
古き鼓をきさに踏手のあるく　水
こつこつと寐まる木綿の夕枕　兮
気立のよきを盛年にかかる　水
忍ぶとも去らぬ新造一二年　全
庇をつけて住居かはりぬ　兮
三方の数むつくしと並べたる　全
供奉の草鞋を揃へ掃こと　ゑ
賑くや小塩大原嵯峨の花　全

夫木集ニ夜の衣のさうりさく
しくすむ月を示すもの二の
あまうちをそそそ見る

誦(ズンジ)

歌本團 和名抄 團扇 古文ニ
紈扇如團月

人おひまり(夏)まの川岸　草

月さしのあるらしき八重の暑さ
もなく涼しきおもしろさに柄を
さしぐむもよろき團扇を　宗
澄清河の鳥をまん下出まで夜
の衣の裾をつふあまね平にたもや
すまらつきぬ

月に柄をさしぬるは紈團扇
秋のちるとそうり夜の衣の裾　越人
とられを縫重くてころもがへ　傘下

槽ノ柱ナリ 瘤(ダヘ)ナリ
輕キ持病ハ表ニイマサルニヤ

啞方(アハフ)

眉(マユ)

おもひかけ形をふ風炊のそら　円
まさ木柱つくおまてよりかり　人
使の者よ返りやすくまる　円
なれくもを猫の子をえるさあるを　葉
年ふるまでなそうりし　下
それそやふきの谷見てあ里ひ　円
まさおもくけ不涼あふまく　人
大勢の人を法遊をまちをそ　円
月の夕不鈎瓢 涼りしの　下
喰構も夫くふ杯も皆衆し　円
秋のそしきの畑見る女　人

猫ノ丁事林廣記ニ故事アリ略之

源氏物語正月より六月迄ニ生れたるものを此の殿と称ふ七月より十二月迄ニ生れたるものハ石菜の殿を称ふ

井蛙抄ニ顕照ハ独鈷を持寂連ハ鎌首をもたげて歌論せり六百番歌合ノ時なり

灯ハ燈ノ俗字

手作りよりハ此世をさらく[illegible]　同

森もこのちからも文字の御[illegible]　下

むの殿はこふくらて称する[illegible]　同

花もりの梢のこいきまきの世　人

打あれて浦の苫屋の[illegible]　同

円つきひりて[illegible]中る犬　下

破きめの水は飲くきはきれや　同

[illegible]るのかる首の[illegible]　人

歌ゐもせ独鈷鎌首[illegible]　同

ゆく献まの皆ちしのひにけり　下

灯壺の油かなしく押かへし　同

百万ハ謡曲ニアリ

花ノ春ヲ花ノ弥生ト取ナシテノ揚句ナラン

推古天皇ノ御宇百済ヨリ芝耆麿来ル面ニ斑白ヲ生ス山ニ[illegible]

茸

白をおこせハきりしく[illegible]　人

咲風よみのこゝろ草のふらをと　同

半ハこゝろさて菜山の秋　下

むつしと身ある魚の飯よ松　同

人の詩ふハあつこともなし　人

者一子ヲ々ウ子テ独ヒ出レ清気ウニヲ回リ会セ々ルナリ花ニ桜ノ作ト論スル句也

皆因茶中すま佛　人

百万もくるひ狂ふまの春　下

田楽きれて桜淋しき　人

井蛙抄ニ顯昭ハ独鈷を持寂連ハ鎌首をかけて歌論せり六百番歌合ノ時なり

灯ハ燈ノ俗字

源氏物語正月より六月迄ニ生れたるものゝ賀を祝ふ七月より十二月迄ニ生れたるハ人の菊の賀を祝ふ

宗祇より此世をさむくつき　同
探あらたまる文字の中をむしる　下
むの賀にこふくら祝ふる淀葛　同
花もりの瓶のこけき春の世　人
打むれて浦の苫屋の夕千尋　同
内つくりて相国ゆる犬　下
破きめの水は飲くさ恨むや　同
身もちのかるの境出し　人
取向せ稲鉢鐘着なかる　同
出く献立の膳ちらひけり　下
灯台の油こぼして押かくし　同

詩豳風ニ九月叔苴ヲ麻子青苴ノ誤字カ原本草書ノ苴ハ苴ニ相似タリ諸説紛〻

信濃ノ地名

内をおこせはきりくし初めて　人
吹風にあのころ草のふらるを　下
岸八ことをて葉山の秋　人
むらしを自らるる兵の歌よ　同
人の誌ふいあつこともしれし　下
をまいりし苴や寄せを富む込　人
干さる寒のくらふ町中　下
杉らしとふ法の森の宮時が

苴 シヨ ツト カラムシ

推古天皇ノ時百済ヨリ芝蓍来ル

下 人 下 人 円 下 円 人

五石ノ瓢ノコトサコ集ニ注セリ
荘子曰我樹之成而実五石
利ヲ離レタルト云フニ見込ナリ
白氏文集巻十二長安古来名利地空手無金行路難シ
くるしきハ狂シナリホトハト通
古詩 長安古来名利地空

理をはなれたる秋の夕暮　越人
瓢箪の大きさ五石ばかりなり　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
何事も長安は是名利の地　仝
医のおほきこそ目ぐるしけれ　越人
いそがしき師走の空に立出て　蕉

玄番ハ掌諸蕃事幷ニ僧尼度縁事一 相當従五位上
足駄はかせぬ句前句ノ嗜ナリト後ニ祖翁ノ云ヘリト為弁抄ニアリ
物いそくさきハ磯臭キナリ
漣や志賀の濱辺に絢ありて比良の高根の花を見るかな　頼政
鄭谷

ひとり世話やく寺の跡より　人
此里に古き玄番の名をつたへ　蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　人
きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　蕉
風ひきたまふ声のうつくし　人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　蕉
物いそくさき舟路なりけり　人
月と花比良の高ねを北にして　蕉
雲雀さえづるころの肌ぬぎ　人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝
うき世はやすくし麦の挽割　蕉

玄蕃ハ掌諸蕃事并ニ僧尼度縁事一相當從五位上
足駄もはかせぬト句前句ノ噂ナリト後ニ祖翁云ヘリト为弁抄ニアリ

物磯臭キナリ
漣や吉野の濱辺に釣をしてなぎさの高瀬を見る哉　頼政

鄭

伝白葵ノ巻廿ノ上十四巻廿果ハ上モナキ方ナリトテ色ノ最上ニ紫トハサセカホソリハヒハツシタオヤカ又其上ニアテヤカニト云ハ此
君ノ伴ヒ後朝ノワカシラオキヽテ起タマハス屋
アテモラチフリヲ子夜子ノ子ノ銘サイハヒヲフシ名ホノ偽シ

ひらりと結やく寺の端より　人
此里に古き玄蕃の墓つくる　蕉
足駄もはかせぬ雨のあけぼの　人
きぬ〳〵やあまりかぼそくあてやかに　蕉
風ひきたまふ声のうつくし　人
手もつけず昼の御膳もすべらせて　蕉
ものいそくさき舟路なりけり　人
月見よと引汐の高瀬を心して　仝
一庵在へつるこゝろの爪ぬき　人
破戸の釘打付る春の末　蕉
うき世ハやふりし麦の挽割　人

音古詩長安古来名利地空

諸注甚多臆説多シ うつひゆく声とよめルハ非也 声ノうつひゆくハ来秋ノ頭也 此句ハ渡ル厂ノ
うつひすゝしき枝も眼も甚心ヲ得ナ 通 さひあるふハ 仲秋十日前ノ詞也 良夜ヲ
向フニカヘタレバ さひかるゝ牛欲の月也 サテ又一句ヲ吟シ味ヒテモミヨ ヨクシキナバ
カラヒヤトハ云モ雜モ古今ニ此ふすれるあとなりまれのもとさへ のうしと此ニ
吹わたるゝ折 何神ニテ聞タ計テハカキヽノ様ナル此ヨク聞ケハオマヒスヤ喧
又囂又嘈トモ書テ声ノ乱ルヽ形也 神ナノ事ナレハメウラシク思ヒヨクク会ヲ
入テ聞ハ丁ハノミ叫トハ盛紅喧シキ折レトムフ意也 カマヒスシ カラヒス
シウトマト通スル也 ニヨクシ聞ケハ うつひすやゝケハ一句聞ヘスよくせすけむ
かしたりともムハナキモアリナシ 何を知アあまをからひ来るを 譏也

声のからびざまそや、ハ歎息なり
諸説紛然万葉ニ秋草帝ニ
花のあハきぞくさえうるち
これなりトアリ
和名抄ニ蘭蕙ノ二字フヂハカマ
トヨメリ今ノ建蘭ニハアラス

五石ハ瓠ノヿヒサコ集ニ注セリ
荘子曰我種之成而実大五石
利ヲ離レタルト云フニ見ユ
白氏文集巻十二長安古来名
利地空手無金行路難シ
くるしハ狂シナリホトハト通
音古詩長安古来名利地空

深川の夜

雁がねも静かに聞ばからびずや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤袴誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕暮　越人
瓢箪の大きさ五石ばかりなり　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
何事も長安は是名利の地　仝
医の多きこそ目にかゝりけれ　越人
いそがしと師走の空に立出て　蕉

ひとり世話やく寺の跡とり　人
此里に古き玄番の名をつたへ　蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　人
きぬ〴〵やあまりかぼそくあてやかに　蕉
風ひきたまふ声のうつくし　人
手もつけず昼の御膳もすべりきぬ　蕉
ものいそくさき舟路なりけり　人
月見むと汐干の宿を出て　蕉
雲雀さへづるころの氷ぬき　人
破戸の釘うち付る春の末　仝
うき世はやめしき妻の挽割　蕉

玄番ハ掌諸蕃事并ニ僧尼
度縁事一相當従五位上
足駄はかせぬ句前句ノ噂ナリト
後ニ祖翁答ヘリト為弁抄ニアリ

物磯臭キナリ
漣や志賀の浜辺に網すゑて
ならの宿根の声を聞哉　頼政

壓

カホソリハヒハツし　タオヤカし　又其上ニアテヤカニトヨ

鏡の齒ナリ万葉ニ真澄鏡又白銅鏡

御座所ナリ

山家集 本とくさん(?)…しもこもら(?)初瀬の山ハ…

生憎ハアヤニクト云言葉也

源氏夕顔巻 山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにてかげやたえなん

東坡詩 馬上續ニ残夢

遠(サヤ)

家なくて服(フク)紗(サ)にあまる十寸(マス)鏡　人

物おもひゐる神子のものいひ　蕉

人去ていまだ御(オ)坐(マシ)の匂ひける　人

荀彧ト云人ハ生ニ名体ニ香気アリ其人去テ後三日ノ間匂フト故ニ荀令香ト称ス

初瀬に籠る堂の片隅　蕉

時鳥鼠のあるゝ最中に　人

垣穂のさゝげ露はこぼれて　蕉

何やらむ語ふ妹が夕ながめ　人

此二句共ニ妹ガ相ヒ想ヒ又夕息ノ上ヲ述テ主退王ヲ待ノ心

あやにくに語ら涙つゝむぞ　蕉

此歌先七句ノ前北ニヤ次ノ勤ニ居賤ル夕モ夕顔ノ上ヲ馬ニ乗玉ヒタ帰し

行月のうはの空にて消にけり　人

是ハ後所ニシテ紹ケ午日ノ上ノ体し

枯もまとし歎よい絲ふり　蕉

秋の田をからせぬ公事の長びきて　人

古今集 秋 秋風に初雁がねぞきこゆなる誰がたまづさをかけてきつらむ

漢書ノ蘇武ガ古事ヲフクメリ

さいくなるゝ文字問にある　蕉

いそがしく瓦庇の木葉掃(ハキ)　人

弛気なる子の声ぞかしましき　蕉

むの比談義まゐりもふやはし　人

田のことを咄て膳(スヱ)きくらち　蕉

翁に伴ひて来る人のめづらしき

しら牛

荻(オギ)君(ツキ)子が宿の文や天津雁　其角

之拙者の月見堂をうつりより　越人

以来菜秋の庭ふ雲をさ引ありて　仝

原本唯ハ書損
齡齒(ハギシリ)和名抄ニ波賀美
目瞼(マブタ)又 万奈布太
東鑑六ニ文治二年三月一日豫州妾静及母礒禅師自京来ニ鎌倉下略
二人静トイフ謡ニ女ニ静カ霊ノツキテ菜ニ人静一テ舞タルコトアリ 又詞ノ中ニモ あはれおもろしのみを
行ハヤトアリ 奇疾方ニ九人自覚本形作両人並行並臥不弁真仮者離魂病也
燃(タキ)ト讀来レトイクツキノ上男各トハイカニヤ万葉ニ煩(ネツ)トヨメリナヤミニ
同シ 原本熟ハ誤字古詩ニ酔後

錦てらさく菜ハ水すゞしる　角
詫て来て砧ゆかける夜衣　仝
歯きしりてさく暁の杵　人
恨みる涙かぶふとゆりて　仝
静か前の舞をまもる　角
空蝉(ウツセミ)の離魂(カゲ)の燃(タキ)のおそろしき　仝
ねてもすりゝ取る金二万両　人
いとをしき子我他人とも名付さ　仝
やけと呑てころしつまさる乳　角
酒熱き耳につまるさゝめごと　仝
思ひをもつかぬ月の江秋ぶ　人

引揚テ秋ノ已 衣ヲセシモ前 ク作ニ依テ之ヲ カタシ

耳熟(アツミ)トアリ 私語(サゝメゴト)ハサゝやきコト也
けふりの富士ハ須弥山ノ一転カ
新勅撰賀 うれしさをむかしハ袖につゝみけむこよひハ身にもあまりぬるかな
平家ニ西王母ときこし人も昔ハありて今ハなし 東方朔といひしものも名をのみきゝて目にハみえず 又列仙伝ニ委
よしやハヨシマヽヨノ意ナリ 朗詠 言語巧偸鸚鵡舌
無情(アヂキナシ)

ためしの富士ハ法華秋の暮　仝
ひとさしぬる峯の一瓶　角
饅頭さえき袖ふつくるる　仝
うき世ふつけて乱ぬ人ハ秋　人
西王母東方朔も同ふハ只ん　仝
よしや鸚鵡(アウム)の舌のみじかき　角
ねちきすれや戸ふうをきゝわるゝ衣の妻　仝
恋の秋とてもみをふ独そのかん　人
やゝ思ひ捨し秋ふ打拵て　仝
米づく音も師走なりけり　角
夕鳥ねの長ききふ暁のころ　仝

原本唯ハ書損
齡齒 和名抄ニ波賀美
瞼又 万奈布太
東鑑六ニ文治二年三月一日豫州妾静及母磯禅師自京来ニ鎌倉下略
二人静トイフ謡ニ女ニ静カ実ノツキテ twenty二人静ニテ舞タルコトアリ 二ち洞ノ中ニモ。なのおそろしのゐるを行ツやトアリ 奇疾方ニ九遍自覺本形作ニ両人並行並臥不ニ弁ニ真假ニ者離魂病也
繊ト讀来レトイタツキノ上男各トハイカニニや万葉ニ 煩トヨメリナヤミニ
同シ 原本熟ハ誤字 古詩ニ酔後

餘てるまゝて 菜ハ水まかせる 角
谷ゝまて 旅ねかける 夜衣 仝
歯きしりまゝく 暁のゝ祢 人
恨ゝゝ涙かぶふとゆりて 仝
静出前の跡を まとむる 角
空蝉の離魂の 燃のおそろしき 仝
なのまゝり ある金二万両 人
いとゆしきる 我他人とも名付く 仝
やけとまてゝ見し つるきうれ 角
酒熟き耳ふつきゝるさめを 仝
魚まゝも つらぬ 月の江 秋なる 人

耳熱トアリ 私語ハサヽやキコト也
ゐめ冬の富士ハ須弥山ノ一轉カ
新勅撰賀 うれしさをむかしハ袖につゝみけり こよひハ身にもあまりぬるかな
平家ニ西王母と云し人も昔はありて今はなし 東方朔といひしものも名をのみきゝて目にはみえず 又列仙傳ニ委
よしやハヨシマヽヨノ意ナリ 朗詠 言語巧偸鸚鵡舌
無情ナシ

ゐめ冬の富士ハ沫芙ふ秋の蓋 仝
むとさしゐる 宿の一瓶 角
饅頭をきゝ 禅き袖ふゝるゝる 仝
うき世ふつけて 疑ぬ人ハ枕 人
一西王母 東方朔も同ふハ見れ 仝
よしや鸚鵡の舌のみしうき 角
なちきすれ 戸ふゝまゝふるゝ衣の蓋 仝
恋の秘とも みきふ種ゝのかまん 人
やゝ思ひ棄たし 秋ふ稲を打稲て 仝
米つく音も 師走なりけり 角
夕鳥ゐの ちまゝふ暇 のゝゝ 仝

空蝉の離魂の燃

念者法師ハ男色之

不動様ト云ニ附テ念者ノ立ヲ附タルハ又
夕やくれ 実ニヨトカヒヲ解ヲ絶タリ
男地獄

…鉤(カギ)り 人

念者法師ハ秋のゆきかせ　人

夕やくれやさしく紙衣着　仝

身まかりける実なげの窓　角

我不醮ナリ

醍醐帝ノ後光明帝…痘瘡ニテ崩御アリトカヤ
麻疹ハ万寿二年…流行スト…

香もらじ新酒ハ人の腥やさき　嵐雪

秋うそ寒し 谷も間 通　逃人

…下の花　人

疱瘡良の透とある経蔵のうき　仝

咽ハ来ぬ老朽の髪り留る　雪

間ゆるを恥しくのうき雲よ　仝

後をひようをいふうちりなきき　越

児輩ノ賭（カケ）ノ遊

不断桜ハ伊勢白子駅ニアリ

いくつの笑を笑ふ強力（ガウリキ）　人

穴いちよ鼻うちちらひ手枕　仝

ひらなかさして伊勢の八郎　角

満月ふふ桜をさそふめぐみ　仝

我不醂（ワガモフミ不醂ナリ）

香まらじ新酒ハ人の醒やすき　嵐雪

秋うそ寒し……　越人

……塚下のぞ　人

疱瘡（モガサ）臭の透とをる種蓋の白き　仝

唱歌（シヤウカ）ハ……　雪

聞こゆる……のうき雲を　仝

後をひよつと……　越

一念者法師ハ男色之

和名抄鵁鶄（ゴイサギ）胡慈

呼續ノ濱尾張ナリ簗出島居崎ヨリ笠寺村ノ辺リマテヲ云トソ

念志法師ハ秋のはつかせ　人

夕まくれやまうらの鈴衣被着　仝

手まくらの実ながけの窓　角

花もうる小気食の跡ゆめて　仝

ものまろぬ富士の麓なり　人

世の気はなまつき猿をとく　仝

むしろ敷つき嬰（ヨヒツキ）の妻　仝

こゝろきは唄ニまぎれしのなの雲の林は明るのうられりお もちろく

疱瘡（モ）良の遠とまる館薬のむき

咽痛（シヤウカ）ハ春ふたたび霧りやる

間ころをあれしのうき雲よ

後そひよつをいふうちりかまき

人　仝　雪　仝　越

博物志曰人中酒不解治之以湯自漬則愈湯并作酒氣味也又俳草紙二曰

[illegible]

我不醺ナリ

手まらじ新酒ハ人の醒やすき
秋の空し以て酒　嬉
月の影書きつ引ちふれ中よ岸て

嵐雪
越人
仝

不動ト云ニ夕ぐれ男地獄

念者法師ハ男色之

念者法師ハ秋のゆきかせ
夕まくれやさうらふ衣紙着
ちまへひくる実ゆけの窓

人
仝
角

不断桜ト云ニ附テ念者ノ云ヲ附タルハ又
夕ヤくれ 実ニヲトカヒヲ解ニ絶タリ
男地獄ル

念者法師ハ男色之

念者法師ハ秋のゆきかせ　人

雪もきえ込ニ年生ノ云ナレハ不断ト云ニ障ラズ双社又うらめしきと見侍し

夕ぐれやうらみ紙衣物着　仝

ちまくひくる実ばげの窓　角

寿作ニアラズ只絶妻ノ酒ニ酔テタレバ酒サマシノ薬草ヲ取リニ出ル事ニ外郎ノ錦袋円ノ紫金錠ト云ハ実論乙

疱ハ聖武天皇天平年中筑紫人新羅ニ航ミ感染リ来ル時ニ秦澄和尚法ヲ修シテ瘡ノ息災ト此病トケ

醍醐帝ノ後光厳帝モ疱瘡ニテ崩玉フトアリトカヤ

麻疹ハ万寿二年始メテ流行スト妊心者此治難ハ

うるさきや唄ニまきれしのなの
雪ハ取ハ明るのうちもれりお
もえるく

ゐ面葉の笑みげまが　雪

もの行ひて数寄りら里の雪　仝

川越くまハ堀下のそ　人

疱瘡良の透とある種蓋のゆき　仝

唱歌ハ〔シャウカ〕春ふきあまりやる　雪

間ゐるをれしのうき雲よ　仝

後をひよつをいふうちりあまき　越

念者法師ハ男色之
附テ念者ノ意ヲ附タルハ又
…ニヲトカヒヲ解ト絶タリ

念者法師ハ秋のゆきかせ　人
雪ニきえ込ニ年生ノ意ナレハ不断ニ降ナズ社又うらめしきくと　貞徳ノ
夕まくれやまうらふ郎をきぬ衣物着　仝
ゆきまくらるる実ぬげの窓　角

…只此言ノ酒ニ酔テタレバ酒サマシノ第一薬ヲ…
天平年中施薬人新羅ニ航ニ感…
光明皇后…疱瘡ニテ崩仕アリトカヤ
…二年始メテ流行ストモ妊心者…

こゐるきゃ唄ニきまねしのなの
雲やれハ略るかくられりお
もそるく

ゐ酒葉の宿はけまよひ　雪
まろ給ゆひて牧羊りら故里の雪　仝
川越くきハ城下の空　人
疱瘡の児の透とぬる雑謡のうき　仝
唱歌ハ志ふ先孫あそりやる　雪
問ゆるを水れくのうき雲よ　仝
後きひよつをいふうちりなまき　越

…取リニ出ル事ニ外郎ノ錦袋円ノ常全錠ノト云ハ実論也
…モルト時ニ泰澄和尚法ヲ修シテ漸ク息災ニト此病トナ…

気もとくド新儀ハ
人の破をそき

古今集ノ三鳥三木ノ内ニテ諸論一定セズ

やハ歎息

歎美ノや　三寸白雪降梧桐ニ

[illegible]

[illegible]も油かけたる[illegible]　仝

行灯[illegible]浪人　雪

[illegible]物を[illegible]一所[illegible]従　仝

[illegible]一宵の月影　人

白露の[illegible]女[illegible]　仝

[illegible]の醫者の[illegible]や　雪

[illegible]日ハ[illegible]　人

[illegible]　仝

初雪や[illegible]のひかる桐の[illegible]　鄙水

日のみ[illegible]の[illegible]起　蒿梧

治定ノやナリウタガヒニ非ス

不平（フテクサレ）原本とくしハ書損

無名抄ニ陸奥守為仲任果テ登リけるに宮城野の萩をほりて長櫃に入れて登りける面影カ

齎子（テブト）吾脊子（フセコ）ハ夫ナリ　縁ハへりて今縁ニ作ルハ却テ誤カ

[illegible]トイフコトナリソレヨリ三弦ニウツレリ

擽（コソグリ）

山川や[illegible]　仝

[illegible]を[illegible]　野水

思ふさま押かへす月[illegible]　仝

[illegible]不平[illegible]長櫃（ヒツ）の萩　蒿梧

萩[illegible]

押[illegible]

川越の[illegible]　吾

[illegible]　梧

[illegible]　吾

[illegible]　梧

[illegible]　水

卯ノ價ヨモツテモ元禄頃ノ時世ヲモヒヤルヘシ

やハ柏子ナリ

旅まくらいつのころから寄麗さ　桂
亭ゝ王子ちの王子も一文ま　水
下戸ハ皆いく月のおもろけ　桂
耳や歯やようてもむの覚なし　水
具足ゑきれた紅ふの初年　桂
いやしくも覚ぬ法なく不　今
山伏徒て人出うちなり　牙
くらうしとくさびぬけくる米車　桂
桃灯見てなとくきこれ　水
何さすさ泣くも髪を振おふ公　桂
恋うくもまうも笑ぬつれなさき　水

延道行華ノ道筋ニ延ヲ敷ヿナリ

瑞籬（ミヅガキ）

大和　くらかり峠ハ伊賀ト河内ノ境ナリ

ちかしいやる事かうきの世て　桂
かける府中を鉛積うり　牙
白出て雲のちきさく面白や　桂
柳ちる軒か倒の遊（エン）路　水
軒ちらく月こ秋さいれ五十宮　同
寂（セ）しき秋を女夫（ヨト）落りより　桂
占をよくを不残さうらぞやかし　水
黍（きビ）おてちやたいらしへの溢　同
躬毎の年魚伸る三の頃ふ　桂
謹よりおを出へ見てさる　同
来るのくらかり峠こえまかし　牙

幸種
古今ニさきくさの三ツも四ツ葉ト讀リ 檜ヲ云 正木ハ良材ヲ云カ
すさきさる飛彈のエトヨメレハ幸種ヤハ正木ノ傍ヂノヤナルカ
宗鑑引正木の綱ナト詠ハ正木のかつら綱ヵ後撰ニ歌アリ
和名抄ニ鮒鯽鰺皆同シ

祢ゆうこへと雪花鳴之　棱

一里の炭竈ハいつくとかり　一井

かけひの水の氷かゝる朝　嵐渓

さきくさや正木を引て誘ふらん　竹及

肩衣きて海に詣ふ人　呑虹

夕月の光をかへき塘きハ　渓

あらえにも鮒をつるとよむ秋　井

里深く踊太鼓に二三日　虹

宮司り雲井にあそふ秋さうき　及

問れても御まかりのゝ云ふくき　井

紀州名草ノ郡濱中村長保寺紀州家ノ御廟屋アリ
さし矢ハ鴨羽ニテ巻ワラヲ射ル

蔦花さへてきてきりとしく文　渓

うるしる焚起をゝふ汐さ守　及

宮ゆく枝野の越の雪鰹　虹

ほうろう娘ありそハ打たふん　渓

皓とりハ皓る女中なり　井

浦風に鰭吹おくる月涼し　虹

見るもかしこき紀行の詣屋　及

若者のさし矢射てちらちの誉　井

蒜かゝふ恙にさきかり谷里　渓

来の暮けうとしも睡るらん　及

身子の跡の糺に落つく　虹

扛秤（チキリ）

終（ツヒ）ノ義ニ非ズ俗ノ突（ツイ）ナリ俳ニハ此ツイ多シ

御（オ）行状（アリサマ）ノ詞物語ニ多シ

挟衣田入道ノ室ノ峨峨章ノ所ニテ浮ク仏ノ為ニ入ラセ玉ヒ浮ク銭ニ隠レサセ玉ヒケルヲ狭衣ノ大将ヨリ浮ク志さきひめひれともヒタスラニモノウリオホシメサセテ人ニカうしアヒまつ事ナリモ惜リ玉フリ前タリ気色ヲ押ヘテ居タル伊ヲ玄ヒスカレタルモノし

ちゞりちゞらうちもさわぐ手を洗ふ　桴

笠着経ばかり敷居を釣り　井

木挟（ハサミ）に晴れて葉もし松の枝　杠

袴（ハカマ）にかゝる人々の興　及

法事よなりて焚（ヤイト）の煙もなき　井

まつらもせんなつゐ棟の月　隣

夢ちて俵子のかけのうき空き　及

こゑるるやう小さ自む荻の葉　杠

法き荻入室のちらちらは　桴

志引かぶる人の足音　井

毒なりと瓜一切も喰ぬ之　杠

鶤鶏（トウマル）

折風ゑちてとゝる白酔（ダク）　及

板屋ますて鐘ふちゝき庭の内　井

立袖のぬけくる黒き唐人　隣

ぬくしと御郷のたちぬ茶器　杠

見えたまふといちつくしく　及

珎碩近江瀬田人濵田氏洒落堂晩以洒堂為名

荘子逍遙遊ニ恵子謂荘子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實五石以盛水漿其堅不能自挙也剖之以為瓢則瓠落無所容非不呺然大也吾為其無用而掊之荘子曰夫子固拙於用大今子有五石之瓠何不慮以為大樽而浮乎江湖而憂其瓠落無所容則夫子猶有蓬之心也夫

後漢書列傳曰長房翁乃與俱入壷中唯見玉堂嚴麗

陽秋雪子規ニテ春夏秋冬ヲ尽セリ

洒落堂

洒落の珎碩。京にひさしく住なれり。
是ハられ水漿をもり。酒をのまし
なむ瓢をもはなれ。或ハ大樽に
浩りて。江湖をとうられ。しのふる
ふくべにも窶なり。君すらく汲
の恵子ならて用ることをしらん。
つらくきをとうりて睡り。はや
まりて时ちなる踊る。躍て尽る
ふ日月陽秋をうつされしてて。
雪の明けわの罟の郭公も

藻思 藻ハ喩文ニ文思ニ同シ

元稹カ詩ニ壷中ノ天地乾坤ノ外

越人名分利氏姓越智熊本浪士尾ノ名古屋ニ住享保ノ末帰藩ス

かけたるとのちのくぞなか吾知今も
たんえまくらりて皆風雅の藻思を
いくりきふられ。是ハいつきの不まして。
乾坤のおたまることを我。出てこるを
云て。無しらちをなとり入

越智

越人

元禄三六月

翁曰花見の句のかゝりを少し
得て軽みをしたりと也

鞁(ヒキハダ)又鞍　鞘ハ俗字也

司召八月十一日諸官人ニ爵
禄ヲ賜フ

杣ハ和字ナリ和名抄ニ功程
式ニ出タリ

信濃國諏(スハ)方

俗謂ハ身丈ノ称脊(セイ)此字也

花見

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁

西日のどかによき天気なり　珍碩

旅人の虱かき行春暮て　曲水

はきも習はぬ太刀の鞘(ヒキハダ)　翁

月待て仮の内裏の司召　碩

籾(モミ)臼つくる杣がはやわざ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　翁

名はさまざまに降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　翁

伊勢地名

一身田同国高田派本山

万葉ニ羅(ウスモノ)トモ有リ目サヽシテ
堀川百首ニうすものをきたる
しのあふぎおもふ身ニ云云

いふ事を唯一方へ落しけり　碩

細き筋より恋つのりつゝ　水

物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁

月見る顔の袖おもき露　碩

秋風の船をこはがる波の音　水

雁ゆくかたや白子若松　翁

千部讀花の盛の一身田(イシンデン)　碩

順禮死ぬる道のかげろふ　水

何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁

文書ほどの力さへなき　碩

羅(ウスモノ)に日をいとはるゝ御かたち　水

翁曰花見の句のかゝりを少し
得て軽みをしたり

鞁（ヒキハダ）皮又韊　鞲ハ俗字ナリ

司召八月十一日諸官人ニ爵
禄ヲ賜フ

杣ハ和字ナリ和名抄ニ功程
式ニ出タリ

信濃國諏（ス）訪（ハ）方

俗謂ニハ身丈ノ大ナルヲ称ス脊（セイ）此字也

五月雨、夕立、秋雨ト様々ニ降替リ

花見

木のもとに汁も膾も桜かな　翁

西日のどかによき天気なり　珍碩

旅人の虱かき行春暮て　曲水

はきも習はぬ太刀の鞘（ヒキハダ）　翁

月待て仮の内裏の司召　碩

籾（モミ）臼つくる杣がはやわざ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　翁

名はさまざまに降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　翁

伊勢地名

一身田同国高田派本山

万葉ニ寤（うつゝ）トモ有目サメシ事也
堀川百首ニうつゝをゆめとおもひな
しのあとにあはぬ…云云

いふ事を唯一方へ落しけり　碩

ほそき筋より恋つのりつゝ　水

物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁

月見る顔の袖おもき露　碩

秋風の船をこはがる波の音　水

雁ゆくかたや白子若松　翁

千部読花の盛の一身（イシ）田（ンデン）　碩

巡礼死ぬる道のかげろふ　水

何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁

文書ほどの力さへなき　碩

羅（ウスモノ）に日をいとはるゝ御かたち　水

同季ハ五句去
中ニ他ノ季ナク
二ハ廿句去リテモ也ズ

花山院ノ面影ニヤ元亨釈書ニ見エタリ
万葉ニ朝茂香紀関守ガ手束弓トアリ紀ノ関ハ紀州和泉ノ境ナリ　雄山関ちし
中く八却テ(カヘツテ)
隠逸傳増賀(ゾウガ)ノ翁ナトノ面カゲニヤ

熊野みたきと泣給ひけり　荷
手束弓紀の関守が頑に　硯
久仁親王年十才熊野ヘミキリニ参ルヘキヨシ作セラレ是ハ泣テ乞ケルトノ[illegible]
山口[illegible]
酒ではげたるあたま成らん　水
双六の目をのぞくまで暮かゝり　荷
仮の持仏にむかふ念仏　硯
中々に土間に居れば蚤もなし　水
我名は里のなぶりものなり　荷
憎れていらぬ躍の肝を煎　硯
月夜月夜に明渡る月　水
花薄あまりまねけばうら枯て　荷
唯四方なる草庵の露　硯

此阿、兼好ハ文リ衣ニ清貧ノ粧ヲ點セシナル
花ノ字三句去リ
句引ハ冬ノ日春ノ日荒野ノ三集ニハナシ　鼎集以下原本ニ在ト云
翁十二　珎碩十二　野水十二
古本ニ名もおぼつかなし目を覚しぬると有モアリ手五條ニ俗諧ノ意味をしらぬる人ハ一搭をあるべし相爲の脇よしへ
面(ツラ)
播津ヨリ丹波ヘ越ス峠也一里程ノ峠嶮岨ニ狭ク石多ク木根ハビコリ牛馬ヲ通ルニ通ハレずニアラズ臑(スネ)ヲ摺(スリ)峠ト云トカヤ

一貫の銭むつかしと返しけり　水
医者のくすりは飲ぬ分別　荷
花咲けば芳野あたりを欠廻　硯
虻にさゝるゝ春の山中　水
いろいろの名もむつかしや春の草　珎硯
うたれて蝶の夢はさめぬる　荷
[illegible]の花咲時につらをさし出て　路通
[illegible]のとゞかぬ峠越しかり　仝
[illegible]の葉をかさねて含む[illegible]　硯
秋をまねひて月よまぬらん　仝

山院ノ面影ニヤ元亨釈書三
エタリ
葉ニ朝臣吉紀関守ヲ手
弓トアリ紀ノ関ハ紀州和泉
見ナリ 雄山関ナリ

ク八却テ(カヘッテ)
逆傳増(マシテ)ノ翁ナトノ面カケ

熊野みたきと泣給ひけり　翁

（久仁親王年十才熊野ヘミキリニ参ルヘキヨシ作セラ玉ハ泣テヒタルトノ御物語ヘリ）

手束弓紀の関守か頑に　碩

（岩台司治郎カ宗ニ行ヘシ元来ナルキナルトシナ横杭テ多カナト峠ナストカヤ）

酒てはけたるあたま成らん　水

双六の目をのそくまて暮かゝり　翁

仮の持仏にむかふ念仏　碩

中々に土間に居れは蚤もなし　水

我名は里のなふりもの也　翁

憎れていらぬ躍の肝を煎　碩

月夜月夜に明渡る月　水

花薄あまりまねけはうら枯て　翁

唯四方なる草庵の露　碩

阿ハ兼好ハ交リ友ニ清貧ノ
鏡ヶ影セシナリ
字三句去ナリ
引ハ冬ノ日春ノ日荒野ノ三集
ナシ　曠集以下原本ニ在ル号
ス
翁十二　珎碩十二　曲水十二
本ニ名ヲおきならし目を定
ぬる有モアリテ五條ニ俗諧
意味をしらぬる人ニ一様を
べし相異の脳よいへり

波ヲ越ス峠ニ一里花ノ木峠
木根ハビコリ牛馬ミカノ通ル
新和摺(スリ)峠ト云トカヤ

一貫の銭むつかしと返しけり　水

医者のくすりは飲ぬ分別　翁

もの煩も芳野なるを見廻りて　水

虻(アブ)にさゝるゝ春の山中　碩

いろいろの名もむつかしや春の草　珎碩

うちれて蝶の夢ハ覚ぬる　翁

椿の花実につらをさし出て　路通

嶮のなみならぬ峠越けり　仝

宗祇の墓をかすませる今名高き　碩

歌をまうひて月よまのくふ　仝

いろいろの名もむつかしや春の草
うちれて蝶の夢ハ覚ぬる

大塔ノ宮ノ御カ

元禄比松の葉トイヘル冊子ノ中小六何ニト唄出ス一フシヨミリ

亀山ト生く草のみ荷りといへるをとめむ方もあきあきらふ
草ト云古きヲ治レタルヲ庄野ナ附ケ前句亀山ノ草トアル牛草トスカ
万葉
飼飯の海のすはよく荷しくつり瓶のみさとて見ゆる海士の釣舟
羽ゝさす嶋の海の方はよくを波の心みのりて浪らむ
布波ノ海
ヨシトカヤ

庄野 伊勢

上ハナキモト云ハ二ハヒト読カ
又ヒ 和日トモ

秋の色窓も野の色稲のかり　了
こゝそこと花すゝき待　仝
うつ島の羽織を着て引まはせ　碩
小六うたひし中の高なき　仝
鯰（ハエ）釣のちらさく大井の川の鵜　通
魚備すてをむかしきき　仝
しらつ一葉もうれ入鉢の露　碩
庄野の里哉犬におとされ　仝
旅路雅さんの軀（カバ）つれて　通
むかしならいよ自ら富士を浴　仝
汐のさす孫の木まで和日（ニハヒ）之　碩

蕎麦ニ温飩ノ附一奇之

李（スモヽ）

楞厳経ニ三エタリ

生鯛ながる浦の春かな　仝
此村の廣きも醫者のなき所　巻竹
そろばんおけいたの寿かいふ　越人
かぞへる銭退屈もされする　竹
まつ泣出た酒の醒き八　人
東のめやる秋の夕ぞ常廣き　竹
蕎麦売る小山の胴中　人
うどんうつ里のをれの白の新　竹
をとも拍子の皆撰むし　人
跡ふし也繭（マユ）烹（ニル）えもたとふり　竹
文殊の智恵も繋（ハゴ）持る惠（ヱ）癡（チ）　人

鰲頭

枕草紙ニ　あせの香すこし　かゝへたるきぬのうすきを
引かつきてトアリ

発句九　翁一　路通八
荷兮十　越人

なれ加減みとハ出来ぬかけ隠　兮
ほとゝもせぬる落る納杣　人
恋のふ秋のをみうなきて笑せす　兮
笛より新きこぬふかしして　仝
汗のまふ錢かえてむをとう鉢し　人
あそりゝ宿とうちなげて降　仝
むさかり又る人の僕宮ふ　兮
まハ旅とも旅も曾鳥鞍　仝

堺下

鉄炮のさきよせる外月弘　野径

山家集ニ汐そむるますほの小貝ひろふとて色の濱とハいふにやあらん又後撰集梅かゝをさくらの花に薫
柿の小貝ハ　剃口
原本おしかれてト見エレトモおそれハ書損カ異本ニ又おもひそこニ作ル覺ニヤ

砂の小麦の瘦てもろく　里東
西風まかれの小貝拾もせて　泥土
なすぬる一筋の鉚ひうまかり　乙州
暑いそうい二人名あけるさかみ　怒誰
秋の萩書の御中の動　珍碩
あせむひ心細さすおそをれて　筆
同の仲おもく人舌をかちある　野径
ひとゝも又川原雨ょく買え　東
新のをかしきしはれつきえ　土
まみる神ハま厳をうらやそ　嵐
一里こそり山の下刈　誰

枕草紙ニ　あせの香すこしかゝえたるきぬのうすきを引かつきてとあり

拾穎九　翁一　路通八
荷兮十　越人

なれ加減よとハ出来ずかけ嘘　兮
ほとゝもせぬる簾ゝ鶴　椒人
志のふ枝のをみるなくて笑む　兮
逢よる新を見ぬおかしくて　仝
汗の香氏かくえてむをとる誂　人
其きうる南ちらちなけて降　仝
むさかり又ある人の儀まふ　兮
去ハ翁ともおもはまる　仝
鉄炮のきこまくある外月外　野径
　　　城下

陀ノ侍従ト云好色一物ト云女アリ　業平ト中ノ君ニ如クト恵シ先ヲ…
仲ノ君ニ如クト…　人ノ批合外シメ…
…至リ…　待従ノ君中戸ノ批合…

山家集ニ汐そむるますほの小貝ひろふとて色の濱とハいふにやあらん又後撰集梅かえをさゝきまとふ…
柿の小貝ハ　荊口
原本おなしくれてト見エレトモおそらくハ書損カ異本ニ又おもなくれて二作ル　勿論ニヤ

砂の小麦の瘠てちらく　里東
西風よまゝれの小貝拾せて　泥土
なまぬる一葉餬いろ稲とり　乙州
暮いそうハ二人きかけるまつのふ　怒誰
秋の夜書の和中の都り　珍碩
わせも心細露まおそをれて　筆
同の帷おまく天を打ちかる　野径
いやまも又川原喉をよくよく覚え　去来
新のをかしをしまれつきて　土
子ゝみな鉢ま厳をうちやて　游
一里こざり山の下刈　誰

日兆上人吉野山笙ノ窟ニテ[illegible]

新古今集ニ寂莫の苔の岩戸のしづけきになみだの雨のふらぬ日ぞなき

北設ハ千百 新渡ハ四文[illegible]ノ通引ナシト
又唐玄宗帝[illegible]録山ノ故事
鶴林[illegible]三才[illegible]絵ノ[illegible]

一本ニ録ハ書損

博奕（バクチ）

鎌倉ニ[illegible]テ又[illegible]有[illegible]

天知らぬ岩屋に花も留らされ　土
それ世を泪言と時る　京
雪の母子ある越の遊女の空さりま　徑
恋がまつはりくするの鉢　お
月ちまた庭を出て語らせ　碩
蕨の塩ふかうき早蕨　荏
来るまつけても都忘られ　来
半象遠ひの坊主法師　碩
春よりの花の一環　お
古きたうちの鉢るかまくち　徑
時くいる娃とも烏帽子まで　荏

ソウ
嗽（スハイキ）
スハト読可ナリ
咳気ガイト読ベカラズセキケ[illegible]可ナリ

[illegible]蛤[illegible]
[illegible]ハ檀ノ浦ニ[illegible]タリ
[illegible]大[illegible]家ノ[illegible]

関ト亀山ノ間ニ大岡寺縄手アリナハ丁ナリ
硬ハ痛ムナリ用ハ要所ニテ[illegible]ヲ
荒砕ナリ夜着一ツ祈リ[illegible]
[illegible]翁ノ句冬ナリ
[illegible]草追加ニ菜食冬ノ部ニ出又花屋日記ニ闌取テ菜め[illegible]夜御この丸ト
アリ芭ハ此句冬ナルヘシ
咳気ハ風邪ヲ云フ丁五勝間ニ見エ

砒礵を天窓に[illegible]の蛤　土
黄昏の幽霊の泣やらん　碩
連も力も皆座頭之　京
から風の大岡寺縄手吹透し　徑
[illegible]のきも[illegible]雨[illegible]きき　お
糊剥き萩[illegible]座敷で　土
夕辺の月よ菜食臭出す　荏
看経の喇叭[illegible]咳気声　来
四十八[illegible]のくりくりき[illegible]　碩
髪くせよ枕の[illegible]て　お
[illegible]を細目[illegible]て　徑

野径 六　里東 六　泥土 六
乙州 六　怒誰 六　珍碩 五
筆 一

根本律ノ二載鶯一鼈ノ古事ニヨルト又老亀烹テ不爛移ニ禍於古桒ト云云乙州カ事跡ニヨリテ考アレト略
雑ノ巻ハ才三ニテ當季定ムルアリ

本式ナタオ二巻ヒ目ニ陽連附テ所有ベシ是則陽連附ノ傳ニ大切ノ事ニ夫ヲ後ニ附合タル三癸タト長タヲ附短タト短タヲ附ル也此ノ間ニ御前行燈ニ風呂迄ヲ傳授口決故ニ解スヘ潜上ノ沙汰シ

冬　秋 、 、

杉村の花は若葉に家つきて　沾
田の片隅に苗のとりさし　土

雑

亀の甲烹らるゝ時は鳴もせず　乙州
（十月十二月甲ヲ裁カヲ喰ス去ハ三ツ木彩化ヲ為ヘハト初メ乙ヲマチテ三ト室メタリ）
唯牛糞に風のふく音　珍碩
百姓の木綿仕まへハ冬の来て　里東
小唄そろふるからうすの縄　探志
獨寝て奥の間ひろき旅の月　昌房
蟷螂落てきゆる切燈　正秀
秋萩の御前にちらき坊主衆　及肩
風呂の加減の声つかふなり　野径

魰魚子(カマス)ソノ色白シ
寝語(ネコト)
鷹ノ餌ノ雀鳴て気きさらくヲ云
雲もたれハ大雪の後日和ノ模様ヲ云

春 、 、 秋 、 、 冬

鶯の室き都まで鳴出し　二嘯
雪のかゝるかますこの魚　乙州
初午に雛の衣を裁ながら　珍碩
人の癖に寝言をなりける　里東
繁薄が上に吹とほし笛の役　探志
来ごとに都へ出ハ鶏啼　昌房
鉢入の中宿下て月を待　秀
まつ上京も只帰るやゝ寒　肩
蓋にかゝる鳥羽の町家の年貢米　径
雀を荷ふ篭のぢらちりき　嘯
鷹居る日ハどんみりと雲をたれて　州

野径六　里東六　泥土六
乙州六　怒誰六　珍碩五
蘿一

根本律ノ二載鷲ノ一鷲ノ古事ニヨルト又老亀烹テ不爛移ニ禍於古桑ニ云云乙州カ事跡ニヨリテ考アレド略

雑ノ巻ハ才三ニテ當季定ムルアリ

冬

（朱）巻目ニ陽達附一ケ所有ベシ
ノ傳　大切ノ事ニ夫ヲ後ニ
タト長タヲ附短タト短
ノ間ニ御前行燈ニ風
夜ロ吹程ニ解シ了　潜上

秋　、　、

杉村の花は若葉に雲つき　泥
田の片隅に苗のとりさし　土

雑

亀の甲烹らるゝ時は鳴もせず　乙州
（朱）十月十日甲ヲ裁カヲ喰ス去ハ三ツ木綿仕舞ヘハト初文シテ冬ニ三ト定メタリ
唯牛糞に風のふく音　珍碩
る娃の木綿仕まへハ冬の来て　里東
小唄そろはすからうすの縄　探志
猫まそて夏の目ひらき親の有　昌房
蟷螂落てきゆる灯の燃　正秀
秋萩の御前にちるを坊主衆　及肩
風呂の加減の志つかなりけり　野径

梭魚子（カマス）ノ色白シ

春　、　、

寝語（ネゴト）

秋　、　、

鷹ノ餌ノ雀鳴ちぎえきくまく

冬　云きたれハ大雪の後日和ノ挑ヲ云

鶯の音きゆきて鳴出し　二嘯
雪の中までかいまて子の薤　乙州
初ひよ雛の声を揺ながら　珍碩
人の鷹に患をかける　里東
淡竈か巣に吹ちらし笛の役　探志
霜ごとに起て歩ハ鶴啼　昌房
鉄入の中落下て有ありけり　秀
中く上京も大肯るやゝ寒き　肩
盆（カサ）に蜜る鳥羽の町家のそ手米　径
雀を花ふ籠のちらしき　嘯
鶯晴る日ハどんみりと雲をれて　州

陽達附本式ノ
作ノ傳梭ノ一ゝ
猥りニ解スベカラズ

才ニハ木ワタ 爰ハ木綿(モメン)ニヤ 不審
一本ニ摶ニ作ル書損カ
悍(カンリ)ハ勇急ナル
椆ハ店ニ仝シ
鮭(サケ)

夏

綿いれなるあつの出らぬる　旅
際て憂き木綿袷の袖まくる　東
撰分まされて空よ明の月　志
晴かりに茶纐纈の香もやし付　房
穂るを喰る糸やうり口　秀
いまりぬる鍵一所に擬篭　扇

秋

水汲こゝろ鯉椆(店)の秋　徑
さらしを切義の紙まよ風悍て　嘯
手かの庵よもわのくの妙る月　嵐
喰海よ味の付こそ嬉しけれ　旅

冬

膝たくうちハ唄よ店鉢鳴　東

雅ヤラカ　夕ニ

最上(モガミ)　出羽國
茨ハ以茅ヲ蓋ヲ屋ヲ也
節ごハ節衣(キ)の方言之
句引九名　畧
角大師井出の蛙の手ヲ誤
夫木抄ニ山里の刈田ヲ面ニおのつからそまむかふるのゝはるのロやかり　範光
白氏文集 蹲踞ノ大者ハ貪庸ナリ

同をぬるも気のつまる月なけて　志
慈まきかくまよ云之侍　房
手みしうまく手拭にちて経まさげ　秀
魂を集る寺の上(ゲ)ぃ蔵(キ)　扇
むの残書のる弥よ茸で臥て　徑
さらすよ狐ふ獅子ならまる　嘯

田野　正秀
膝(アセ)る和苗代時の角大師
明れハ家む灯籠の色　松瓶
端ふその良やくる鳴きの虫　今
かんかんきうしまいり口の文字　秀

元三大師ナリ角大師ノアリハ世ニ知ル所ヲ稲ノ祭ニ田ノ畔ニ関東ニテ是ヲ立テ田ヲ祭ルニ唐土ニテ用ノ石櫻ヲ祭ル我朝ニテハ宇賀ノ依魂ナ祭ルニおしらう元三大師ヲ祭ル田舎ニテ苗代ノ呪ニ角大師ノ札ナホ又ハ
縄ニ挿ミ立ル乙信濃ニテハ苗代呪ニ蛙ノ千文字ヲ串ニ挿テ立

才三ハ木ワタ 爰ハ木綿(モメン)不苦ニヤ
一本ニ搏ニ作ル書損カ
悍(カンリ)ハ勇急ナリ
㮈ハ店ニ仝シ
鮮

夏　秋　、　、　冬

締ひはなしに夢のむかしぬける　旅
除て愛き木綿の袷まき落　东
擬作まされて堂まの明ぬの　志
晴かりに茶鑵の盖も抑し付　房
悍るを晴る手やまくり口　秀
いきりたる捷一筋に狭筅　肩
水汲こゝろ鯉㮈の秋　經
さらしもを切龍の紙まふ風吹て　嘯
寺かの序にもおのゝの打る日　浴
喰あまし味の付こそ嬉しけれ　旅
膝まくらちハ吹に居鮮る　东

最上(モカミ) 出羽國
茨ハ以茅ヲ蓋屋ヲ也
篦ゴハ節衣の方言之
句引九名 畧
角大師井山の蛙の手ヲ取
夫木抄ニ 山里の刈田ヶ面ニおのつからそまなからのはかのロやすり　範光
白氏文集 歎簡ノ大者ハ貧庸ナリ

同をぬかも気のつきまなれなけて　志
慈まもかくまつ乾之侍　房
手みしりまて拭ひちて纏まさけ　秀
隠を集る寺の上ハ嶽　肩
ひのえ書の経まなぎご是て　經
さらまねふ獅子拈まみ　嘯

田野　正秀

元三大師ナリ角大師ノ丁ハ世ニ知ル所之稲ノ祭ニ田ノ畔ニ関東ニテ是ヲ立テ田ヲ祭ルニ唐土ニテ用ノ伝攫ヲ祭ル我朝ニテハ宇賀ノ使魂ナル祭ル元三大師モ祭ル田舎ニテ苗代ノ兜ニ角大師ノ札ナホ又ハ

謝ろ田の苗代時の角大師

縄ニ捧ミ立ミ乞食ハ苗代兜ニ蛙ノ手ヲ取ヲ串ニ挿ミテ之

明れハ一露むの壁の籠の鳥　松硯
歩みその月やくまれ吾の去　仝
かゆもをうしきゝ口の文字　秀

愛ㄅ服羽巴近 てよきナシ之 太山彩

利休千氏仕豊臣家領三千石天正十八年没
ゆり申三句つけり
古今集ニ秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴
紫ノ上ノ君ノ御ヨリシテ須磨ヘ左遷ノ供ニモ紫ノ上ハ格別ノ御方ヨリ折言文ヲ賜ニ一カドアリ
此物語ハ長ケレハ略ス此伊勢ノ巻ノ御息所ノ野ノ宮ノ別レニ問シクレハ紅ナヲナケテ此ノ上ニ宣ムモ三クノ渡リテ
源氏須磨巻ノ面影ナラン
須磨ノ内裏ノ時狐ノ衣ヲ剥シテ狩ヲ催シ
紀州雄山ノ関守出次郎カ方ヘ弓ヲ借ニ走リ玉フ然ルニ前夜出家ニ狐来リ時衣ハヲ狩猟我身ニ又フアテナナケリトモ云
去テ家ニ帰ラズ時ニ来ル袂ト名ツケトモ云

月新に利休の家を尋にかけ　仝
庭に芋をもらふまゝく　次
虫も誰つゞれさせと鳴やらん　秀
行としの末の寄つぬる　次
折言文を百もむすぶる恋れ路に　秀
なみさぐりけり侍の　次
須磨ハ中〳〵物ふ自由なる聖伝　秀
狐の怨みるすかりもや鳴　次
月朧る師走の雲の銀河　秀
世理み底ゝる猪もまたれん　次
いさぬる大猫若も打ふれて　秀

乃の山の唄ニ誘ひ覚えの種の露吟ておとろく人もなかりしトアリ
禅門ハ男子剃髪ノ称ナリ
藤ニテ編ル窓ナリ
挨さや東鑑ニ時宜

猫だゝる子も飼(チハ)鶏(ホ)に噛んなる　次
江ト酒をも喰底に寝しかり　秀
河ひの山禅(トク)なる中の相　仝
雲雀鳴里ハ畿(ヤヤ)糞(コエ)かきふし　次
火を焚て居る禅門の祖父　秀
本堂ハやゝく荒廃のなら程　次
羅(ラ)綾(リヨウ)の袂きたり鴟の ぬ　秀
盗を痛む人の望を画まして　次
骨なたなもすくなく疲れり　秀
藤垣の窓に蝙蝠を挟おき　次
口エ果ぬいさ(ロロロ)きの時宜　秀

去り梲へ

利休千氏仕豊臣家領三千石天正十八年没

ゆり字三句つゞけり

古今集ニ秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〴〵す鳴

紫ノ上ノ君ノおシヨリシテ須广ヘ左遷ノ後モ紫ノ上ハ格別ノ御方ニヨリ誓文ノ詞ニ一カドアリ

此物語長ケレバ略ク

此伊勢ノ巻ノ御息所ノ野ノ宮ノ別レニ哀シクレハ紀ナサケテ紫ノ上ニ堂々三日ノ渡リモ

源氏須磨巻ノ面影ナラン

狐ノ衣ヲ制衣セント狩ヲ催シ

関守出次郎カ方ヘ弓ヲ借ニ走リ去ア然ルニ前夜出家ニ狐来四時皮ハテ狩猟我身ニ及フアラナクト

月影に利休の家を鼻にかけ　仝

度々芋をもらはるゝ也　旅

虫の音を書つゞけしと聞やらん　秀

行かしの木履あまりつぬる　旅

誓文を百もたてたる別れ路に　秀

なみだぐみけり供の侍　旅

須磨はまだ物不自由なる節句前　秀

狐の恐る弓かりにやる　旅

月祈る師走の空の銀河　秀

堂理ふたてる緒も去ぬれ　旅

いらぬとて大脇指も打くれて　秀

吉の山の唄ニ誰が世なの鐘の声呼ておとろく人もなしトアリ

禅門ハ男子剃髪ノ称ナリ

藤ニテ擬名容ナリ

越さや東鑑ニ時宜

猫かつる子も纔(チヤ)鋒(ホ)に添うらる　旅

江戸酒を吉野で度に恋しがり　秀

あひの山禅(ドク)するの相　仝

雲雀鳴里は既(ヤヤ)糞(コエ)かきわたし　旅

火を吹て居る禅門の祖父　秀

本堂はまだ荒壁のはしら組　旅

羅(ラ)綾(リヨウ)の袂しほりかぬ　秀

歯を痛む人の姿を画にかきて　旅

薦着たる世もすゝき夜寒なり　秀

藤垣の窓に鶺鴒を狭おき　旅

口上果ぬいがぐりの時宜　秀

去リ規ヘ

俳諧世帯集 後集

深川集

今ハ無本ニ作ル

皆ハ偽字

原本吃ハ書損

八入ニテ色ノ濃ヲ云リ

句引略

七部集中翁トノミ書ルハ此一集ノミ其角カ集ニ始テ翁ト書猿蓑撰ノ時翁曰我ヲ翁ト書尤可憚必書コト勿レトノ玉ヘリ滅後尊称ニテ翁ト書スハ苦シカラサルヘシ

さしもに小判かゝらる華襷　枝
秋入初る肥後の隈本　秀
幾日路も苫で身をなる放去船　枝
素布子丁夜寒こなり　秀
沢山に兀めくと叱られて　枝
喰なりけるも猫をゆられ　秀
子規はかん町の石なりのり　枝
やー日の楓本の菩薩立　秀
茶むしに雪路引まち釜ありて　枝
加賀のて結ひあげる場笑　秀

雪路ハ和菓子ニ云千利久茶会ノ仕路次入ノ折雪ヲイトフテ草履ノ裏ニ牛ノ皮ヲ付テ履ケリ 按ルニ此ハ天正十六年大閤秀吉公北野ニ於テ大茶湯ヲ催玉ヒ百間ノ長屋ヲ建テ大小名ハ勿論大分ヲ行セケル雪メニ北野ノ馬場ヲ附テ二タノ間ニ茶湯ヲ於セタル也

八雲ニテ色ノ濃ヲ云リ
句引畧
七部集中翁トノミ書ルハ此集ノミ其角カ集ニ始テ翁ト書
猿蓑撰ノ時翁曰我ヲ翁ト書
尤可憚必書コトナカレトノ玉ヘリ
滅後尊称ニテ翁ト書スハ苦シカラサルヘシ

比山は元めく〳〵と叱られて　破
咲まいりけるも猫をゆられ　秀
子親かふ人町の首はこの　破
や一日の桃木の菩薩モエ　立　秀
おとむて雪踏引きる音ありて　破
小野のまゝ続きをいつる場売　秀

雪踏ハ利休始ニ云テ利久茶会ノ時路次入ノ折雪ヲイトフテ草履ノ裏ニ牛ノ皮ヲ付テ履ケリ　故ニ牛付ハ天正十六年大閤秀吉公北野ニ於テ大茶湯ヲ催玉ヒ百間ノ長屋ヲ建テ大小名ハ勿論大小ヲ行セケル
雪ノ二北野ノ馬場ヲ附テ二タノ間ニ茶湯ヲ持セタル也

雖夕他事稀生

深川集

洗足に客と名のつく寒さ哉　洒堂
𩣺騃あまり好ましもの里　許六
鶺鴒野の鑓をつゝみけて　正輝
麦をも絵七種もたつ　嵐蘭
月の色飛ものまゝ小鉄壺　六
築地のそうかま典菜の鷹　生
相撲むとこかの花の盛ゆて　支考
椋め菖蒲落手竹の子　正雅

斯く八句の内雑の句ありありて書を除て　右好むところなれば
一巻すもやうかして百韻ニ三四巻に一巻二巻の雑

三ツ具角ト集ニ好ム弟一書

尤可憚必書コトカレトノ手ヘリ